

| 授 業 科 目 の 概 要  |                |  |   |  |
|----------------|----------------|--|---|--|
| （教育学部学校教員養成課程） |                |  |   |  |
| 科目区分           | 授業科目の名称        | 講義等の内容   | 備考  |  |
| 共通<br>教育<br>科目 | 基礎<br>教育<br>科目 | 初年次演習  | 初年次演習   | <p>大学での自律した学修へ転換を図るため、市民社会の形成者として求められるコミュニケーション能力、論理的思考や情報検索の方法をはじめとするスタディスキルを習得するとともに、4年間の専門的職業人に向けた学修をどう捉えて意味づけ、意欲的・計画的・反省的に進める必要性を理解することを目指す。多様な知見や経験、能力を持つゲスト講師により提供される全学共通での講義と、それと系統性を持たせた教育単位毎の専門性に根ざした講義・演習活動を通して、学生の言語的表現力、情報読解・分析力、集団討議力、協働作業力などを育む体験的な学修を展開する。</p>  |
|                |                | キャリアデザイン<br>科目   | キャリアデザインⅠ   | <p>自分のキャリアをデザインすることの意義や目的を理解するとともに、これからどのようなキャリア形成をしていきたいのか、他者との対話など活動を通して考えていきます。また、いくつかのワークを実施したりビジョンを可視化することを通じて、これから4年間の生活を自分でマネジメントできる力を身に付けることを目標とします。</p> <p>キャリア・デザインについての基礎的な知識については、講義形式を中心に学習を進めます。また、自らの経験を振り返ったり将来の目標を描いたりすることに関しては、教員養成課程、教育支援専門職養成課程両者が共に学ぶことやグループワーク形式で講義を行うことを通して、多様な価値観の存在に気づくことを目的とします。</p> <p>さらに、ゲストスピーカーによる講演や対談、映画鑑賞などを行い、人生の先輩方のキャリア形成についてお話を伺うことで、自らのキャリア形成を考えるヒントとします。</p> |
|                | キャリアデザインⅡ      |  | <p>「キャリア」（人生・生涯）は、選択および選択の結果生じる役割の連鎖によって形成されますが、それを自律的に構築するためには、自分自身と自分がこれから進む世界を正しく認識して進路（役割）選択を行うとともに、自らが選んだ進路（役割）に適応することが求められます。</p> <p>本授業では、「キャリアデザインⅠ」を基盤としつつ、「仕事と自分」について考えます。特に、労働・職業世界について多角的に理解した上で、教育専門職の魅力や社会的意義について考え、自らの職業観を形成します。また、グループ・ワーク等を通じて社会人として必要な汎用的能力を培うとともに、教育専門職として求められる資質・能力を把握して自己の課題への認識を深め、キャリア・パスの明確化をはかります。また、キャリア形成に大きな影響を与える要因の1つである「ジェンダー」にも着目し、働くこととの関連から検討します。</p> |  |
| 課題探求<br>科目     | 市民リテラシー        | <p>活気ある市民社会の存立は、それを構成する諸個人の主体性にこそ負っている。そのような主体性ある個人に求められる一連の資質（知識・教養、エートス、知的能力など）を一括りに「市民リテラシー」と称するならば、そのような資質の養成こそが、この市民リテラシー科目の目標とするところである。本科目では、具体例を挙げるならば、倫理・歴史・ナショナリズム・ジェンダー・環境・メディアなど、市民社会で繰り返し問われるトピックが取り上げられ、それらのトピックを巡って授業が展開されることになる。</p>                        |   |  |
|                | 多文化リテラシー       | <p>「他者」の価値観とその背景にある歴史や文化を学びつつ、「自ら」の価値観を問い直し、客観的に捉えることができるようになるためのスキルを身に付けていく。講義の前半は、生活様式や社会習慣、ものの考え方などについて、日本と異文化との比較も行いながら、文化の多様性や国際性について知見を広げていく。後半では、テーマを決めて、より深く文化や歴史、哲学について追究していくことによって、さまざまな文化における価値観・世界観・歴史観への理解を深めるとともに、それらを通して物事を広く捉える視点や考え方を養っていく。</p>           |   |  |
|                | 科学リテラシー        | <p>本講義は次の3つの側面の能力を身に付けることから構成されている。科学的知識または概念：科学的な思考のあり方の基礎を習得する。数学・物理学・化学・生物学・地球科学・天文学などの手法、論理体系・発想方法を理解する。科学的プロセス（科学的能力）：科学的知識に裏付けられた基本的原理（仮説）から出発し、論理的考察を重ね、結論に到達する思考方法を養う。状況認識と科学的態度：科学と技術が関係する社会や日常生活を認識でき、思慮深い市民として科学が関連する諸問題を理解する力を養う。</p>                          |   |  |
|                | ものづくりリテラシー     | <p>「もの」を作るときには、「もの」の必要性から（問題発見能力）、それを具現化する手段を考察し（論理的思考力）、その為の技術を習得して（問題解決力）、「もの」を作る。そして、できた「もの」について、批評する事（批判的思考力）で新たな「もの」を生み出す原動力となる。そこで、本講義では問題発見能力→論理的思考力→問題解決力→批判的思考力と言った、「ものづくり」における一連の流れを理解し、経験を通してそれらの能力を習得する。自分の生活を「意識的に振り返り」、自分の行動や判断を倫理的に強化する姿勢を身に付ける事を目標とする。</p> |   |  |



|                                       |                   |           |   |         |
|---------------------------------------|-------------------|-----------|---|---------|
| (共通教育科目)<br>(教育実践教養科目群)<br>(教育実践教養科目) | (現代的教育課題<br>対応科目) | 学校保健・学校安全 | 学校保健・学校安全の意義、目的、内容について、発育発達期にある児童・生徒の健康問題・地域社会との関係について関連法規も含め知識を深める。また学校保健マニュアル・学校防災マニュアルを参考にアレルギーや感染症への対応、地震・風水害に対する防災・減災への対処方法を具体的に判断できる思考の獲得を目指す。学校保健については養護教諭養成担当教員が4回、学校安全については社会科教育および理科教育担当教員が4回、それぞれオムニバス方式で講義を運営する。<br>(オムニバス方式/全8回)<br>(18 櫻木 惣吉・17 古田 真司 各1回クラス分け<br>20 福田 博美・19 藤井 千恵 各1回クラス分け<br>91 山田 浩平・90 岡本 陽/各1回)<br>アレルギーや感染症への対応など学校保健について担当する。<br>(35 伊藤 貴啓・57 戸田 茂/各2回)<br>防災・減災への対処方法など学校安全について担当する。 | オムニバス方式 |
|                                       | 実践力育成科目           | 学校体験活動入門  | 出身校や、出身地の学校などで、体験的に学校教育に触れる機会を設定し、1回3時間程度の活動を5回以上を原則として、学校や教育を専門として施設で活動を行う。子ども理解への関心を高め、教職や教育を支える専門職等への意欲を高めるとともに、卒業後の自分の在り方をイメージし、今後の大学での学修を充実させることを目的とした授業である。   |         |
|                                       |                   | 学校体験活動Ⅰ   | 「学校体験活動入門」の経験を生かし、教育施設等で継続的に体験活動する機会を設定し、より一層子ども理解を深め、教職や教育を支える専門職等への意欲をさらに高めることを目的とした授業である。学校教育現場での活動は週一回を原則として、1回3時間程度の活動を13回以上実施する。回数的も質的にも教職や教育を支える専門職等への理解が求められる。  |         |
|                                       |                   | 学校体験活動Ⅱ   | 「学校体験活動Ⅰ」の経験を踏まえ、学校(園)及び教育施設等で体験活動する機会を設定し、より一層子ども理解を深め、教職や教育を支える専門職等への意欲を高めることを目的としている。学校教育現場での活動は週一回を原則として、1回3時間程度の活動を7回以上実施する。学校体験活動の集大成として、10月前後に予定している教育実習などの各種実習やそれ以降の実習、キャリア実現につながることも視野に入れた授業である。   |         |
|                                       |                   | 自然体験活動    | 自然体験活動とは、自然を対象とした様々な取り組みを行う団体と協働し、自然への感性を磨いたり、環境保全についての理解を深め、教育や教育を支える専門職への意欲を高める授業である。<br>自然体験活動の目的(1)実際に自然に触れ合うことで、実体験を元に自然田に対する感性を磨く。(2)企業やNPOが行う環境保全のプログラムに参加し、環境保全についての知識・技能を養う。(3)環境保全や自然体験に取り組む地域の方との交流を通して、コミュニケーション能力を育む。<br>コース共通の活動内容(1)事前指導。(2)各コースでのプログラムに沿って活動を行う。(3)地域の方との交流。(4)事後指導。  |         |
|                                       |                   | 多文化体験活動   | 多文化体験活動とは、アジアの協定校等で海外の子どもの生活や教育の実態を肌で感じることを通して、子ども理解を深め、教職や教育を支える専門職への意欲を高める授業である。<br>多文化体験活動の目的(1)自国とは異なる環境や文化、歴史を持つ国を訪問し、教育の原点や価値を自ら見出す。(2)外国の言葉や文化に触れることで、学ぶ必要性を実感し、大学での学びにつなげる。(3)様々な文化・宗教を背景とした人々と交流し、多様性を受け入れる素地を作る。<br>コース共通の活動内容(1)事前指導・準備：現地の歴史、文化、宗教、教育、社会情勢等について調べ、レポートを作成。(2)現地での学習・体験：教育機関を訪問し、授業や学校生活の観察、現地の文化体験、歴史遺跡・博物館・美術館を見学。(3)現地での交流：日本の文化等の紹介を通して子どもや大学生と交流。(4)事後指導：多文化体験活動を振り返り、アンケートや報告書を作成。         |         |
|                                       |                   | 企業体験活動    | 教育施設以外の企業等の経営者等を訪問し取材したり仕事を体験したりする調査活動を通して、将来、教員および教育関係の専門職に就いたときに求められる幅広い人間性や社会性の育成を図る授業である。企業訪問に関しては、食品会社、製造業、サービス業など県内の多種多様な企業から自分の興味関心のある企業を一社選び5～6人のグループを構成する。一回3時間の訪問を3回実施し、そこで学んだ企業の業界について、中学校2年生を対象としたキャリア教育に活用できる動画を作成する。訪問先の企業担当者からも助言をいただき質の高い動画を作り受講生全体で学びを共有する。  |         |
|                                       | 日本国憲法             | 日本国憲法     | 本講義では、①憲法の本質を理解すること、②個人の尊厳と基本的人権の基本的な考え方を理解すること、③日本国憲法の歴史と現在を理解すること、④憲法の中核を為しているのは人権規定であることを理解すること、⑤個々の人権規定の考え方を理解することを目標とする。憲法は、国家権力を制限し、国民の自由・権利を保障することを最も重要なねらいとしている。そうした憲法学の基礎を理解すると同時に、自らがもつ基本的人権について知り、権利を行使することができるようになることは、社会を生きる市民として重要な要素である。<br>また本講義を通じて、論理的な思考と相手を納得させるための文章を構成する力を養うことを目指す。   |         |

|                                      |        |          |  |    |
|--------------------------------------|--------|----------|--|----|
| (共通教育科目)<br><br>外国語科目<br><br>初習外国語科目 | 情報教育入門 | 情報教育入門   | <p>本授業の目標は、(1)ICT活用指導力の基礎を学ぶ上で、情報機器やアプリケーション、コンテンツを実践的に活用することで、大学生に必要な「情報活用能力」の基礎を身に付けることである。また、(2)主体的・対話的で深い学びの視点についても、学習過程で体験するなかで、学び方そのものや価値・効果を実感する。</p> <p>目標を達成するために、教育の情報化の3つの側面について、講義と協同での課題解決を行い、将来教員または社会人として必要な力を自身で学び続けていくための基礎的な力をつける。</p> <p>(47 伊藤 俊一・46 中西 宏文・49 松永 豊・48 安本 太一・121 梅田 恭子・123 斎藤ひとみ・120 高橋岳之・122 福井真二)メインティーチャーとして授業の主展開を担当する。</p> <p>(159 野崎 浩成・156 江島 徹郎・189 榎本 康宏・204 小池 あずさ・229 渡邊 良哉・237 堀 和恵)効果的な指導となるよう、個別対応を要する学生の指導を主に担当する。</p> | 共同 |
|                                      | 英語     | 英語 I     | <p>受講生は教育大学の学生として、将来的には様々なバックグラウンドを持つ子供たちを対象に、英語を教える可能性がある。また本学で学ぶ学生のバックグラウンドもさまざまである。例えば本学には健聴者のみならず、聴覚に障害を持つ学生も在籍し、同様に学生は卒業後、聴覚に障害を持つ生徒を含む、インクルーシブな環境で英語教育を行う可能性がある。そのため、豊かな自己表現能力の育成を統一的目標として、聞く・話すの音声技能のみならず、読む・書くの技能も含め、特定の技能に偏らない汎用的な英語能力を養うことを目標とする。</p>  |    |
|                                      | ドイツ語   | ドイツ語 I   | <p>ドイツ語 I は、以下のことを口頭で表現、あるいは読んで理解することを目標とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ドイツ語の発音と綴りを覚え、短い文章を正確に音読できること。</li> <li>・基本的な動詞の現在人称変化を覚え、自分や話し相手、あるいは家族、親戚などの名前、出身地、居住地、年齢、趣味などを口頭で訊いたり伝えたりすることができること。</li> <li>・日常よく目にするものを表す名詞と人称代名詞、基本的な形容詞を覚え、物の様子や値段を口頭で訊いたり伝えたりすることができること。</li> <li>・直接目的語(4格)と間接目的語(3格)を含む文(「～に・～を与える」など)を読んで理解できること。</li> </ul>  |    |
|                                      |        | ドイツ語 II  | <p>ドイツ語 II は、以下のことを口頭で表現、あるいは読んで理解することを目標とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・二桁までの教数と序数を覚え、日付や時刻をとまなう表現(誕生日、電車の出発など)を口頭で言えること。</li> <li>・いくつかの助動詞と前置詞を覚え、基本的な動詞と組み合わせた表現(「君とコンサートに行きたい」「もう帰らなければならない」など)を口頭で言えること。</li> <li>・時制体系を把握し、特に基本的な動詞の現在完了形の文を読んで理解することができること。そのさい、過去形が少数の例外をのぞき、書き言葉でしか用いられないことを理解すること。</li> <li>・副文(従属節)を使った文を読んで理解できること。あわせてドイツ語と英語の語順の特徴の違いについて理解すること。</li> </ul>  |    |
|                                      | フランス語  | フランス語 I  | <p>フランス語 I は、フランス語の基礎を学びます。文法や基本的語彙や実用的表現を習得し、ある程度の文章を読んで理解できるようになるとともに、綴りを正しく発音できるようになるのを目標とします。そこでパリの日本人留学生やフランス人学生らの陽気な日常を描いた会話形式の文章を読んでいます。授業内容はフランス語のアルファベットの読み方、日本語になったフランス語、綴り字記号、発音、挨拶、数の読み方、不定冠詞・定冠詞、名詞の性と数、飲み物・軽食関連の語彙、主語人称代名詞、二人称、前置詞と定冠詞の縮約、職業関連の語彙、紹介の会話表現、リエゾン、アンジエヌマン、エリジョンです。</p>  |    |
|                                      |        | フランス語 II | <p>フランス語 II は、フランス語 I を基本に文法や基本的語彙や実用的表現を習得します。授業内容は疑問文、強勢形、形容詞、色・身体の特徴関連の語彙、否定文、否定、家族関連の語彙、体調を聞く会話表現、形容詞の女性形、複数形の作り方、第1群規則動詞、指示形容詞、文具・郵便関連の語彙です。語学力に加えてフランス及びフランス語を日常的に使用している地域への社会、文化理解のための予備知識を学ぶこともめざしたいです。</p>  |    |
|                                      | 中国語    | 中国語 I    | <p>中国語 I は、演習形式で行い、中国語の基礎を段階的に習得することを目標とする科目である。最初は発音練習とリスニングテストを繰り返すことによって、発音の基礎を学び、正しくピンインを読む力を身に付ける。次に挨拶ことばや日常的な会話を実践的に練習することにより、話し・聞く能力を段階的に身に付けていく。また中国語の発音・意味・用法の調べ方を学び、簡体字を正しく覚えることによって、基本的な語句を読み・書きできるようになることを目指す。</p>   |    |
|                                      |        | 中国語 II   | <p>中国語 II は、演習形式で行い、中国語の基礎を習得することを目標とする科目である。基本的な語彙・表現を覚え、発音練習・会話練習を繰り返すことによって、話し・聞く能力を培う。また基礎的な文法・語法を学ぶことによって、簡易な文章を読み・書きできる能力を身に付ける。さらに用いられる漢字が日本と中国大陸、台湾ではそれぞれ異なることを学び、異文化理解をはかる。最終的には初級の内容を完全にマスターし、中国語で簡易なやりとりが可能となることを目指す。</p>   |    |

|                                  |             |              |  |  |
|----------------------------------|-------------|--------------|--|--|
| (共通教育科目)<br>(外国語科目)<br>(初習外国語科目) | ポルトガル語      | ポルトガル語Ⅰ      | ポルトガル語Ⅰは、ポルトガル語を初めて学習する人を対象に、基礎的な文法を学習し、初歩的なポルトガル語の習得を目標とする。特に、「声にだして読む(話す)」と「聞く」能力の向上に力点を置き、学校や地域でブラジル人とコミュニケーションできるようにすることを旨とする。基本的な文法をテキストやプリントを用いてじっくりと学び、さらに習熟度を高めるため、授業では毎回確認のための小テストを行う。二人一組となった会話練習を豊富に取り入れながら、授業を進める。具体的な講義内容は、ポルトガル語の文字と発音のルールをしっかりと身に付けた上で、名詞・所有詞・数詞・形容詞・ser動詞や規則動詞、不規則動詞の活用を学ぶ。使用する名詞は、学校に関する単語を中心とする。   |  |
|                                  |             | ポルトガル語Ⅱ      | ポルトガル語Ⅱは、ポルトガル語を初めて学習する人を対象に、基礎的な文法を学習し、初歩的なポルトガル語の習得を目標とする。特に、「声にだして読む(話す)」と「聞く」能力の向上に力点を置き、学校や地域でブラジル人とコミュニケーションできるようにすることを旨とする。基本的な文法をテキストやプリントを用いてじっくりと学び、さらに習熟度を高めるため、授業では毎回確認のための小テストを行う。二人一組となった会話練習を豊富に取り入れながら、授業を進める。具体的な講義内容は、ポルトガル語の文字と発音のルールをしっかりと身に付けた上で、命令形、完全過去形、不完全過去形を学ぶ。使用する名詞は、学校に関する単語を中心とする。  |  |
|                                  | 英語コミュニケーション | 英語コミュニケーションⅠ | <p>The goal of this initial course in English communication is to provide a platform for students to activate their own personal store of vocabulary they have previously acquired in their secondary school English lessons. The initial units focus on identifying the basic macro- and micro-structural elements and strategies that compose conversation. Students will learn to logically construct their own English conversations, and demonstrate their ability to incorporate the various internal features into their own talk-in-interaction. They will also do active listening (i.e. taking notes) to online dialogues and recount these to interlocutors.</p> <p>英語コミュニケーションⅠでは、学生が中等学校の英語の授業ですべてに習得している語彙を活用する基盤をつくることを目標としています。この単元では、会話を構成する基本的なマクロ・ミクロの構造要素と戦略の特定に重点を置いています。学生が自分の英会話を論理的に構築する方法を学び、さまざまな特性を実際に自分の対話に具体的に取り入れるようにします。また、オンラインの会話を積極的に聞き取り(メモを取るなど)、対談者にその内容を説明できるようにします。</p> |  |
|                                  |             | 英語コミュニケーションⅡ | <p>This course expands upon EC1 and explores English spoken genres of various types including dialogic (e.g. casual conversations and interviews) and monologic genres (e.g. analytical and hortatory expositions). Teachers are 'presenters' on a daily basis in their professional careers, and this course aims to develop English presentation skills. Students will do active listening (i.e. taking notes) to online English databases such as TED talks, NHK World, and news media sites and orally report on current affairs and issues in class meetings.</p> <p>このコースは英語コミュニケーションⅠの発展として、会話形式(例: カジュアルな会話やインタビュー)や独白形式(例: 分析的プレゼンテーションやホルタリープレゼンテーション)を含むさまざまなタイプの英語の話されたジャンルを探究します。教員はプロとしてのキャリアにおいて日常的に「プレゼンター」であり、このコースは英語のプレゼンテーションスキルを伸ばすことを目的としています。学生は、TEDトーク、NHKワールド、ニュースメディアサイトなどのオンライン英語データベースを積極的に聞き取り(メモを取るなど)、授業で時事問題を口頭で発表します。</p>   |  |
|                                  | スポーツ科目      | スポーツⅠ        | スポーツ科目は、健康とスポーツ科学の学び、健康で文化的なスポーツ活動を営める主体者の形成を目標として開設されている。具体的には、コミュニケーション能力の育成、健康・体力づくり、スポーツ活動のプログラミングに関する能力の育成ならびにスポーツの創造的活動に関する能力の育成を目指すことを目的としている。スポーツⅠではスポーツの交流機能を生かしてコミュニケーションに関する能力を育成することを目的としている。  |  |
|                                  |             | スポーツⅡ        | スポーツ科目は、健康とスポーツ科学の学び、健康で文化的なスポーツ活動を営める主体者の形成を目標として開設されている。具体的には、コミュニケーション能力の育成、健康・体力づくり、スポーツ活動のプログラミングに関する能力の育成ならびにスポーツの創造的活動に関する能力の育成を目指すことを目的としている。スポーツⅡではスポーツ活動に関するプログラミング及び創造的活動に関する能力の育成を目指すことを目的としています。  |  |

|                   |      |               |   |  |
|-------------------|------|---------------|---|--|
| 専攻基礎科目群<br>専門教育科目 | 教育科目 | 発達と学習の心理学     | <p>幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程について、基礎的な知識を身に付け、各発達段階における心理的特性を踏まえた学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解することを目指す。心身の発達の過程としては、(1)発達に関する代表的理論を踏まえ、発達概念及び教育における発達理解の意義、(2)乳幼児期から青年期の各時期における運動発達・言語発達・認知発達・社会性の発達を中心に取り上げる。また幼児、児童及び生徒の学習の過程としては、(1)様々な学習の形態や概念及びその過程を説明する代表的理論、(2)主体的学習を支える動機づけ・集団づくり・学習評価の在り方、(3)幼児、児童及び生徒の心身の発達を踏まえ、主体的な学習活動を支える指導の基礎となる考え方を中心に取り上げる。</p>  |  |
|                   |      | 教育システム論       | <p>本講義では、社会（地域社会や労働市場など）とのつながりのなかで学校を捉え、社会のなかで学校はどのような役割を果たしているのか、学校教育を通じて子ども・若者は社会へといかに参加していくのかを学ぶ。具体的には、子ども・若者をめぐる生活環境の変化と教育問題、学校教育の原理及び理念と現代的課題、学校と地域・保護者との関係性及び「チーム学校」など協働の可能性、学校事故の把握と学校安全に向けた対応策などについて概説する。本講義を通じて、将来教員として直面しうる教育課題に対応する際の、基礎的な考え方やスキルを獲得してほしい。なお、講義の進め方は、前半に該当テーマの背景の説明、中盤に該当テーマに関する理論的検討（主に教育社会学）、後半に事例にもつづいたディスカッションを行う。出席者には知識を吸収するという消極的な姿勢ではなく、知識を活かしながら発言・記述する積極的な姿勢を求める。</p>      |  |
|                   |      | 教育課程論         | <p>講義の到達目標：教育課程の編成に関する基礎的な理論と共に具体的な教育方法を理解し、その成果を発表・論議することができるようになる。<br/>         講義の概要：本講義では、教育課程の編成に関する基本的な概念・原理を検討すると共に、日本における教育課程の歴史の変遷や諸外国のカリキュラム改革の遺産に学びつつ、近年の教育課程改革をめぐる課題について考察する。具体的には、次の3つを主な内容として取り上げる。<br/>         1. 日本における教育課程の変遷、2. 教育課程の編成に関する理論と具体的な教育方法、3. 教育評価に関するいくつかの課題や近年の動向</p>  |  |
|                   |      | 幼児教育課程論       | <p>幼稚園教育要領を踏まえ、各園において編成される教育課程と指導計画について、その意義や編成・作成方法を理解すると共に、各園の実情に合わせてカリキュラム・マネジメントを行う意義を理解することを目的とする。そのためにまず、幼稚園教育要領等の性格及び位置付けを知り、園において教育課程を編成することの意義や目的、社会的役割、機能等について学ぶ。また、編成の基本的原理や保育実践と教育課程・指導計画との関係性を理解し、保育内容等を組織的かつ計画的に編成・作成するための具体的な知識・技能を習得する。さらに、より質の高い保育に改善していくための記録及び評価方法とカリキュラム・マネジメントの考え方について、理論と事例により具体的理解を図る。</p>   |  |
|                   |      | 道徳教育の理論と方法    | <p>「特別の教科 道徳」（道徳科）が実施され、学校における道徳教育は新しい時代を迎えている。この授業ではまず、「学習指導要領」や「学習指導要領解説」を正確に理解し、これからの道徳教育とその要としての道徳科に求められる教育内容や指導方法について認識を深める。そのうえで、児童生徒の道徳性の発達に関する理論もふまえ、道徳授業の実践例の検討ならびに教材研究、学習指導案づくりを行い、道徳教育・道徳科の実践（教育実習等）を想定した実践的指導力の基礎を身に付ける。</p>  |  |
|                   |      | 総合的な学習の時間の指導法 | <p>総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成を目指す。各教科等で育まれる見方・考え方を総合的に働かせて、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究する学びを実現するために、指導計画の作成および具体的な指導の仕方、並びに学習活動の評価に関する知識・技能を身に付ける。総合的な学習の時間における授業の構成原理及びその具体的な実践について、指導案や実際の授業場面の提示によって具体的に授業を構想できるようにするとともに、総合的な学習の時間に関する授業観、指導観を醸成することができるように導く。体験的な学びを取り入れた教材開発、それぞれの授業づくりを他所評価する討論形式の授業、自己の学びを表出しそれを積み重ねていくような評価ファイルなどを活用する。</p> |  |

|                       |        |   |  |  |
|-----------------------|--------|---|--|--|
| (専門教育科目)<br>(専攻基礎科目群) | (教育科目) | 特別活動の理論と方法  | 特別活動は、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」を「なすこと」によって学ぶ活動である。本授業では、教育課程における特別活動の位置づけや目標および内容について理解するとともに、合意形成に向けた集団活動の意義や指導方法、特別活動の各活動（学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事）の目標や内容、指導方法を、講義およびグループワークを通じて身に付ける。  |  |
|                       |        | 教育の方法と技術  | この授業では、学校教育における「教え」と「学び」を原理的に理解するとともに、授業の目標、内容、展開、評価の設定方法を学ぶことを通じて、授業の構想力を形成する。具体的内容としては、「教えること」「学ぶこと」に関する原理的理解を図りつつ、21世紀型能力の類型、対話・討論を深める学び合いといった新学習指導要領を踏まえた授業づくりへと展開する。さらに、発問と教材研究の考え方を理解しながら、指導構想づくりへと発展させていく。  |  |
|                       |        | 生徒指導・進路指導の理論と方法   | 生徒指導は、児童生徒の人格を尊重して個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目的とする。進路指導は、児童生徒が将来の進路を選択・計画して、よりよく生活を構築できるように、長期的展望に立つ指導を行うものである。本科目では、生徒指導・進路指導の視点による授業改善や体験活動、評価の推進や相談活動の充実、学校内外の組織的体制などについて、実際の諸問題を取り上げて、どのように対応すべきか討論しながら理解を深める。  |  |
|                       |        | 幼児の理解と指導  | 幼児理解は、幼稚園教育を学ぶ際の基本となる。幼稚園における幼児の生活や遊びの実態に即して、発達段階を見通した幼児理解と、子どもの特性をふまえた適切な支援の態度と重要性について学ぶ。そして、子どもの成長を支える保育者等の人的環境と、保育室の環境等の機能について、実際の保育現場の様子から学ぶと共に、その重要性について理解を深める。さらに、幼児が園生活において経験する様々なつまづきの内容と、その要因を把握するための原理及び対応の方法等について、具体的に考えられる力を身に付ける。   |  |
|                       |        | 教育相談の理論と方法  | 近年、学校教育において、いじめ、不登校、精神障害、発達障害など特別な援助ニーズを有する幼児、児童及び生徒が増加している。本講義は、このような援助ニーズを有する幼児、児童及び生徒に対する教育相談の意義を理解し、発達のな問題とその支援についての理解を深めることを目的としている。「講義」では、教育相談の理論、カウンセリングの理論、アセスメントの理論、教育相談上の課題の理論等の理解を目指す。「実習」では、教育相談でのカウンセリングの方法、アセスメントの方法等を学び、実際の教育相談活動における教員としての効果的な対応方法を学ぶ。また、構成的グループエンカウンターや社会的スキルトレーニングなど問題発生前の予防的な働きかけ、保護者への支援、スクールカウンセラーや外部専門機関との連携等についても講義や実習を通して学ぶ。 |  |
| 保育内容科目                | 幼児と健康  | 領域「健康」の指導に関する基礎的な理論を理解し、具体的な事例と理論を関連づけて説明し、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学びを経験する。<br>(オムニバス方式／全15回)<br>(14 鈴木 裕子／4回)<br>第1回：領域「健康」<br>第2回：現社会における乳幼児期の体と運動発達などの健康課題<br>第4回：乳幼児期の運動における体・心・環境の関連<br>第13回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（表現する身体）<br>(14 鈴木 裕子・76 上原 三十三／2回)（共同）<br>第8回：幼児期達と保育内容<br>第12回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（マット／縄跳び）<br>(14 鈴木 裕子・4 鈴木 英樹／3回)（共同）<br>第3回：乳幼児期の体の発達の特徴<br>第5回：乳幼児期の体と生活習慣の形成(生活リズム)<br>第9回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（走跳投）<br>(14 鈴木 裕子・140 寺本 圭輔／4回)（共同）<br>第6回：乳幼児期の体と生活習慣の形成（肥満）<br>第7回：乳幼児期の安全教育・健康管理<br>第14回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（水中動作）<br>第15回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（野外活動）<br>(14 鈴木 裕子・152 縄田 亮太／2回)（共同）<br>第10回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（複合的な動作と遊び）<br>第11回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（ボール） | オムニバス方式・共同（一部）   |  |

|                       |          |         |  |    |
|-----------------------|----------|---------|--|----|
| (専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | (保育内容科目) | 幼児と人間関係 | <p>領域「人間関係」の指導に関する基礎的な理論を理解し、具体的な事例と理論を関連づけて説明し、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学びを経験する。</p> <p>(16 林 牧子) 幼児を取り巻く人間関係の変化と現代における課題を概観し、保育者と信頼関係を構築する過程と、そこから派生する友達との関係性の深まりについて具体的事例を基に理解を深める。</p> <p>(165 二井 紀美子) 現代的課題である、発達の気になる外国にルーツをもつ幼児の教育的支援について、保育現場と行政等が提供する支援内容を示しつつ、具体的に学び、現状の理解と課題の把握を目指す。</p>   | 共同 |
|                       |          | 幼児と環境   | <p>領域環境に関する基礎となる幼児を取り巻く環境や、幼児と環境との関わりについての知識、技能を身に付ける。具体的には、乳幼児を取り巻く環境の諸側面(物的環境、人的環境、社会的環境)と発達における重要性、乳幼児期における物理的、数量・図形との関わり、生物・自然との関わり、標識・文字の環境、情報・施設への関わりにおける発達の特徴、また幼児期と小学校期の連携・接続の必要性と可能性やアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの背景と実際を理解する。それらを踏まえ、事例と理論を関連づけて説明し、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びを経験する。</p> <p>(8 中野 真志) 理論的な視点や教材開発に関わる部分を主に担当する。</p> <p>(9 加納 誠司) 教育実践に関わる部分を主に担当する。</p> <p>(146 西野 雄一郎) 幼小連携に関する部分を西井が主に担当する。</p> | 共同 |
|                       |          | 幼児と言葉   | <p>領域「言葉」の指導の基盤となる、幼児が豊かな言葉や表現を身に付け想像する楽しさを広げることができるために必要な、専門的事項に関する知識や理論を学ぶことを目的とする。言葉は乳幼児期に著しく発達するが、それには周囲の大人(保育者)との関わりが非常に重要である。その点を理解し適切な援助ができるようになる基盤として、まず、人間にとっての言葉の意義や機能、言葉の獲得や発達を支える様々な要因、日本語の特性等を学び、生涯にわたる人格形成の基礎が培われる幼児期の援助の重要性について理解する。さらに、言葉の感覚を豊かに育てる児童文化財とその実践方法等についても基礎的な知識や技術を学ぶ。</p> <p>(13 新井 美保子) メインティーチャーとして幼児教育学・保育学の視点から担当する。</p> <p>(105 川口 直巳) 授業は言語学・日本語学の視点から助言する。</p>               | 共同 |



|                       |              |  |  |         |
|-----------------------|--------------|--|--|---------|
| (専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | (保育内容科目)     | 幼児と表現  | <p>領域「表現」に関する内容を扱う。子どもたちが感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにするために、保育者として必要な表現力を高めるとともに子どもたちにとって必要な表現に関する知識の習得並びに指導できる能力の育成を目指す。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(89 麓 洋介／3回)<br/>第1回：領域「表現」の理解<br/>第4回：音の鳴るものをつくるための理論と実践<br/>第5回：歌を歌うための理論と実践</p> <p>(64 新山王 政和／2回)<br/>第2回：表現って何？(1)・音楽的な表現について<br/>第3回：音を楽しむための理論と実践</p> <p>(153 成瀬 麻美／3回)<br/>第6回：表現って何？(2)・身体的な表現について<br/>第7回：音に合わせて身体を動かすための理論と実践<br/>第8回：身体で表現するための理論と実践</p> <p>(137 杉林 英彦／2回)<br/>第9回：表現って何？(3)・造形的な表現(描画)について<br/>第10回：身近な材料で絵を描くための理論と実践</p> <p>(15 樋口 一成／3回)<br/>第11回：壁面を絵で飾るための理論と実践<br/>第12回：表現って何？(4)・造形的な表現(工作)について<br/>第15回：授業のまとめ</p> <p>(72 佐々木 雅浩／2回)<br/>第13回：いろいろな素材に触れるための理論と実践<br/>第14回：身近な材料でつくるための理論と実践</p> | オムニバス方式 |
|                       |              | 保育内容総論   | <p>幼稚園における教育は園生活全体を通して総合的に行うという指導の考え方を理解し、具体的な幼児の姿と関連づけながら、環境を構成し実践するために必要な知識・技能を身に付ける。幼稚園教育の基本を踏まえた幼稚園における指導や指導計画の考え方を理解し、幼児の発達過程を見通した指導計画を作成したり、幼児の興味・関心等に応じた具体的な指導の在り方を検討したりすることなどを通して、園生活において総合的に指導することへの理解を深める。</p>   |         |
| 保育内容指導法科目             | 保育内容指導法・健康   | <p>領域「健康(健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う)」のねらい及び内容、育みたい資質能力について、理論や現状の課題と関連させて理解する。具体的には、領域「健康」の全体構造、幼児が身に付ける内容、指導上の留意点、評価の考え方、小学校との連携を、実践の参観や観察、具体例を示した資料やICT教材をもとに理解する。それらを踏まえて、幼児の心情、認識、思考、動き等を視野に入れた指導案を作成し、保育におけるPlan(計画) Do(実行) Check(評価) Act(改善)サイクルの意義と機能を体得する。幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びの実現の過程を踏まえた具体的な指導場面を想定した指導方法を身に付ける。</p>   |  |         |
|                       | 保育内容指導法・人間関係 | <p>領域「人間関係(他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う)」のねらい及び内容、育みたい資質能力について理解を深める。幼児は、自ら周囲の環境に働きかけて様々な感情を体験し、試行錯誤しながら自らの力で行うことの充実感を得るが、これらの行動は、教師との信頼関係が基盤となっていることを理解し、幼児と信頼関係を築くことの重要性について学ぶ。また、幼児同士が関わりを深めて協同的に遊ぶようになるための力を育成するにあたって必要な教師の関わりについて理解を深める。以上の学びをふまえて具体的な指導場面を想定し、指導方法を計画する力を身に付ける。</p>   |  |         |
|                       | 保育内容指導法・環境   | <p>領域「環境(周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う)」のねらい及び内容、育みたい資質能力について、その背景にある理論や現状の課題と関連させて理解を深める。具体的には、領域「環境」の全体構造、幼児が身に付ける内容、指導上の留意点、評価の考え方、小学校との連携を、実践の参観や観察、具体例を示した資料やICT教材をもとに理解する。それらを踏まえて、幼児の心情、認識、思考、動き等を視野に入れた指導案を作成し、模擬保育もしくはフィールドワーク、ICT教材活用方法とその振り返りを通して、保育におけるPDCAサイクルの意義と機能を体得する。幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びの実現の過程を踏まえた具体的な指導場面を想定して、指導方法及び保育を構想する方法を身に付ける。</p> |  |         |
|                       | 保育内容指導法・言葉   | <p>幼稚園教育要領に示された「環境による教育」「育みたい資質・能力」等の幼児教育の基本を踏まえ、領域「言葉」のねらい及び内容に即した適切な保育実践方法を学ぶことを目的とする。具体的には、背景となる専門領域と関連させながら、幼児の発達に即した各年齢での具体的な指導場面や活動を想定し、主体的・対話的で深い学びが実現するような活動内容や援助等を構想する力を身に付ける。その際、具体的な保育事例や映像資料、ICT機器の活用も取り入れる。また、外国人幼児や言葉の獲得に特別な支援が必要な幼児の事例を取り上げ、個々の特性に応じた適切な援助方法についても理解を深める。</p>  |  |         |

|                       |             |               |  |  |
|-----------------------|-------------|---------------|--|--|
| (専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | (保育内容指導法科目) | 保育内容指導法・表現    | 幼稚園教育において育みたい資質・能力を理解し、幼稚園教育要領に示された領域「表現」のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深めるとともに、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。領域「表現」における幼児の発達の特性を踏まえ、生活と関連付けた保育を計画するために必要な知識および技能を身に付ける。幼児にわかりやすい教材や言葉掛け、援助等について映像資料などを通して学ぶ。幼児の生活と関連した保育の指導案を作成し、模擬保育を通して幼児の表現活動を援助するための方法について考える。                          |  |
|                       | 初等教科内容科目    | 初等国語科教育内容 A   | 初等教育用の国語教科書の教材を取り上げ、個々の教材についてどのようなことを教える必要があるかを議論する。ここでは、学習指導要領における国語科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解した議論が求められる。また、教材研究史や子どもの発達段階を加味し、理念的な文脈における教育内容と、現実的な文脈における教育内容をつきあわせて考えることが求められる。授業は主にグループでの教材分析、発表、討論のかたちで行う。   |  |
|                       |             | 初等社会科教育内容 A   | 小学校の社会科学習を指導するために、基本的な教材とその活用方法を習得するための実践を前提とした指導を行う。まず、学生は初等の社会科教育内容について、それぞれの疑問をもとに主体的に調査・考察に取り組み、一定の知見を得る。その後、講義や演習によって実際の教育現場でのさまざまな初等社会科の学習内容の特徴を考察、理解し、教材開発・模擬学習・指導案作成等の基礎的な授業実践力を身に付けてもらうこととする。   |  |
|                       |             | 初等算数教科教育内容 A  | 小学校算数教科の5領域(数と計算・図形・測定・変化と関係・データの活用)及び数学的活動に関して、重要な指導内容とそれらの数学的背景について理解を深めることを目標とする。算数科の重要な指導内容を取り上げ、その指導内容の体系と系統、教科書における教材の具体例やその解釈、更には、それらの数学的背景などについて講義する。また、具体的な問題を解いたり、数学的活動を体験したりすることを通して、指導内容・教材・その数学的背景などについての理解を深める。  |  |
|                       |             | 初等理科教育内容 A    | 小学校理科で扱う内容について、その意義と具体的な指導方法を理解するとともに、身近な自然現象の仕組みを探究できるようになることを目標とした解説、演習、実習を行う。理科専修以外の学生に対して、観察・実験を中心とした授業を行い、将来、小学校で理科を指導するために不可欠な基礎的能力と、観察・実験の技能およびその留意点を身に付けることを目的とする。具体的に扱う内容は、物理分野に関しては振り子の運動やこの規則性、電気・電流の性質など、化学分野に関しては化学薬品や器具の使い方、燃焼の仕組みや水溶液の性質など、生物分野に関しては、顕微鏡の使い方や昆虫の体のつくり、野鳥の野外観察など、地学分野に関しては地球の構造、大気、宇宙の構造などである。 |  |
|                       |             | 初等生活科教育内容 A   | 本授業では、『小学校学習指導要領解説 生活編』(平成29年7月)や最新の論考などを取り上げることにより、教科目標と内容構成への理解を図る。また、受講者自身が具体的な活動や体験を通して生活科の教育内容の理解を深めるとともに、生活科の授業作りへの関心・意欲を演義することをねらう。授業方法としては、テキストや配布資料、視聴覚教材を活用しながら、生活科の教科目標や内容について具体的な事例を示し解説する。また、個人やグループによる学びの振り返り、それを踏まえたディスカッション、および、それによって深まった学びの構築の省察も取り入れる。  |  |
|                       |             | 初等音楽科教育内容 A   | ピアノの演奏技術の習得を通して、音楽の内容・教材についての興味をより喚起する。楽譜から音楽の仕組みの基本であるメロディー・リズム・ハーモニーの読み方を理解することにより、基礎的技能を身に付けることを目標とする。授業の概要は、音楽科に必要な読譜について理解を深めるとともに、音だけでなく、様々な用語や記号などを活かして演奏する方法についても身に付ける。また、ピアノの実技が中心となるため個人レッスンとなるが、公開レッスンの形態をとり、全員で確認しながら進める。また、聴きあったり、伴奏と歌を合わせることで個々の習熟度を高めることを目指す。   |  |
|                       |             | 初等図画工作科教育内容 A | 本授業は、造形的な遊びから造形活動(描画表現、立体表現、平面表現、工作)・鑑賞学習へ展開することを意識した内容としている。受講者に求められることは「子どもになること」である。題材への興味・関心、造形活動での発見や驚き、友達と活動を共有することの楽しさを素直に表情や言動に表すこと。このことが、実際の教育現場で子どもと共感的に学ぶことにつながる。各活動では、授業者として必要な造形的な基礎技能を身に付ける。また、題材は原則として各回で完結する。  |  |

|           |           |            |             |   |                |
|-----------|-----------|------------|-------------|---|----------------|
| (専門教科科目群) | (専攻基礎科目群) | (初等教科内容科目) | 初等体育科教育内容 A | <p>小学校体育科の技能領域について授業実践問題の解決アプローチをテーマとし、基本的な運動の系統的な教材配列や工夫ができること目標とする。</p> <p>学習指導要領における各種運動領域について段階的な指導の組み立てと展開方法を実技体験しながら、各種運動領域の特性と運動の技術・戦術を理解し、教材づくりの考え方を学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(76 上原 三十三, 138 三原 幹生, 153 成瀬 麻美／5回)<br/>第1回～第5回 体ほぐしの運動・遊び、多様な動きをつくる運動・遊び、器械運動について学ぶ。</p> <p>(152 縄田 亮太, 139 頼住 一昭, 142 山下 純平／5回)<br/>第6回～第10回 的当て遊び、鬼遊び、ゴール型、ネット型、ベースボール型について学ぶ。</p> <p>(140 寺本 主輔, 4 鈴木 英樹, 75 石川 恭／5回)<br/>第11回～第15回 水遊び(もぐる・浮く・移動する)、浮標、けのび、泳法、安全確保の運動について学ぶ。</p> <p>(234 平川 武仁, 208 水谷 未来, 213 村山 大輔, 195 香村 恵介, 214 村松 愛梨奈, 235 平野 雅巳, 221 中田 有紀) 受講者の人数が多いため、安全面に十分配慮しながら、実技内容を充実させるため、実技のアドバイスをを行う。</p> | オムニバス方式・共同(一部) |
|           |           |            | 初等家庭科教育内容 A | <p>家庭科は、個人・家族による家庭生活、そこにおける衣食住を中心とした消費生活、家庭生活と環境の関わりを主対象としている。本授業は小学校家庭科で扱う教材理解や教材研究を行う上で重要な生活の現実や課題について多面的に検討することを通して、小学校家庭科の教育内容を理解することを目的とする。授業担当者の専門とする領域を中心に家庭生活、消費生活の現実や課題を取り上げ、小学校家庭科の教材理解、教材研究に資する理論的、実証的、実践的検討を行う。</p>   |                |
|           |           |            | 初等英語科教育内容 A | <p>授業の到達目標は、小学校英語を教える上で、授業で各領域を掘り下げ取り扱うことができる素養を養い、初等英語教育の理論と実践を見通した上で、実践ができる素地を養うことである。授業の概要は、教育実践ができるための基礎的な知識として、音声に関する知識、発音と綴り、文構造及び児童文学に関する知識を身に付け、授業者として教室での実践ができることを目指す。</p>   |                |
|           |           |            | 初等国語科教育内容 B | <p>小学校国語科の目標を学力とのかかわりにおいて理解したうえで、国語科教育の内容と方法について、具体的に小学校国語教科書に掲載される教材にもとづいて考察していく。次に、国語科の評価についての考え方を養う。理論的な面を把握したうえで、児童・生徒の実態把握をしつつ、単元の計画を立て、教材研究の方法を習得する。実際に、学習指導案を作成し、模擬授業を行うことを中心とする。模擬授業について共同で意見交流しながら、児童・生徒の実態把握や単元の計画などについてフィードバックすることで授業についての理解を深める。</p>  |                |
|           |           |            | 初等社会科教育内容 B | <p>本授業の目標は、以下の(1)～(4)のテーマについて、小学校第3学年の児童が社会的現象の見方・考え方を働かせ、学習問題を追究・解決できる社会科授業の構想を提案する能力を身に付けることである。(1)身近な地域や市区町村の様子について・(2)地域に見られる生産や販売の仕事について・(3)地域の安全を守る働きについて・(4)市の様子の移り変わりについて・上記の(1)～(4)のテーマについて、社会的現象の見方・考え方を働かせ、学習問題を追究・解決できる社会科授業を構想し、模擬授業の形式で発表する。</p>  |                |
|           |           |            | 初等算数科教育内容 B | <p>小学校算数科の5領域(数と計算・図形・測定・変化と関係・データの活用)及び数学的活動に関して、重要な指導内容とそれらの数学的背景について理解を深めることを目標とする。算数科の重要な指導内容を取り上げ、その指導内容の体系と系統、教科書における教材の具体例やその解釈、更には、それらの数学的背景などについて講義する。また、具体的な問題を解いたり、数学的活動を体験したりすることを通して、指導内容・教材・その数学的背景などについての理解を深める。</p>   |                |
|           |           |            | 初等理科教育内容 B  | <p>小学校理科で扱う内容について、その意義と具体的な指導方法を理解するとともに、身近な自然現象の仕組みを探究できるようになることを目標とした解説、演習、実習を行う。理科専修の学生に対して、観察・実験を中心とした授業を行い、将来、小学校で理科を指導するために不可欠な基礎的能力と、観察・実験の技能およびその留意点を身に付けることを目的とする。具体的に扱う内容は、物理分野に関しては振り子の運動やこの規則性、電気・電流のはたらきと利用など、化学分野に関しては化学薬品や器具の使い方、気体の性質や酸・アルカリの性質など、生物分野に関しては、花や昆虫の体のつくり、昆虫と植物の関係など、地学分野に関しては地球の構造、大気、宇宙の構造などである。</p>   |                |
|           |           |            | 初等生活科教育内容 B | <p>本授業では、『小学校学習指導要領解説 生活編』(平成29年7月)や最新の論考などを取り上げることにより、教科目標と内容構成への理解を図る。また、受講者自身が具体的な活動や体験を通して生活科の教育内容の理解を深めるとともに、生活科の授業作りへの関心・意欲を涵養することをねらう。授業方法としては、テキストや配布資料、視聴覚教材を活用しながら、生活科の教科目標や内容について具体的な事例を示し解説する。また、個人やグループによる学びの振り返り、それを踏まえたディスカッション、および、それによって深まった学びの構築の省察も取り入れる。</p>  |                |

|                                     |               |  |         |
|-------------------------------------|---------------|--|---------|
| (初等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | 初等音楽科教育内容 B   | 授業の目標<br>音楽科の授業の中で取り扱われる活動を体験することで、その難しさや活動に込められた意味等を再確認する。またそれらを指導する際に必要な知識と技術を身に付け、留意すべき点などを理解する。合わせて、教育に関する時事問題や新聞記事、教育相談などの資料に基づき、教育的な話題や教育を取り巻く社会問題に関心をもち、現状を理解する。<br>授業計画の概要<br>最初にリコーダーの演奏を通じて読譜やリコーダー演奏の技術を身に付けるとともに、小学校で取り扱う楽曲を学習する。続いて、グループ単位で様々な音楽活動を体験する。さらに、音楽や「教えること」に関連した一般的・総括的内容も適宜取り扱う。テキストは、文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』東洋館出版社と、ソプラノ・リコーダーを使用する。学生に対する評価は、レポート試験（60%）、授業への取り組み（20%）、課題研究発表及び課題への取り組み（20%）を総合して判断する。 |         |
|                                     | 初等図画工作科教育内容 B | 本授業は、造形的な遊びから造形活動（描画表現、立体表現、平面表現、工作）・鑑賞学習へ展開することを意識した内容としている。受講者に求められることは「子どもになること」である。題材への興味・関心、造形活動での発見や驚き、友達と活動を共有することの楽しさを素直に表情や言動に表すことが、実際の教育現場で子どもと共感的に学ぶことにつながる。各活動では、授業者として必要な造形的な基礎技能を身に付け、図画工作科が得意な指導者育成として、発展的な技表現への展開を身に付ける。   |         |
|                                     | 初等体育科教育内容 B   | 小学校体育科の内容と教材について理解することをテーマとし、様々な学習指導理論を踏まえて教材を構想したり、改善工夫できるようにすることを目標とする。<br>典型教材として「なわとび運動」「リズムダンス」「表現」を取り上げて、動きの習得洗練化と表現の追究活動を行うなかで教材を理解し、教え合いや伝える活動を通して教材づくりの基本的な考え方を学習する。<br>(オムニバス方式／全15回)<br>(76 上原 三十三／8回)<br>第1回～第8回 長なわとび運動の基本形態とバリエーション、短なわとびの基本形態とバリエーション、組なわとびの基本形態、なわとび技の創作と演技を行う。<br>(153 成瀬 麻美／7回)<br>第9回～第15回 表現運動の特性と導入の工夫、リズム系ダンスの特性と指導、表現の特性と指導（表現遊び、即興的な表現のいろいろ、ひとまとまりの表現の発表）を行う。                                    | オムニバス方式 |
|                                     | 初等家庭科教育内容 B   | 授業では、子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ、それらを解決する方法を、諸科学を駆使して探究し、小学校家庭科の教育内容について検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち、多様に変化し、多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち、子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を、個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題について、総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。  |         |
|                                     | 初等英語科教育内容 B   | 授業の到達目標は、小学校英語を教える上で、授業で各領域を掘り下げて取り扱うことができることである。初等英語教育の理論と実践を見通した上で、実践ができる素地を養うことを目的とする。授業の概要として、教育実践ができるための基礎的な知識を身に付け、教室での英語による実践ができることを目指すために、実践と理論との両面から行う。実践については、毎回の授業内に授業実践で必要不可欠な歌の指導、活動を体験しながら英語のやり取りを行い、加えて絵本の読み聞かせを継続して行う。次に理論について、音声に関する基本知識、発音と綴りの関係、文構造・文法の基本的な知識を身に付ける。さらに第二言語習得に関する知識を学び、異文化理解・異文化コミュニケーションについても深める。  |         |
|                                     | 初等国語科教育法 A    | 学習指導要領における国語科の領域構造をもとに、領域ごとに内容を深める。「読むこと」においては代表的な教材ごとに、「書くこと」においては文章作成の段階ごと、「話すこと・聞くこと」においては言語活動の違いごとに授業を行う。また、映像教材やICT活用など、メディア・リテラシー関連の学習内容を取り扱い、最新の教育事情を反映した国語科の授業づくりについて考える。最終的に模擬授業というかたちで講義内容を反映した学習指導の構想をアウトプットする。実際の場面のシミュレーションを行うことで、より現実的なものとして講義内容を理解する。   |         |
| 初等教科教育法科目                           | 初等社会科教育法 A    | 小学校学習指導要領における目標や育成を目指す資質・能力を理解し、学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして、様々な学習指導理論、学習指導案の書き方を学んだ後、模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第1～5回は学習指導要領、指導する上での留意点、評価、学問領域と学習内容の関係、課題解決型などの発展的内容について学びます。第6～9回は子どもの実態にあった授業作り、ICTの利用、学習指導案作成上の注意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい、第15回は模擬授業の反省を行い、よりよい授業作りについて考えていきます。  |         |

|                       |              |   |  |
|-----------------------|--------------|---|--|
| (専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | 初等算数科教育法 A   | 小学校算数科の5領域(数と計算・図形・測定・変化と関係・データの活用)及び数学的活動に関して、重要な指導内容とその指導方法・評価方法について理解を深めることを目標とする。算数科の重要な指導内容を取り上げ、その指導の体系と系統、教科書における教材の具体例やその解釈、それらの標準的な指導の背後にある教授理論や数学的知識、子どものつまずき、評価方法など、多角的に講義する。また、それらの内容の指導方法については、実践的な検討も行う。  |  |
|                       | 初等理科教育法 A    | 小学校理科における教育目標や学習内容、教材研究や授業設計の方法の理解と、児童の自然認識の発達に即した問題解決型の学習指導に必要な技能の獲得を目指す。学年・内容区分と育む資質・能力、見方・考え方に基づき設計された教育課程の特徴、実験観察活動や討論活動の設定、情報機器等の利用、指導や評価の手法等の基本的事項を具体例を含めながら概説する。また、個人及びグループでの教材分析や単元計画立案、学習活動等の検討作業や学習指導案作成、模擬授業実践等を適宜行うことにより、小学校理科の授業づくりについて理論的・体験的に学ぶ。   |  |
|                       | 初等生活科教育法 A   | 本授業では、生活科教育に関する理論と実践について学び、生活科の教育実践に意図的・持続的に取り組もうとする意欲と関心をもつこと、生活科の単元を構想し、授業を計画し指導し評価する基本的な能力を習得すること、生活科の特質に関する確かな理解に基づいた教科観及び指導観をもつことを目指す。授業方法としては、テキストや配付資料だけでなく、視聴覚教材も活用しながら、生活科教育に関する理論と実践について、具体的な事例を示し解説する。また、個人やグループによる関連資料の分析・考察、それを踏まえたディスカッション、調査活動や体験活動等の準備と計画、実際の活動、および、その発表と省察も取り入れる。                  |  |
|                       | 初等音楽科教育法 A   | 学習指導要領に示されている内容を理解するとともに、音楽科における指導上の留意点を理解すること、そして、音楽の基礎的な知識についての確認を行い、実際の指導ができるようになるための方法を身に付けることを目標とする。実際に歌唱や楽器の演奏、鑑賞、音楽づくりを体験することを通して、学習指導要領の内容の理解を深めるとともに、音楽科としての指導の留意点や子供を見る視点について学ぶ。また、実際の指導に必要な知識や技術についても、模擬授業やグループでの検討を通して身に付ける。  |  |
|                       | 初等図画工作科教育法 A | 図画工作科の特質について、その歴史的な背景、学習指導要領の構成や内容、授業実践例の分析、児童の表現の発達、教材開発の事例などを、講義と討議を通して理解する。また、実際に教材を試作してみて、その体験をもとに学習指導案を作成する。受講数に応じてグループで学習指導案を作成し模擬授業も行う。  |  |
|                       | 初等体育科教育法 A   | 授業のテーマ及び到達目標は、小学校の体育科教育における授業づくりのイメージを具体的に描けることに重点を置き、体育授業に日々取り組むために必要な理論と実践の具体を理解し、実践的指導力を養うことである。内容は、小学校体育の指導内容と学習指導の具体的な方法について、事例を参考に検討する。学校現場での実務経験を活かし、実践上の課題を踏まえながら、学習指導における「陥りやすい現状の問題点」を見付けるとともに、その改善のアイデア(運動レシビ)を考案・検討する。  |  |
|                       | 初等家庭科教育法 A   | 授業では、子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ、小学校家庭科で取りあげる教育内容をどのように指導するかを検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち、多様に変化し、多くの現代課題を抱えています。その理解に立ち、子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を、個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけた指導について、総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。   |  |
|                       | 初等英語科教育法 A   | 小学校外国語活動・外国語教育の目標をふまえ、その内容と指導法を理論と実践の両面から講義する。各学年の児童の認識発展に応じた指導内容の特徴を理解し、実践指導ができるための指導計画や学習指導案の作成、クラスルームイングリッシュ、模擬授業などを実施する。実践については、歌やチャンツ、コミュニケーション活動、文字指導、絵本の読み聞かせ等を行う。理論については、第二言語習得に関する知識、異文化理解・異文化コミュニケーション等について学ぶ。  |  |
|                       | 初等国語科教育法 B   | 小学校学習指導要領国語における各学年の「目標」や「内容」を理解したうえで、小学校段階における国語科の目標・内容・方法について、「聞くこと・話すこと」「書くこと」「読むこと」の領域ごとに、実際に小学校国語教科書を参照しつつ、基礎的な理論と方法を習得する。国語科の授業づくりについて、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」の面から考えて行く。また、国語科における言語活動・問題解決学習・デジタル教材・メディアリテラシー・幼小連携・初等国語教育の歴史などについても知見を持つ。   |  |
|                       | 初等社会科教育法 B   | 小学校学習指導要領における目標や育成を目指す資質・能力を理解し、学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして、様々な学習指導理論、学習指導案の書き方を学んだ後、模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第1～5回は学習指導要領、指導する上での留意点、評価、学問領域と学習内容の関係、課題解決型などの発展的内容について学びます。第6～9回は子どもの実態にあった授業作り、ICTの利用、学習指導案作成上の注意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい、第15回は模擬授業の反省を行い、よりよい授業作りについて考えていきます。 |  |

|                          |              |   |  |
|--------------------------|--------------|---|--|
| (専攻基礎科目群)<br>(初等教科教育法科目) | 初等算数科教育法 B   | 小学校算数科の5領域(数と計算・図形・測定・変化と関係・データの活用)及び数学的活動に関して、重要な指導内容とその指導方法・評価方法について理解を深めることを目標とする。算数科の重要な指導内容を取り上げ、その指導の体系と系統、教科書における教材の具体例やその解釈、それらの標準的な指導の背後にある教授理論や数学的知識、子どものつまずき、評価方法など、多角的に講義する。また、それらの内容の指導方法については、実践的な検討も行う。  |  |
|                          | 初等理科教育法 B    | 小学校理科における教育目標や学習内容、教材研究や授業設計の方法の理解と、児童の自然認識の発達に即した問題解決型の学習指導に必要な技能の獲得を目指す。学年・内容区分と育む資質・能力、見方・考え方に基づき設計された教育課程の特徴、実験観察活動や討論活動の設定、情報機器等の利用、指導や評価の手法等の基本的事項を具体例を含めながら概説する。また、個人及びグループでの教材分析や単元計画立案、学習活動等の検討作業や学習指導案作成、模擬授業実践等を適宜行うことにより、小学校理科の授業づくりについて理論的・体験的に学ぶ。   |  |
|                          | 初等生活科教育法 B   | 本授業では、生活科教育に関する理論と実践について学び、生活科の教育実践に意図的・持続的に取り組もうとする意欲と関心をもつこと、生活科の単元を構想し、授業を計画し指導し評価する基本的な能力を習得すること、生活科の特質に関する確かな理解に基づいた教科観及び指導観をもつことを目指す。授業方法としては、テキストや配付資料だけでなく、視聴覚教材も活用しながら、生活科教育に関する理論と実践について、具体的な事例を示し解説する。また、個人やグループによる関連資料の分析・考察、それを踏まえたディスカッション、調査活動や体験活動等の準備と計画、実際の活動、および、その発表と省察も取り入れる。  |  |
|                          | 初等音楽科教育法 B   | 授業の目標<br>音楽科の授業に焦点をあて、その教育理念・教育哲学及び学習指導要領を学習する。具体的な授業方法を考察することにより、音楽教育や音楽科授業がなぜ必要なのか、各自の音楽教育観を培う事を目標とする。また音楽に対する広い見識を持てるようにする。<br><br>授業計画の概要<br>「学習指導要領の変遷及び概観」、「歌唱教材と指導のありかた」「器楽活動の考察」「鑑賞の意義の考察(情報機器の操作も含む)」「音楽づくり(創作活動)」の考察(情報機器の操作も含む)を扱う。テキストは、文部科学省『小学校学習指導要領解説音楽編』東洋館出版社、『はじめて学ぶ教科教育⑦』ミネルヴァ書房、『小学校新学習指導要領の展開・音楽編』明治図書、『小学校教育課程実践講座 音楽』ぎょうせい、最新初等科音楽教育法(改訂版)等を用いる。学生に対する評価は、レポート試験(60%)、授業への取り組み(20%)、課題研究発表及び課題への取り組み(20%)を総合して判断する。 |  |
|                          | 初等図画工作科教育法 B | 造形活動における子どもの発達と類型について理解する。そして、図画工作科の教科書を材料に、小学校学習指導要領図画工作科の内容を理解する。受講者は、学習指導要領を理解し、各学年の目標や内容と教科書にある具体的な題材とを照らし合わせることができるようになる。その後、子どもの発達特性を踏まえた教材開発や授業設計の方法を研究し、グループで模擬授業を行う。また、前半の授業時に簡単な造形活動を行う場合もある。   |  |
|                          | 初等体育科教育法 B   | 授業のテーマ及び到達目標は、小学校体育科における単元の構想、計画、実施、評価について実践的な能力を身に付けることである。また、確実に学習指導案を作成できるようにすることである。内容は、小学校体育科における(体づくり運動領域・器械運動領域・陸上競技領域・水泳領域・球技領域・表現運動領域・保健分野)学習指導案の作成とそのピアレビューを学生同士で検討し、単元の構想・計画を重点的にを行い、教育実習での実施と評価のイメージをもつ。  |  |
|                          | 初等家庭科教育法 B   | 授業では、子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ、小学校家庭科で取りあげる教育内容をどのように指導するかを検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち、多様に変化し、多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち、子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を、個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけた指導について、総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。  |  |
|                          | 初等英語科教育法 B   | 授業の到達目標は、小学校英語を教える上で、授業で各領域を掘り下げて取り扱うことができることである。初等英語教育の理論と実践を見通した上で、実践ができる素地を養うことを目的とする。授業の概要として、教育実践ができるための基礎的な知識を身に付け、教室での英語による実践ができることを目指すために、実践と理論との両面から行う。実践については、毎回の授業内に授業実践で必要不可欠な歌の指導、活動を体験しながら英語のやり取りを行い、加えて絵本の読み聞かせを継続して行う。次に理論について、音声に関する基本知識、発音と綴りの関係、文構造・文法の基本的な知識を身に付ける。さらに第二言語習得に関する知識を学び、異文化理解・異文化コミュニケーションについても深める。   |  |

|                                   |   |  |  |
|-----------------------------------|---|--|--|
| 中等教科内容科目<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) |   |  |  |
|                                   | 国語学概説 I   | ふだん無意識で使用している日本語の特性について、多面的に知ることで、日本語使用者が、対象世界をどのような方法で把握しているのか、それはどういった特性を意味するのかを理解する。言語研究の基礎を講じたのち、音声音韻・文字表記の特徴について分析、説明する。これらを通じて、ことばに対する関心を深め、言語感覚を鍛えること、自らの力で言語を観察できる能力を身に付けることを目指す。  |  |
|                                   | 国語学概説 II  | ふだん無意識で使用している日本語の特性について、多面的に知ることで、日本語使用者が、対象世界をどのような方法で把握しているのか、それはどういった特性を意味するのかを理解する。特に日本語の語・語彙、文法に関する諸特徴について分析、説明する。これらを通じて、ことばに対する関心を深め、言語感覚を鍛えること、自らの力で言語を観察できる能力を身に付けることを目指す。  |  |
|                                   | 国語学演習 A I   | 日本語文法について、学校文法を批判的に捉えながら理解する。言語運用の実際について観察する基本的な方法を身に付けることにより、ふだん、無自覚に使用している言語の約束事を、自覚的に、ことばで整理することができるようにする。具体的には、日本語文法の諸事項について、グループ単位で担当を決め、受講者に対して学校文法の把握方法を確認しながら、基礎知識を整理する。さらに学校文法では説明のつかない言語使用を取り上げ、実際にどのように用いているのか、受講者に考えさせながら問題解決を試みる。 |  |
|                                   | 国語学演習 A II  | 史的文献を取り上げて国語学的な面から分析し、当資料成立期の言語の特色を理解するとともに、資料に描かれる表現世界を正確に理解できる能力を身に付ける。当資料中で担当する範囲を受講生ごとに決め、その範囲の本文の翻刻・品詞分解・現代語訳などを行う。その上で、担当範囲内で日本語学的な課題を見出し、適切な方法設定の上、調査、考察を行う。  |  |
|                                   | 国文学演習 A I   | 本演習では、近現代の小説・詩について専門的に学ぶために、いくつかの基礎的な手続きについて学び、作品を正確に分析できるようになる。その上で、自らの考えを論理的に説明することを目標とする。具体的には、本文の典拠、異同、注釈などについて、具体的に学ぶ。作品の初出、底本、歴史的記述、時代状況などについて調査・検討する。また作家について調査を行う。このような手続きを経た上で、小説を精読して読解を行う。さらに自分の解釈について、論理的に説明する。                    |  |
|                                   | 国文学演習 A II  | 本演習では、これまでの演習、講義などで習得した知識をもとに、日本近現代文学の小説について分析する。それと同時に方法論について理解し、その上で作品の分析に応用できるようになることを目指す。具体的には、詩・小説を緻密に読解し分析する。同時に、作家および同時代状況を視野に収める。その上で、方法論を意識した読解を試みる。多様な視点によって、作品の読解を進めていく。  |  |
|                                   | 国文学演習 B I   | 本演習では、これまでの演習や講義などで習得した知識をもとに、日本の近現代の小説・評論について専門的に学ぶ。また演習を通して、近現代の日本文化・社会に対する理解を深めることを目標とする。具体的には、日本語で書かれた小説・評論について詳しく分析する。そのために、近現代の日本文化・社会及び歴史についての認識を深め、問題意識を持ちつつ作品を読解する。その上で、方法論を意識した読解を試みる。歴史的な視点を持ちながら、テキストの読解を進めていく。                    |  |
|                                   | 国文学演習 B II  | 本演習では、これまでの演習や講義などで習得した知識をもとに、日本の近現代小説について専門的に学ぶ。また演習を通して、現代日本の文化・社会に対する理解を深めることを目標とする。具体的には、日本の小説について、中長編小説を中心に詳しく分析する。そのために、近現代の日本文化・社会についての認識を深め、問題意識を持ちつつ作品を読解する。その上で、方法論を意識した読解を試みる。広い視野を持ちながら、テキストの読解を進めていく。                             |  |
|                                   | 国文学史概説  | 諸時代文学の具体例とテーマごとの文学の流れを講義する。上代・中古・近世文学の具体例を精読する回とテーマごとの文学の流れを把握する回を交互に設け、知識暗記型ではない真の国文学史理解を目指す。ちなみに、半期で全時代をカバーするのは至難のわざであるが、第13回では近代に入ってから明治新曲の歌詞もあつかう。また、第14回では近代文学への流れにも触れ、抜けている中世文学への流れにも同回で触れる。   |  |
| 漢文学概説                             | 文字・語彙・音韻・句型など、漢文学の基礎となる中国の言語文化について概説し、合わせて、日本における漢文の受容と現在の漢字・漢文教育との関係について論じる。漢字の構成法、文字の変遷と特徴、辞書の種別と歴史、漢字の字音の理解に必要な音韻学の基礎等について説明し、辞書の機能を十分に活用する方法を紹介する。以上は漢文の読解と漢字漢文の授業に必要不可欠な知識と技術であるため、受講生は授業を通して十分に理解を深め、身に付けることが求められる。 |  |  |
| 漢文学 A                             | 著名な歴史故事や諸子百家の議論文など、中学・高校教科書で扱われることの多いジャンルの漢文作品を主な対象として、訓読・日本語訳の実践練習を通して総合的な漢文読解力を身に付ける。先に主な史書の記事によってもとの歴史故事を読解した上で、それを踏まえた諸子百家の寓話や後世の論評などをとりあげて読解をする。課題文については、漢和辞典を用いて事前に訓読・日本語訳を作成するなど、周到に準備することが要求される。                  |  |  |

|                                     |      |          |   |  |
|-------------------------------------|------|----------|---|--|
| (専門教育科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(中等教科内容科目) | (国語) | 漢文学B     | <p>演習形式で漢詩文を精読する。前半は、中学・高校で教材となることの多い中国の散文作品を取り上げる。受講者は予習として辞書引き・訓読・日本語訳を行い、授業では文章を正確に読みとぎ、作品の背景を理解することを目指す。後半は、グループごとに詩を一首ずつ調べてレジュメの作成と発表を担当し、グループの発表内容を踏まえて全体で解釈についての議論を行う。最後は、議論の中で浮かびあがったいくつかの解釈の妥当性について各自考察し、期末レポートにまとめる。作品の精読と関連文献の調査・検討によって、漢文読解力を高め、中国の詩文に対する知識と理解を深めることを目標とする。</p>   |  |
|                                     |      | 書道演習 I   | <p>学校教育の中で行われる書写書道の指導における楷書の基本的な書法について、中国の楷書の名筆の書法についても学習を行うことにより、段階的・系統的に習得する。文字を正しく整えて書くという点を中心に、基本点画の用筆、字形、部分の組み合わせ方や配列法などのポイントについて、講義を交えながら実技指導していく。また、日常の書にも対応できるように、細字(小筆)や硬筆の指導もしていく。なお、毎回の授業は、アクティブ・ラーニングを取り入れた学習や指導法についても触れながら進めていく。</p>   |  |
|                                     |      | 書道演習 II  | <p>学校教育の中で行われる書写書道指導における楷書(漢字・かな)の書法について、中国や日本の漢字やかなの名筆の書法の学習も行うことにより、段階的・系統的に習得する。筆順や許容については、楷書と行書との関係にも触れながら、学校教育での取り扱い方や指導の在り方についても考えていく。また、日常の書にも対応できるように、毎回の授業において、毛筆と同時に細字(小筆)や硬筆の指導もしていく。なお、毎回の授業は、ペアやグループでの活動も行い、アクティブ・ラーニングを取り入れた学習や指導法についても考えながら進めていく。</p>  |  |
|                                     |      | 書道演習 III | <p>中学校国語科書写の行書教材、また高校芸術科書道の行書教材を中心に扱う。行書の特徴の適格な理解を図り、効率のよい学習指導を通してその書写能力を身に付けさせるためには、可能な限りの系統的な行書教材が工夫・精選されなければならない。行書の特徴が段階的に理解できるように教材を分析し、その書法技能習得につとめ、有意な「学習指導」「学習支援」ができるようにする。具体的には、行書の基本および行書に調和するひらがな・カタカナの書法、硬筆の書法について理解し、書写技能を段階的・系統的に習得する。また、教材論・指導法等を深く考え、理解する。</p>  |  |
|                                     |      | 書道演習 IV  | <p>中学校国語科書写の行書教材、また高校芸術科書道の行書教材を中心に扱う。行書の特徴の適格な理解を図り、効率のよい学習指導を通してその能力を身に付けさせるためには、可能な限りの系統的な行書教材が工夫・精選されなければならない。行書の特徴が段階的に理解できるように教材を分析し、その書法技能習得につとめ、有意な「学習指導」「学習支援」ができるようにする。具体的には行書の基本および行書に調和するひらがな・カタカナの書法、硬筆の書法における書写技能の向上を図る。併せて古典(行書)の臨書の研究をする。さらに、身の回りの書に注目し、生活に生かす(実用的な書式)についても考察し、文字文化に関して理解を深める。また、中・高等学校における教材論・指導法等を考え、理解する。</p>                    |  |
|                                     | 社会   | 史学概論     | <p>歴史学は根拠となる史料を読み込み、そこから情報を抽出して、それを論理的に組み合わせることで筋道の通った仮説を形成する作業である。それを、主に日本史上の事例を取り上げながら、具体的に考えていく。通史的な流の中で考察するため、古代史における金石文史料をめぐって学説が対立した事例、中世史において事実と評価が錯綜してきた鎌倉幕府成立の問題、史料の捉え方が変化し、それによって歴史像の見方も変わってきた戦国時代の諸事例などを扱って、実際の歴史研究がどのように行われるものであり、それゆえにどのような能力が要求されるものであるのかを講述していく。</p>   |  |
|                                     |      | 日本史概説 I  | <p>天皇と武士という二面から、日本史の特質を考えていく。日本史の中で天皇が果たした役割は、時代によって変化しているが、それゆえに天皇のありようをみていくことで、各時代の政治や社会の様相を捉えることができる。武士は古代末期に登場し、中世から近世の歴史においては主役ともいえるような存在となった。その役割や在りようも時代の中で変化しており、この両者の関係をたどることが日本史の流れを理解するうえでの重要な鍵となる。そうした視角から、日本史を通史的に講述していく。</p>  |  |
|                                     |      | 日本史概説 II | <p>日本史を対外関係の側面からとらえていく。日本の歴史は、列島内部の事象からだけでなく、東アジアや世界との関わりの中からも、時代ごとの特質を作り出してきた。そうした多面的な歴史像を学ぶとともに、歴史の学修のためには根拠すなわち資料に基づく考察が必要であることも受講生には理解してもらおう。それは将来の教材研究につなげてもらうためにも必要である。取り上げる出来事に関わる史料を掲げ、その読解技術の習得も重視していく。そのため、古代から近代までの対外関係に関わる重要資料を取り上げながら、日本史の流れを通史的にたどっていく。</p>   |  |
|                                     |      | 外国史概説 I  | <p>中国を中心とする東アジアの歴史を、ユーラシア大陸の動向の中で、古代から近代まで講義形式で概観する。世界史における東アジアの位置づけや時代区分を論じた後、中国文明の多面的な起源、中華の出現と拡大、春秋・戦国時代の変革、統一帝国の成立、ユーラシアの古代文明と農耕・遊牧地帯、中華世界の分裂と拡大、隋唐時代の世界帝国の成立と崩壊、唐宋変革と北アジア国家の中国統治、モンゴル帝国と東西世界の結合、明清時代の「大きな中国」と「小さな中国」、清末の危機と中華民族論の出現、台湾の歴史、世界史におけるナショナリズムと近代、といった歴史事象を取り上げる。受講生には、日本を取り囲む東アジアの歴史に関する基礎的な知識を身に付けてもらうとともに、文明・民族やナショナリズムといった普遍的なテーマについても考察を促す。</p> |  |



|                                     |                 |   |  |
|-------------------------------------|-----------------|---|--|
| (中等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) |                 |   |  |
|                                     | (社会)            | 外国史概説Ⅱ  | 東アジアの歴史上、国際関係に大きな影響を与えてきた中国王朝の対外関係を取り上げ、通時代史的な理解と問題意識を獲得することを目指す。まず前半では、関連する概念定義や華夷思想に関する概説を行った後、前近代の中国王朝と周辺諸国との関係に関する先行研究、特に西嶋定生の「冊封体制」論や栗原朋信の「内臣・外臣」構造論といった古典的な研究の概要と、その後の研究動向を批判的に整理し、それを通じて東アジア外交交流史を概観する。後半では、春秋・戦国時代から秦漢時代を中心に、先行研究の諸論点に対して最新の出土資料を含めた原典史料に基づく検証を行う。これらを通じて、受講生には「冊封体制」や「羈縻政策」といった基礎的な歴史事象に関する包括的な知識を身に付けるとともに、歴史学の批判的な思考力を養成し、歴史のとらえ方について関心を深めてもらう。 |
|                                     |                 | 地理学基礎Ⅰ  | 本講義では、身近な大都市を事例にしながら、特に歴史地理学と文化地理学の視点から都市の時空間形成を読み解くことで、都市を地誌的に理解する能力の育成を目指す。(思考/判断)社会科地理の指導における教師の判断や考慮事項について推測ができる。(技能/表現)地理学的なもののみ見方・考え方を習得し、自らの考えを表現できる。   |
|                                     |                 | 地誌概説Ⅰ   | 本講義は、現代日本の地域構造を解明することで日本の地域的特色を把握し、あわせて動態地誌的手法の理解をはかることをテーマとしている。中学校社会科または高等学校地理の指導を行う際、地誌学を理解し、地域的特色を当該地域の構造から把握して描き出す能力の育成が肝要である。例えば、それは中学校社会科の学習指導要領において、動態地誌的手法による学びで構成されていることにも示されている。そのため、本講義では、現代日本を事例に人口・都市・産業の各事象にみられる地域性を把握し、それらが有機的に連関して現代日本の地域性が形作られていることを理解すること、さらに地域の構造的把握の手法を学び、一地域を事例にその地域性を動態的地誌的手法で解明できることを目標に講義を行う。                                     |
|                                     |                 | 地誌概説Ⅱ   | 本講義では、地誌学の2大類型である、静態地誌と動態地誌とそれらに基づく地域の地誌的考察の理解をテーマとする。それは、中学校社会科地理的分野の学びが学習指導要領において動態地誌的手法で構成され、高等学校地理歴史科の地理探究において地誌的考察が求められているからである。そこで、地誌学及び地域性を描き出す地誌的手法を理解し、一地域を対象にそれを描き出せる能力の獲得を目標とする。そのため、講義前半ではヨーロッパの地域性を静態地誌的手法から描き出し、後半では一国の地誌の事例としてオランダを取り上げて、その地域性を動態地誌的手法から解明していく。これらによって、静態地誌と動態地誌を理解させ、地誌的考察の手法を習得させていく。   |
|                                     |                 | 地誌特論  | 本授業では、島嶼地域やオーストラリア大陸を中心としたオセアニアの地誌を学ぶ。「地誌学」というのは、およそ当該地域の相貌を「総合的」に把握し、特定地域の「地域像」をおおまかに描き出す地理学研究法のひとつである。本授業を通じて、オセアニアの自然地理(地形、気候、災害など)と人文地理(政治経済活動、社会文化現象、歴史、人口分布、都市形成など)を統合して学んでもらう。  |
|                                     |                 | 自然地理学基礎   | 本講義では、自然地理学の様々な事象の成り立ちや分布を講義することで、自然地理学の考え方と基礎的な知識を習得することを目的とする。具体的には、地理学的考察のベースとなる地図の見方と考え方、地形、大陸と海洋の影響、気候環境と地域等についてマクロ・メソ・ミクロの各スケールから具体的事例を提示し講義する。また、自然と人間の関係を理解するため、地球温暖化やヒートアイランド等や自然災害についての考察も加える。これらから自然地理学の基礎的知識とともに、地理的見方・考え方を理解し、習得することを本講義の最終目標とする。   |
|                                     |                 | 法学概論(国際法を含む。)   | 本講義では、まずは法学の基礎を学び、その上で法学分野のなかでも近年話題となっているテーマについて学ぶ。それにより、学生が以下のような力を獲得することを目指す。①自らが生きている社会において、法律は決して無関係なものではなく、様々な場面に関係しているものであることを理解する。②法律情報に自らアクセスできるようになる。③個人の尊厳と人権についての基本的な考え方を理解し、自身の周辺の問題を考える際の指針とする。   |
|                                     | 政治学概論(国際政治を含む。) | この授業の目的は、アクティブ・ラーニングを通して政治や政治学に親しみ、それらへの理解を深めることである。今日の世界ではグローバル化の進展や内政と外交の連続性が高まっていることなどにより、政治学の議論において国際関係や国際問題を扱うことは当たり前になっている。そこで、近代ヨーロッパで成立した国民国家体系や西欧民主主義の変遷と、現代世界におけるそれらの変容を検討し、権威と権力、バランスオブパワーなど政治学や国際政治学の用語の意味を正しく理解する。 |  |
|                                     | 公法学概論           | 本講義では、公法(憲法や行政法)の領域に関わる法原理、歴史背景、現代社会との関係についての基本を学ぶ。そのうえで、具体的な事例の検討を通して、それらの諸原理や歴史的背景が現実の社会制度のなかでどのように機能し、またどのような問題が存在するのかを主体的に考えることを目指す。また、グループワークやプレゼンテーションを行うなかで、論理的な思考能力の獲得に向けた訓練と、法律情報へのアクセスができるようになることも本講義の目指すものである。       |  |

|                                     |      |                     |  |  |
|-------------------------------------|------|---------------------|--|--|
| (中等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | (社会) | 社会学概論               | <p>本講義では、著名な社会学者を時代ごとに取り上げながら、その理論について理解すると共に、そのような理論を構築する背景となった社会的背景や彼らが行き届くとしていた社会的課題について理解する。時代区分に浮ついては、富永健一のカテゴリーを用いて、社会学者を社会の近代化の過程と対応した時代区分と地域に基づいて、第一期、第二期、第三期と区分する。おのおのの時期について、代表的な社会学者を取り上げてその理論について解説すると共に、彼らが生きた社会状況を、社会の近代化の段階として読み解き、その中でどのような社会問題に出会い、それをどう解釈し理論化して、対応しようとしていたかについて理解することを試みる。またそうした中から現代にも通じる課題についても考察できるようにする。</p> |  |
|                                     |      | 経済学概論<br>(国際経済を含む。) | <p>本講義は、社会の諸問題を経済の側面から分析するための、方法的基礎を習得することを目的とする。ミクロ経済学の観点からは、消費者や企業の行動、市場の役割と限界等を考察する。マクロ経済学では一般的なIS-LM分析を理解し、マクロ経済政策のモデル上の影響について概略を理解する。その基礎知識を基に、1国モデルの制限を外し、国際経済に関する経済理論を学ぶ。そして、ミクロ経済学・マクロ経済学の基礎理論を習得することによって、金融論、国際経済学、国際金融論など、より専門化されている経済理論の学習への足掛かりとすることを旨とする。</p>   |  |
|                                     |      | 社会調査論               | <p>本講義は、社会調査の基礎知識についての習得を目的とする。社会調査を実際に行うにあたっての問題意識の作成から調査設計、実施の手順から分析までを、質的・量的調査の双方について学習する。社会調査についての教科書として佐藤健二・山田一成の『社会調査論』を用いて、質的・量的社会調査の実施手順に沿って、必要な基礎知識の習得を行う。また同時に、学生それぞれが、半構造化されたインタビュー調査を行って、その結果をプレゼンテーションし、また他の調査結果と比較しながら、考察、分析を行うことで、社会調査の手順を実践的に習得できるように試みる。</p>  |  |
|                                     |      | 金融論                 | <p>金融はあらゆる経済活動に付随するものである。我々が経済活動を通じて財を購入するときには、貨幣の支払いによる決済が行われる。また、預金をはじめとするさまざまな貯蓄手段を我々に提供し、同時に企業等に対しては資金を調達する手段を提供している。そのため、金融は実際の経済活動の円滑化に大きな役割を果たしており、そのありようによって経済の状況にも影響を与える。本講義では、経済活動を支える基盤となっている金融の仕組みについて、貨幣、銀行、信用創造、中央銀行という重要なファクターについての理解を行うと同時に、それらすべての構造的な把握を目指し、経済と金融の関連についての理解を念頭に置きながら学習する。</p>                                    |  |
|                                     |      | 哲学史概説Ⅰ              | <p>本授業は、古代ギリシアから中世・近世・近代ヨーロッパへと継承される哲学的思考の展開について説明することができるようになり、主要な論点について批判的吟味を行うことができるようになることを目指している。授業の進め方としては、西洋哲学の代表的な哲学者の著作からの翻訳抜粋を資料として用い、内容を解説していく講義形式をとる。取り上げる哲学者・著作としては、プラトン『国家』、アリストテレス『形而上学』、トマス『神学大全』、デカルト『省察』、カント『純粋理性批判』などである。</p>   |  |
|                                     |      | 哲学史概説Ⅱ              | <p>古代ギリシアから現代にいたる西洋哲学史の概観をつうじて西洋哲学に関する基礎的な知識を獲得すること、これを本授業の目標とする。しかしながら、西洋哲学史の全体を通覧することは時間的に不可能である。よって本授業は、通史というよりも、むしろ哲学史における重要な諸部分たとえば、「古代ギリシア哲学」や「イギリス経験論」や「ドイツ観念論」など一のいくつかにフォーカスした展開となるであろう。</p>   |  |
|                                     |      | 倫理思想史概説             | <p>この講義では、主に古代ギリシアもしくは原始キリスト教から近現代ヨーロッパに至る西洋の倫理思想史の流れを、代表的な立場や潮流をいくつか取りあげながら、概観する。高等学校公民科の「倫理」の、西洋思想史の部分の内容を、とりわけ重要な哲学者・思想家に焦点を絞ってより深く学ぶとともに、可能な限り様々な哲学者・思想家の原典(の翻訳)の文章に触れることを通じて、大学での演習形式での授業に必要な、古典読解の能力を受講者各自が身に付けることを目指す。</p>  |  |
|                                     |      | 初等整数論               | <p>高等学校までに整数の四則演算および整数の幾つかの基本性質を学んできた。しかし、素因数分解の一意性を証明しないまま使用している定理が少なくないため、それらに証明を与え整数の正しい知識と理解を身に付けることを目標とする。また、数の合同等の新たな概念を導入し整数のもつ諸法則を理解することを目標とする。前半は素因数分解の一意性を証明することを目標に、除法の定理、ユークリッドの互除法等を学ぶ。後半は、素数についての理解を深めた後、合同の概念を導入し整数の性質を学ぶ。</p>  |  |
|                                     |      | 線形数学Ⅰ               | <p>線形代数は微分積分と並び、大学で数学を学ぶ上で基礎になるものである。この講義では、行列の定義、演算法則および諸性質、逆行列、連立一次方程式の解法、行列の階数、行列式などの基本的事項を学ぶ。また、2次・3次元空間における直線や平面の方程式を通し、連立方程式や行列式の図形的な性質を学ぶ。定義や定理の定着のための演習問題や、定理の証明を行うことで、線形代数の基礎について理解を深め活用できることを目指す。</p>  |  |

|                                     |   |  |  |  |
|-------------------------------------|---|--|--|--|
| (中等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | (数学)  | 代数学概論  | 本講義の目的は、教師として必要な代数学に関する基礎的な事柄を解説することである。「集合と論理」で学習した内容を前提として、広く代数学を学ぶためのステップとなる群、環といった代数系の定義とその基本的性質から始まり、部分群、部分環、正規部分群、イデアル、群および環の準同型写像といった諸概念を学んだ後、群および環の準同型定理までを、具体的な例を交えながら講義を行う。この授業を通して、自ら考え、論理的に理解する能力を高めることを目標とする。 |  |
|                                     | 集合と論理   | 小学校入学以来学習してきた数、方程式、不等式、関数等の基本的概念を集合論の立場から再構築し、それらの理解を深めていく。この講義を通して、基本的な数学の考え方や記号の使い方を学び、教師に必要とされる「ものごとを順序だてて論理的に説明する力」といった基礎的な力を養うことを目標とする。命題・論証・集合に係る基礎概念を学んだ後、写像や同値関係についての基本事項をふまえ、集合の濃度の概念までの理解を目指す。   |  |  |
|                                     | 線形数学Ⅱ   | 前期の「線形数学Ⅰ」で学んだ行列と行列式の基礎知識を前提に、ベクトル空間の理論と行列の対角化について学ぶ。一次独立なベクトルがベクトル空間の拡がりを決める基本的なベクトルであること、ベクトル空間からベクトル空間への線形写像を行列により実現することができること、座標軸を変換することで、その写像としての行列も対角行列などの単純な形に変換されること、行列式の符号が2次曲線の分類に有効なこと等、「線形数学Ⅰ」で学んだ事柄の幾何的側面を理解することが目標である。                                       |  |  |
|                                     | 幾何学概論   | 「直線」や「三角形」、「平行線」とは何かを改めて考えると共に、初等幾何の様々な定理、特にユークリッド幾何学における三角形や円の性質を線形代数、微積分、群論の知識を用いてふりかえり、それらを踏まえ、曲線と曲面について学ぶ。まず、パラメータ表示された曲線から、曲率・振率と呼ばれる量とその計算方法を学ぶ。多くの合同な曲線は、曲率と振率で特徴付けられることを学ぶ。次に、曲面の第一・第二基本形式と曲面の形状の関係を学ぶ。さらに曲面のガウス曲率・平均曲率とその計算方法を学ぶ。多くの合同な曲面が第一・第二基本形式で特徴付けられることも学ぶ。 |  |  |
|                                     | 微分積分Ⅰ   | 微分積分は線形代数と並び、大学で数学を学ぶ上で基礎になるものである。この講義では、実数と数列・連続関数、および一変数関数の微分法に関わる基礎理論を学ぶ。基礎概念の理解と共に計算技能を修得し、それらを活用できるようになることを目標とする。高等学校の数学Ⅲで学んだ微分積分を振り返りつつ、厳密性に欠けている事柄や取り扱わない事柄を適時盛り込み、微分積分の基礎理論について理解を深め活用できることを目指す。   |  |  |
|                                     | 微分積分Ⅱ   | この講義では、一変数関数の不定積分、定積分の定義・性質、定積分の面積計算等への応用、広義積分、級数の収束・発散について学ぶ。有理関数、三角関数、指数関数や無理関数を含む関数の不定積分の計算技術を学ぶ。その応用として、面積や曲線の長さを定積分を用いて求めることができることを知る。極限によって定義される広義積分の積分可能性を吟味する。また、級数の収束・発散とそれらの判定法を通して不等式により評価することの重要性を認識してもらう。   |  |  |
|                                     | 解析学概論   | 多変数関数の微分法(偏微分法)および積分法(重積分法)の基礎概念とそれらを用いた計算方法および応用がテーマである。偏微分法の意味を理解し、偏導関数の計算、連鎖律、テイラー展開、極値問題、また重積分の基礎概念とそれらの基本性質、累次積分、広義重積分、変数変換公式を用いた重積分の計算方法を修得することを到達目標とする。多変数関数(主に二変数)の微分積分法の基礎概念について、具体例を豊富に盛り込みながら講義する。  |  |  |
|                                     | 確率統計Ⅰ   | データの整理(記述統計学)、及びデータ分析の基礎となる確率論の基本概念について学ぶ。記述統計学については、度数分布表やヒストグラム、データの特性値(平均や分散)、散布図や相関係数などのデータの整理の習熟を目標とする。確率論の基本概念については、確率空間や事象の独立性、データの数学的表現としての確率変数やその分布、期待値、分散、さらに様々な確率現象に現れる二項分布や正規分布などの確率分布の諸性質を学ぶ。   |  |  |
|                                     | 確率統計Ⅱ   | 「確率統計Ⅰ」で学んだことを基礎として、独立な確率変数列とそれらの分布、確率変数の独立性・従属性、共分散と相関係数、合成積、チェビシェフの不等式、大数の法則や中心極限定理を学ぶ。さらに、それらを基礎にした統計的な推測(例えば、点推定、母比率や正規母集団における母平均の区間推定および仮説検定)についての基礎理論を概観し、それらの考え方を理解することを目指す。これらを定着させるため、豊富な具体例と共に学んでいく。   |  |  |
| プログラミング                             | ビジュアルプログラミング言語を利用し、プログラムすることを通して「試行錯誤の中から学ぶ」経験を積むことがテーマである。また同時に、アルゴリズム的な発想力や一般的な問題解決において重要な方法となる「解決できる問題に小分けする」「決まった動作はパッケージにして考える」といった頭の使い方をプログラミングで訓練する。最終的には自らの手で数学教材や数理実験のための道具を開発できるようになることで、学校教育現場におけるICTを利用した新たな表現力を身に付けることを目標とする。複数回の講義ごとに内発的・主体的に取り組めるプログラミング課題を設定し、課題作成に必要なスキルを学習・習得する。また課題制作において仲間と試行錯誤する中で発見的に仕組みを理解していく環境と仕掛けを用意する。 |  |  |  |

|                                     |        |   |  |
|-------------------------------------|--------|---|--|
| (中等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | 物理学 I  | 古典物理学の根幹をなす力学、電磁気学並びに熱力学の基礎について学び、物理学における基本概念や基本法則を習得し、中学校や高等学校で物理の関連内容を教える上で必要な知識基盤を築くことを目標とする。力学については、重力下での物体の運動と単振動の運動を、電磁気学では静電場の性質を、熱力学では熱力学の第一法則を含む熱力学の基礎を理解することを目標とする。力学、電磁気学、熱力学の3つのテーマについて学び、各テーマの主要概念について自ら説明することができるように、グループワークなどの学び合いの時間を設ける。   |  |
|                                     | 物理学 II | 古典物理学の根幹をなす力学と電磁気学の基礎に加えて、現代物理学の概要について学ぶ。物理学における基本概念や基本法則を習得するとともに、中学校や高等学校で物理の関連内容をより良く教えられるように、学んだ知識を広範囲の自然現象や科学技術と結びつけて理解できるようになることを目標とする。力学については、仕事とエネルギーの関係や質点の回転運動を、電磁気学では静電場や磁気力の性質を、現代物理学では原子や原子核の構造とそれらの放射現象について理解することを目標とする。力学、電磁気学、現代物理の3つのテーマについて学び、各テーマの主要概念と物理現象との結びつきを自らから説明することができるように、グループワークなどの学び合いの時間を設ける。             |  |
|                                     | 物理学実験  | 我々の身の回りで生ずる様々な自然現象は、力学的・電磁氣的・光学的な物理現象と密接に関わっている。教育現場において、このような自然現象についての問題を科学的に解決するための資質・能力の育成が重要課題の一つに位置付けられている。本実験を通して、自然現象を理解する上で最も基本的なアプローチとなる実験手法を取得するとともに、科学的なものの見方・考え方を身に付けることを目的とする。さらに、講義形式で学んできた数学的な概念と相補的に結びつけることにより、より深く自然現象を理解することを目指す。本実験では、一般的な科学的問題解決プロセスを体験するために、各自が実験テーマに関連する物理現象の予備調査を行った上で、実験計画・結果予測・本実験・結果記録・実験考察を行う。 |  |
|                                     | 化学 I   | 本講義では、化学の基礎を修得することを目的として、原子の構造と性質、化学結合による分子の形成、元素の周期律、原子・分子によって構成された物質の状態(気体、液体、固体)、酸と塩基の性質、酸化還元反応、化学反応速度と化学平衡、化学反応によって生じる熱、無機化合物の性質、有機化合物の性質、高分子化合物の性質、生体を構成する物質の性質、現代社会を支える機能性材料の化学について説明する。扱った内容に関して演習問題を課し、知識の定着を図る。  |  |
|                                     | 化学 II  | 無機化学・有機化学・高分子化学は、我々の日常生活と深い関わりをもっている。例えば、医薬品、化粧品、高分子材料、染料などの製造において、無機化学、有機化学および高分子化学はその基盤となっている。また、他の領域の科学とも密接な関連があり、例えば、生体現象を分子レベルで理解するためには、無機・有機化学や天然高分子化合物の化学の考え方は必要不可欠となっている。この講義では基礎知識と基本概念の習得に重点をおき、系統的に分類された様々な無機化合物、有機化合物、および高分子化合物について、その構造、性質、合成法および反応について学ぶ。   |  |
|                                     | 化学実験   | 本実験は、化学実験を行うための基礎技術を修得することを目的として、化学薬品や実験器具を取り扱うための安全教育、ビベットとキャピラリーの製作をテーマとしたガラス細工法の修得、中和滴定をテーマとした分析化学実験、様々な固体物質の密度測定をテーマとした物性測定実験、計算機シミュレーションおよびコンピュータを活用したデータ処理をテーマとした計算化学実験、エステル化合物の合成をテーマとした有機合成実験、鉄錯体の合成をテーマとした無機化学実験、および実験結果についての討論と講評より成る。  |  |
|                                     | 生物学 I  | 本授業では、生命科学の諸現象を理解するうえで、その基礎となる生命の構造と機能について理解する。生物の基本単位である細胞や細胞小器官などの構造や機能について、具体的な例を提示しながら解説する。また、生物の多様性についても、無セキツイ動物やセキツイ動物を含む多様な生物種の基本的な分類や進化に基づいた相違点と共通点について、実際の事例を確認しながら理解する。生物の進化の道筋をたどり、最終的にはヒトという種に対する生物学的理解を深める。さらに、植物の多様性については、藻類、コケ、シダ、裸子、被子植物等、進化の各段階ごとに講義し、それぞれどのような工夫によって繁栄できたのかを考えさせながら、動物とは異なる植物の生活史について理解する。              |  |
|                                     | 生物学 II | 本授業では、生命の誕生から始まり、個体が形成され、その後成長する課程や、成熟後の生殖と受精について理解する。また、動物や植物についての生殖様式の違いや遺伝についても考え、生命の連続性について理解を深める。ヒトを中心とした動物の機能やその研究方法、社会とのかかわりについて、最近の技術や話題をとりあげつつ解説する。さらに、私たちヒトと動物や植物との関わりを含めた、生物と環境との関りについて学び、社会で議論となることの多い身近な話題についても触れながらリテラシーを養う。  |  |
|                                     | 生物学実験  | 基礎的な生物実験・実習を通して、生物学に関する知識や技能を習得し、結果の整理や表現能力の育成等を図る。様々な生物の細胞について、顕微鏡を用いて観察し、種類ごとの特徴や違いについてまとめ、顕微鏡の使い方や、生物種毎の詳細な構造の違いについて理解する。また、生物の刺激に対する行動観察を通して、生物体内の情報伝達系について理解する。学内外のフィールドでは、特徴的な環境に生息する動物を探索するとともに、見つけた生物を詳細まで観察し、分類する。その他、植物と地質の関係、海岸などの環境に生息する植物についても詳細に観察し、環境と生物の関連性について考察する。さらに、人と自然のかかわりについても考え、生物学に関する理解を深める。                   |  |

|   |         |  |  |  |
|---|---------|--|--|--|
| (中等教科<br>内容科目)<br>(専攻基礎<br>科目群)<br>(専門教育<br>科目) | (理科)    | 地学Ⅰ  | 「地学的」な自然の事象の特徴は、広大な空間の広がりや長大な時間の流れの中で、様々な形やエネルギーをもち、相互に関連しながら複雑に変化し続けているという点にある。地学分野では、現象を実験室等で再現することが難しい場合が多いため、望遠鏡による観測やフィールドワークを通して得られる事実に基づき自然現象を理解する方法論を重視する。これら地学特有の手法と物理学や化学、生物学の基礎的な知識を織り交ぜながら、我々の身の回りにある自然を理解し、その成り立ちを探る総合的な学問分野が地学であり、本講義では地学の中でも「固体地球分野」、「岩石・鉱物分野」、「地質分野」に焦点を当て、地球に関する現代的理解を概観する。   |  |
|   |         | 地学Ⅱ  | 「地学的」な自然の事象の特徴は、広大な空間の広がりや長大な時間の流れの中で、様々な形やエネルギーをもち、相互に関連しながら複雑に変化し続けているという点にある。地学分野においては、現象を実験室等で再現することが難しい場合が多いため、望遠鏡による観測や野外における観察・調査を通して得られる事実に基づき自然現象を理解する方法論を重視する。これら地学特有の手法と物理学や化学、生物学の基礎的な知識を織り交ぜながら、我々の身の回りにある自然を理解し、その成り立ちを探る総合的な学問分野が地学であり、本講義では地学の中でも「大気・海洋分野」と「天文分野」に焦点を当てて、その現代的理解を概観する。   |  |
|   |         | 地学実験   | 「地学的」な自然の事象の特徴は、広大な空間の広がりや長大な時間の流れの中で、様々な形やエネルギーをもち、相互に関連しながら複雑に変化し続けているという点にある。地学分野では、現象を実験室等で再現することが難しい場合が多いため、望遠鏡による観測やフィールドワークを通して得られる事実に基づき自然現象を理解する方法論を重視する。これら地学特有の手法と物理学や化学、生物学の基礎的な知識を織り交ぜながら、我々の身の回りにある自然を理解し、その成り立ちを探る総合的な学問分野が地学であり、本実験講義では、それらの「地学特有の方法論」を具体的な実験・観測・フィールドワークを通して学ぶ。小学校、中学校、高等学校の理科（地学分野）で実験・授業を行う際に必要となる基礎的な知識と手法を習得する。 |  |
| 音楽  | ソルフェージュ | 聴音や即興演奏などさまざまな実習を通して、音楽的な反射能力を高めることを目標とする。楽譜を読み書きできるだけでなく、これまで培った音楽理論を鍵盤上で応用する能力を養うことで、各自の音楽的スキルの向上や創意の萌芽の助けとなれればと考える。<br><br>(オムニバス方式／全15回)<br><br>(89 麓 洋介／5回)<br>与えられた旋律に対する伴奏付けを毎回複合的に取り扱う。<br><br>(134 橋本 剛／10回)<br>聴音、即興、初見、リズム読譜、連弾実習などを毎回複合的に取り扱う。   | オムニバス方式  |  |
|   | 声楽Ⅰ     | 音楽教師に必要とされるスキルの一つである、人前で声を出す事、歌を歌う事に抵抗なく自信をもって臨めるように、演奏するために必要な基本的な演奏技術と表現の方法を身に付けることを目標とする。授業の概要と形態は、声楽の初歩的テキストであるイタリア古典歌曲を題材に、発声法、イタリア語の発音の仕方、演奏解釈の理論と方法を学び、個人レッスンの形態で授業を進めていく。授業では個々に歌う形態を進めていくが、グループで同じ曲を勉強するので、お互いに聴きあい、違う視点からも学習を深めていく。  |  |  |
|   | 声楽Ⅱ     | 声楽Ⅰで学んだことを基に、自らの歌唱技術だけでなく、どのようにして歌唱指導に結び付けていくか、その理論と方法を学び演習を重ねていく。授業の概要と形態は、ベルカントオペラの代表的作曲家ヴェルディ、ロマン派の作曲家トスティの作品を取り上げながら、声楽Ⅰで学んだ知識と技術を更に深めていく。発声法、イタリア語の発音の仕方、演奏解釈を学び、個人レッスンの形態で授業を進めていく。授業では個々に歌う形態を進めていくが、グループで同じ曲を勉強するので、お互いに聴きあい、違う視点からも学習を深めていく。  |  |  |
|   | 合唱Ⅰ     | 小、中学校の音楽教育において合唱は授業はもとより、クラブ活動としても盛んに行われている。この授業では合唱や合唱指導の基礎的な知識や技術を身に付けることを目標とする。授業の形態と概要は、学生が主体となり、指揮者、伴奏者を学生が担当し、他の学生が演奏しながら曲作りに関して意見を出し合い、学校現場で校内合唱コンクールや学外での合唱コンクールでよく演奏される曲を課題曲として、音取りから始め、演奏会で歌うレベルまで曲を仕上げる。  |  |  |
|   | ピアノⅠ    | 主に小・中学校で扱う楽曲の伴奏と古典派の楽曲をテキストとし、それぞれを演奏するために必要な基本的な演奏技術と表現の方法を身に付けることを目標とする。ピアノを弾くことのみにとどまらず、楽曲を理解し表現することを目指す。個人レッスンを基本とするが、毎回グループでの聴きあいを行い、グループ内での学習曲についても理解を深めていく。前半は、伴奏を中心に進める。伴奏のパートを演奏するだけでなく、テンポをつくること、歌を聴きながら演奏することができる技術の習得を目指す。後半はバッハのインヴェンション、シンフォニアを扱う。実際に楽曲を分析し、演奏することを通して、楽譜から楽曲の理解を深め、演奏に活かす方法を身に付ける。また、グループ活動を取り入れることにより、様々な意見に触れ、自身の理解をさらに深めることを目指す。 |  |  |

|                                     |      |  |         |
|-------------------------------------|------|--|---------|
| (中等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) |      |  |         |
|                                     | ピアノⅡ | <p>ピアノの実技を通して楽譜を深く読み込むこと、自分自身の音をよく聴くことを心がけ、ピアノを弾くことのみにとどまることなく、楽曲を理解し表現できる技術を身に付けることを目指す。また、自分が演奏する曲だけでなく、グループ内のメンバーの曲についても楽譜から分析することや演奏を聴くことを通して理解を深めること、加えて、自分自身の考えを持ち意見交換ができるようになることを目指す。また、音階にも取り組み、調性やカデンツァなどの理解と実際の演奏技術とをつなげることを目指す。楽曲については、個々の分析に取り組みながら、グループ内での意見交換につなげ、実際の演奏に活かす方法を模索していく。楽譜から読み取ったことを音で伝える技術を身に付け、言葉でも伝えることができるようになることで、さらに楽曲に対する理解を深め、表現力を高めることを目指す。</p>  |         |
|                                     | 管弦打Ⅰ | <p>授業の目標<br/> 小学校や中学校の授業、及び部活動等で使用される管打楽器の演奏法を学ぶ。合わせて、将来教員になった際に子どもへ器楽の指導を行う場面を想定して、管打楽器の演奏技法をマスターすることの難しさや、知識として知っていることと音を出せるようになることの違い（知識と技能の相違）を、体験を通じて理解する。</p> <p>授業計画の概要<br/> 管打楽器の中から一つの楽器を選択した上で、その演奏法や取り扱い方を学習する。レッスンは原則として個々に行うが、初心者の場合は基礎練習の段階に限りグループレッスンを取り入れて行うこともある。また管打楽器の経験者に対しては、楽器を通した音楽表現の基本に重きを置いたレッスンを行う。テキストは、授業者が楽譜を用意するが、受講者が取り組みたい曲の楽譜を持参しても構わない。学生に対する評価は、授業への取り組み（30%）、曲の個人練習の具合（40%）、定期試験発表会の成果（30%）を総合して判断する。</p>             |         |
|                                     | 管弦打Ⅱ | <p>授業の目標<br/> 「管弦打Ⅰ」の延長線上に位置づけられる授業である。「管弦打Ⅰ」に続き、小学校や中学校の授業、及び部活動等で使用される管打楽器の演奏法を学ぶ。合わせて、将来教員になった際に子どもへ器楽の指導を行う場面を想定して、これらの楽器の演奏技法をマスターすることの難しさや、知識として知っていることと音を出せるようになることの違い（知識と技能の相違）を、体験を通じて理解する。</p> <p>授業計画の概要<br/> 「管弦打Ⅰ」と同様に、管打楽器の中から一つの楽器を選択した上で、その演奏法や取り扱い方を学習する。レッスンは原則として個々に行う。また管打楽器の経験者に対しては、楽器を通した音楽表現の基本に重きを置いたレッスンを行う。テキストは、授業者が楽譜を用意するが、受講者が取り組みたい曲の楽譜を持参しても構わない。学生に対する評価は、授業への取り組み（30%）、曲の個人練習の具合（40%）、定期試験発表会の成果（30%）を総合して判断する。</p>     |         |
|                                     | 合奏Ⅰ  | <p>授業の目標<br/> 吹奏楽の活動を通して基礎的な合奏の技術を身に付け、アンサンブル能力を高める。さらに将来学校現場で吹奏楽を指導する際を想定しながら、吹奏楽の演奏や指導に必要な基礎的な知識と技術を理解する。さらに楽器を媒体とした他者とのコミュニケーションを体験する。</p> <p>授業計画の概要<br/> 吹奏楽の合奏スタイルで行う。授業の最初に全員でセッティングを行い、吹奏楽の楽器配置を学ぶ。チューニングを行った後に、ハーモニーレーニングと楽曲の合奏練習を行う。教材曲は、中学校の部活指導を担当した場合を想定して行進曲、吹奏楽コンクール初級レベルの自由曲、ポップス曲を取り上げる。楽譜は、授業者が用意する。学生に対する評価は、セッティング及び片付けも含む授業への取り組み（30%）、曲の個人練習の具合（40%）、合奏中の“合わせる行為”等のアンサンブルへの意欲や、周囲へのアドバイスや働き掛け等のアンサンブルへ参加しようとする積極性（30%）を総合して判断する。</p> |         |
|                                     | 指揮法  | <p>本授業は、指揮が現場での生徒の表現活動の支援に大いに役立つものとして、合唱や合奏の指導における効果的な実践法を探り、履修者個々の楽曲分析力と指揮の技術の向上をはかることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(89 麓洋介／5回)<br/> 拍を振る基本動作および表情豊かな上体の使い方を習得する。</p> <p>(134 橋本剛／10回)<br/> 旋律や歌詞の抑揚を振る練習、各パートへの目配り、曲調に応じた振り分け方等、より実践的な指揮の研究実習を、楽曲の分析と併せて行う。</p>   | オムニバス方式 |

|                                     |      |      |  |  |  |
|-------------------------------------|------|------|--|--|--|
| (中等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | (音楽) | 和声学  | <p>楽曲の骨子をなす和声に対するの習熟をはかることで、楽曲の展開を反射的に予測する力および自身の実施内容を見直せる推動力を養うことを目標とする。なお、本授業は学び合いによって理解を深めることを目的として、グループで課題に取り組むA Lの実践も導入している。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(89 麓洋介/3回)<br/>和音の配置・連結の基本を習得する。</p> <p>(134 橋本剛/12回)<br/>バス課題・ソプラノ課題の音楽的实施を目指しながら、小曲の和声分析の実践も行う。</p>  | オムニバス方式  |  |
|                                     |      | 音楽理論 | <p>本授業では、いわゆる音楽理論を楽曲や音楽史と密接に結びつけ、演奏・鑑賞・創作などと関連させて進めていくことを重視しながら、創造的な音楽表現、能動的な鑑賞および演奏能力等の下地を培うことを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(134 橋本剛/12回)<br/>各回とも前半は音名、音の振動数、音程、教会旋法などを取り扱う楽典の実習を主とし、後半はこれらの理論の楽曲への応用法について、演習をふまえて概説する。</p> <p>(89 麓洋介/3回)<br/>各回とも前半はコードネームなどを取り扱う楽典の実習を主とし、後半はこれらの理論の楽曲への応用法について、演習をふまえて概説する。</p> | オムニバス方式  |  |
|                                     |      | 作曲概論 | <p>本授業では作曲および編曲に関する基礎知識および簡単な即興演奏の習得を目標とする履修後に少しでも音楽表現のひきだしが増えたことを各自が自覚できたかという点が、本授業における最大の評価の観点である。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(89 麓洋介/5回)<br/>和音の補遺、伴奏付けの実習、アドリブ奏法、合唱編曲法等、作編曲に関するあらゆる項目を複合的に取り扱う。</p> <p>(134 橋本剛/10回)<br/>楽曲に息づく数々の作曲技法、歌のつくり方、調の選び方、楽式論等、作編曲に関するあらゆる項目を複合的に取り扱う。</p>                                   | オムニバス方式  |  |
|                                     |      | 作曲法  | <p>本授業は、ある制約を設けた中で作曲することを通して、将来現場で起こりうるあらゆる事情に臨機応変に対応できる柔軟さを養うことをねらいとする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(134 橋本剛/10回)<br/>前半は受講生が持ち寄る諸楽器についての研究および編曲実習を行う。</p> <p>(89 麓洋介・134 橋本剛/5回) (共同)<br/>後半は「場面や心情に応じた作曲」を目的としたA Lとして、オリジナルの台本によるリーディング(朗読劇)に添える音楽の作編曲・実演発表をグループごとに実施する。</p>   | オムニバス方式・<br>共同(一部)   |  |
|                                     |      | 音楽史  | <p>中学校、高校の音楽教科書に記載されている程度の音楽史の基礎知識を獲得することを目的とする。文献資料、視聴覚教材を用いながら、西洋音楽の歴史を(1)古代(2)中世(3)ルネサンス(4)バロック(5)前古典派(6)古典派(7)ロマン派(8)19世紀末(9)20世紀に区分し、各時代別の音楽の特徴や、代表的な作曲家と音楽作品について学ぶ。同時に音楽を世界史の観点からグローバルにとらえ、音楽と他の分野との関連性も視野に入れつつ新しい音楽史の学び方を考えていく。授業の後半では日本音楽史及び、諸民族の音楽やポピュラー音楽の変遷についても学びながら、いくつかのジャンルの作品を取り上げ鑑賞する。</p>                  |  |  |
|                                     |      | 美術   | 絵画基礎   | <p>学校現場でよく使われる不透明水彩絵具を主に使用して、植物・動物・人工物の見かたと描き方について学ぶ。絵を描く喜びを味わえるように、描き方の基本を知るとともに、応用的な題材にも取り組むことで技能/表現の力を身に付ける。作品の評価は、単に再現の上手や下手でするべきではない。モノの見かたや描き方は、描く対象の種類によって異なることを知り、自他の作品の評価の観点を広げられるように、毎回、1つの題材に取り組みながら、モチーフによる見かた、描き方の違いを理解できるように学習を進める。作品評価のためのルーブリック(観点表)を用いて、目標を持って授業に取り組むようにする。</p> |  |
|                                     |      |      | 絵画実技 I   | <p>静物、人物、風景をテーマに、紙版画と木版画、ドライポイント等の版表現における製版と印刷について実習を通して学習する。同時に指導法についても修得できるようにする。版表現の特徴は、左右が反転することから、偶発的なおもしろさがあることを知った上で、アイディアスケッチ、下絵作りを行い、紙版画においては、さまざまな紙や布、糸等の素材を用い、木版画ではシナベニヤ、ドライポイントではプラスチック板を用いて製版活動を行う。安全上の理由により中性インクを用いて印刷する。作品評価のためのルーブリック(観点表)を用いて、目標を持って授業に取り組むようにする。</p>           |  |

|                                     |           |   |  |
|-------------------------------------|-----------|---|--|
| (中等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | 彫刻基礎      | 人物モデルを用いて人体具象彫刻(頭像)の塑造制作を行う。具体的には、人物モデルのスケッチ、芯棒の制作、塑造用粘土による造形の順に取り組み、最後に、各自の造形表現について講評会を実施する。これら可塑性のある粘土による具象彫刻の制作を通して、彫刻表現における基礎的な表現力・観察力・造形的思考力など、造形的諸能力を養う。加えて、自然の造形美のとらえ方、立体表現の基礎、彫刻の造形要素(量感、動勢、構築性)の基礎などを培う。   |  |
|                                     | 彫刻実技 I    | 陶彫による丸彫り作品の制作と、油粘土によるレリーフ作品の制作を行う。陶彫では、陶芸で用いる粘土を使って、20cm角程度の大きさの作品の制作を行う。油粘土での制作では、手のひらサイズ程度のレリーフ作品の制作を行い、石膏への材質転換に取り組む。本授業を通して、彫刻表現における基礎的な表現力・観察力・造形的思考力など、造形的諸能力を養う。加えて、彫刻の技法、造形要素(量感、動勢、構築性)について見識を深める。   |  |
|                                     | デザイン基礎    | デザインを平面構成やポスター制作と思い込んでいる人が世間では大部分だと思われている。デザインとは、色や形をまとめる行為(構成や装飾)だけではない。当授業では、高校生までもっていたデザインのイメージは覆るかもしれないが、それらを理解した上で、テーマをあらゆる角度から観察し、形の成り立ち、色彩の理解を深めていく。また「その場で考え、判断する」力を体得することも目標とする。「教育のデザイン」まで俯瞰し、広く「美術」教科の存在意義も考えていく。  |  |
|                                     | デザイン実技 I  | 教育をする立場・デザイン活動をする立場に共通する「考える力」について考えていく。デザイン活動はFeelingではなく、Thinkingを基底とする。学校教育での「美術・図工」の授業意義がそうであるように、考える力の要素である「市場観察力」「課題発見力」「編集する力」をつけるための基礎的なトレーニングをする。また課題に対しての学生によるプレゼンテーションとして、PC系の基本ソフトの習得も行う。   |  |
|                                     | 工芸基礎      | 授業では、前半と後半とで2つの課題を行う。<br>課題① 1年生前期の最初の実技授業であり、学制同志の自己紹介を兼ねて「自画像」を制作する。自画像は、スマートフォンで写真を撮りB3パネルに水張りし図案を完成させる。<br>自画像は絵を描くのではなく「ひも」のような線材等を張り付けて描く。違った素材を用いて描くことで、絵画とは違った表現方法を知ることができる。また、作品を写真にして鑑賞することも行う。<br>課題② 「ヒュック」をテーマとして照明器具を制作する。光源は100円ショップで売られているものとし、ロウソク等は使用してはいけない。材料は身近な素材を用いて光をデザインすることで制作の楽しさを知る。<br>講評会では自分の制作した作品をプレゼンし質疑応答を行う。            |  |
|                                     | 工芸実技 I    | この授業では主にガラス工芸と陶芸の基礎について学ぶ。課題では花を生ける行為を通して花と器の関係について理解したうえで、道具としての花器制作を行う。ガラス工芸ではグラスを花器に見立て、サンドブラスト技法を用いて表面に装飾を施す。また、陶芸では紐作りによる花器の制作を行う。最終的に制作した作品に花を生けて鑑賞する。素材、テキストチャーなどの違いによる見え方や、花器の形と花材との関係について考察し、作品の在り方について知見を深め、道具における用途・機能や素材の特性及び加工技術を学び、工芸の基本概念について理解する。   |  |
|                                     | 美術科内容論 I  | 平安時代後期に制作された代表的な絵巻である「源氏物語絵巻」「伴大納言絵巻」「信貴山縁起絵巻」を取り上げ、配付資料と画像を示し解説する。物語絵巻と説話絵巻の相違を中心に、作品を相互に比較して造形上の特色を把握して言葉で指摘できるようになることを重視し、詞書に記された内容をどのように絵画化しているのかも含めて表現の特徴や意図について考察する。以上のことを通して、美術作品の造形上の特徴を、作品の相互比較を通して把握し、表現の意図を理解できるようになる。   |  |
|                                     | 美術科内容論 II | この授業では、主に19世紀から20世紀はじめのヨーロッパ美術を取り上げ、画家や作品の特徴について説明する。多くの作品を見せることにはこだわらず、できるだけ所蔵美術館で撮影した全体や細部の写真も見せ、作品の大きさを実感させたり、筆のタッチや絵の具の塗り方などにも目を向けさせたりして、多面的な理解をうながす。<br>美術科の学生は他にも美術史の授業を受けているが、画家の名前や専門用語などをおぼえることが勉強であると思っており、自分自身の意見や感想を持つことに自信を持っていないことが多い。美術作品の理解を深めさせることによって、このような傾向を是正し、自分の見解を自信を持って述べられるようにする。また、細部の技法を見せることにより、美術鑑賞だけでなく美術実技の指導にも役立てられるようにする。 |  |
|                                     | 芸術概論      | 美術史学に焦点を当てて芸術理論を概説した後、仏像を中心とする仏教美術作品を取り上げ、種類(主題)や時代による様式の変遷を社会や宗教、文化との関係や中国や朝鮮半島からの影響も含めて配付資料や画像により考察する。また、遠近法を中心に日本の絵画表現の特色についても触れる。以上のことを通して、美術史学を中心にした芸術理論の基礎を理解し、美術作品の主題や様式、作品が制作された時代の社会や宗教、文化、近隣諸国との関係などについて考察する方法の基本を習得する。   |  |
|                                     | 西洋美術史     | この授業では、オリエントの古代美術及びヨーロッパを中心とした西洋美術の歴史的展開について理解させるために、学生への発問を含んだ講義を実施する。講義においては、対象となる美術の歴史をいくつかの時代区分に分節し、一つの時代区分について1~2回の授業時間を用いてレクチャーする。学生による講義内容の深い理解と定着を期して、講義の際には重要事項の理解を促す発問を頻繁に行う。<br>パソコンとプロジェクターを用いた、視覚体験型の授業を展開する。  |  |



|                                     |      |        |  |         |
|-------------------------------------|------|--------|--|---------|
| (専門教育科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(中等教科内容科目) | (美術) | 東洋美術史  | この授業では、外国美術からの日本美術への影響を理解させるために、中国・韓半島の絵画芸術、およびインド・中国・韓半島の仏教彫刻の歴史的展開について、学生への発問を含んだ講義を実施する。講義においては、対象となる美術の歴史をいくつかの時代区分に分節し、一つの時代区分について1～2回の授業時間を用いてレクチャーする。学生による講義内容の深い理解と定着を期して、講義の際には重要事項の理解を促す発問を頻繁に行う。<br>パソコンとプロジェクターを用いた、視覚体験型の授業を展開する。   |         |
|                                     |      | 日本美術史  | この授業では、原始時代から第二次世界大戦後に至るまでの日本美術の歴史的展開について理解させるために、学生への発問を含んだ講義を実施する。講義においては、対象となる美術の歴史をいくつかの時代区分に分節し、一つの時代区分について1～2回の授業時間を用いてレクチャーする。学生による講義内容の深い理解と定着を期して、講義の際には重要事項の理解を促す発問を頻繁に行う。<br>パソコンとプロジェクターを用いた、視覚体験型の授業を展開する。  |         |
|                                     | 保健体育 | 体づくり運動 | 小中学習指導要領に示された体づくり運動のねらいと内容領域を理解し、体づくり運動のねらいを反映する運動課題を構想したり、アレンジできるための基礎的な知識・技能の習得を目指す。<br>授業は実技を中心に行う。「多様な動きをつくる運動」「動きを高める運動」のための典型教材の実技実習を通して、運動に馴染んだり、スポーツの基礎的な能力を育てる指導の基本的な考え方を学習する。<br>各テーマのなかで「運動のパリエーションを知る」「夢中になる運動をつくる」「ミニ指導計画・試行・反省」の順にそれぞれ複数回行う。<br>(オムニバス方式/全15回)<br>(76 上原 三十三/5回)<br>第1回目～第5回目「バランスをとる運動系」「体を移動する運動系」のテーマの下に行う。<br>(138 三原 幹生/5回)<br>第6回目～第10回目「用具を操作する運動系」「力試しの運動系」のテーマの下に行う。<br>(223 長坂 直美/5回)<br>第11回目～第15回目「動きを組み合わせる運動系」のテーマの下に行う。 | オムニバス方式 |
|                                     |      | 陸上競技   | 本授業では、陸上競技に関する技能習熟を引き出せる能力を育成し、併せて子どもに陸上運動を指導する際に有用な技能を養うことを目標としている。そのため、走運動の基本的な動きを、習熟過程を含めて学習し、ハードル走、走り幅跳び、走り高跳びの基礎となる走りのリズムを身に付けると同時に、空中動作に関しても併せて学習する。具体的には、短距離走の走り方、スターの方法、ハードル走、走り幅跳びの技術、走り高跳びの技術、リレーの技術に関して、実技指導を中心とした授業を行う。なお、本授業は中学校及び高等学校の保健体育の内容に沿って行う計画である。<br>(4 鈴木 英樹) 鈴木がメインティーチャーとして授業を運営する。<br>(197 黒須 雅弘) 受講者の人数が多いため、安全面に十分配慮しながら、実技内容を充実させるため、実技のアドバイスをを行う。  | 共同      |
|                                     |      | 器械運動   | 器械運動の各種目(マット運動、跳び箱運動、鉄棒運動)について、小中学校学習指導要領に示された技能内容の例示技の習熟を図り、技の正しい運動技術とその指導法を学習する。<br>実技課題として取り上げられる技は、教員として身に付けておきたい最低限の内容であり既に高い技能水準にある場合もあるが、単に技を成功させられるだけでなく、自己や他者の運動の振り返り(反省分析)を通して運動の観察評価と演示法についても理解を深める。<br>なお、マット運動では「這う」「転がる」「よじ登る」「支える」など、跳び箱運動では「跳び下り」「シャクトリ虫」「ウサギ跳び」など、鉄棒運動では「いろいろなぶら下がり」「いろいろな支持」などの導入運動から段階的に学習を進める。<br>(76 上原 三十三) 授業担当は、十分な安全配慮と効果的な指導のため共同とし、授業の主展開担当をする。<br>(138 三原 幹生) 個別対応を要する受講生の対応を担当する。                                       | 共同      |
|                                     |      | 水泳     | 教員、水泳指導者としての技能を習得し、体系的に教育する能力を習得することを目標に、水泳の基本的な技能を習得する過程のなかで、段階的な指導の組み立てと展開方法について実技体験を通して学ぶとともに、水中環境の危険性についても理解する。<br>授業は、水泳の理解と指導における学習規律と安全について(講義)、水中遊戯、浮漂とけのび、基本4泳法、着衣泳と時間浮漂、道具とリズムを使った水中運動などにより展開する。   |         |

|                                     |        |        |  |                |
|-------------------------------------|--------|--------|--|----------------|
| (専門教育科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(中等教科内容科目) | (保健体育) | 球技A    | 本授業は、体育授業における実践を想定し、球技(ハンドボールとバレーボール)の技術の向上と指導法を習得し、生徒の技能的な評価ができるようにする。実践上の諸問題解決のための方法改善の工夫についてアイデアをもつことができるようにする。本授業は、球技(ハンドボール、バレーボール)の指導法を実技で学ぶ。内容は、ゲーム中心で授業を構成することで、多様な学習者に起こり得る諸課題を見つけ、学生同士で意見交換を行いながらその解決方法を深めていく。<br>(オムニバス方式/全15回)<br>(152 縄田 亮太・142 山下 純平/1回) (共同)<br>合同でガイダンスを行う。<br>(152 縄田 亮太/7回)<br>バレーボール<br>(142 山下 純平/7回)<br>ハンドボール  | オムニバス方式・共同(一部) |
|                                     |        | 球技B    | 授業のテーマ及び到達目標は、「ゴール型」であるバスケットボール・サッカーの2つの種目について、基本的技能・戦術、及び授業で扱う運動課題、体育授業の計画・実践・評価の基礎的な知識と技能について理解することである。また、「ゴール型」の種目の背景に流れる文化的、科学的知識を学習する。両教員の授業は学校現場での実務経験を活かし、実践上の課題を踏まえながら、工夫改善の視点を提供する。<br>(オムニバス方式/全15回)<br>(141 鈴木 一成・74 森 勇示/1回) (共同)<br>ガイダンス<br>(141 鈴木 一成/7回)<br>サッカー<br>(74 森 勇示/7回)<br>バスケットボール   | オムニバス方式・共同(一部) |
|                                     |        | ダンス    | ダンスは、原始時代から今日まで、社会生活の中で変化・発展をしながら、様々なかたちで創造され、伝承されてきた。そこで、異文化・自文化の理解と文化的背景の異なる人間間の交流について考え、特に、身体表現文化の理解と指導法について「心・からだ・コミュニケーション」をテーマに実践を行う。<br>授業では、学習指導要領におけるダンスの創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンスの内容を取り扱い、各々の特性を理解するとともに、実技を通して指導法を学習する。創作ダンスでは多様なテーマ(課題)から即興的に表現すること、フォークダンスでは外国のフォークダンスを中心に音楽に合わせて交流しながら踊ること、現代的なリズムのダンスでは、リズムの特徴を捉えて全身で自由に踊ることを目標に行い、授業最後にはダンス発表会を実施する。学校現場での実務経験を活かし、実践上の課題を踏まえながら授業を行う。 |                |
|                                     |        | 武道     | 授業のテーマ及び到達目標は、教員を目指す人を対象に、自らの剣道の技能力と指導力向上を目標とする。同時に、中学校・高等学校の保健体育の「武道」(剣道)の授業担当者に必要な指導内容を展開する。具体的な到達目標は以下の通りとする。①形(木刀による剣道基本技稽古法)を実践できる。②剣道の基礎的な打突技術を実践できる。③礼法を実践できる。④剣道の基礎的なルールを理解できる。授業では剣道の伝統的特性を理解しながら、技能的特性を「形」と「実技」を通して理解し実践する。  |                |
|                                     |        | 体育社会学Ⅰ | 体育社会学とは何か、また体育を取り巻くスポーツの概念について説明し、スポーツ社会学の守備範囲について事例をあげて紹介する。そのうえで、スポーツは、本来、遊びの性質を強く持ち、学校体育の中にも遊びの要素を取り入れることの必要性について講義する。さらに、小学校体育において、運動系伝承遊びを取り入れることの意義を提案する。これは、現代の子どもたちが抱える様々な問題を解決することにつながるからである。   |                |
|                                     |        | 体育社会学Ⅱ | スポーツの大衆化、国際化が進んだ今日、スポーツは、政治、経済、社会、文化など、様々な領域と関わりをもつようになった。レクリエーションや健康の維持・増進としてのスポーツ、学校体育の一領域のスポーツにとどまらず、現代社会においてスポーツがどのように位置づき、社会との関わりを持っているのかについて、ホイジンガとカイヨワの遊びの論をもとに、いろいろな角度から講義を行う。そして、人生100年時代のスポーツのあり方について考える。  |                |
|                                     |        | スポーツ史  | 普段なにげなく親しみ・楽しんでいるスポーツにはそれぞれ意外な歴史(誕生・発展)が隠されています。歴史的にみて人間の身体的諸活動は未開時代から今日に至るまで、あらゆる時代のあらゆる人たちに広く愛好されています。しかし、生活や社会が変化するとスポーツもまた変化をしています。例えば、走・投・跳・踊といった運動そのものは今日とまったく同じ形態でも、それを行った人々の考えや態度はその時代によって大きく違っています。<br>そこで本講義では、実務経験を生かし、スポーツの歴史(誕生・発展・変化)を振り返るとともに、これからのスポーツの在り方を考えます。   |                |

|                                     |        |  |  |  |
|-------------------------------------|--------|--|--|--|
| (中等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | (保健体育) | 運動学Ⅰ(運動方法学を含む。)  | 体育において、スポーツにおける様々な動作を理解・指導するために必要なバイオメカニクスの基礎知識を得る。スポーツバイオメカニクスの立場から、力学、生理学、解剖学などの基礎知識を活用して、スポーツに関係する様々な基本動作を理解する。具体的には以下の内容を取り扱う。バイオメカニクスの基礎知識、バイオメカニクスの応用(「立つ・構える」動作、「歩く」動作、「走る」動作、「跳ぶ(前へ)」動作、「跳ぶ(上へ)」動作)である。  |  |
|                                     |        | 運動学Ⅱ(運動方法学を含む。)  | 体育において、スポーツにおける様々な動作を理解・指導するために必要なバイオメカニクスの基礎知識を得る。スポーツバイオメカニクスの立場から、力学、生理学、解剖学などの基礎知識を活用して、スポーツに関係する様々な基本動作を理解する。具体的には以下の内容を取り扱う。バイオメカニクスの基礎知識、バイオメカニクスの応用(「泳ぐ」動作、「投げる」動作、「打つ(遠くへ)」動作、「打つ(狙って)」動作、「蹴る」動作、「回転」動作、「滑る」動作)である。   |  |
|                                     |        | 生理学Ⅰ(運動生理学を含む。)  | 本授業は運動指導の際に必要な不可欠な、身体運動に関わる生理的メカニズムについて理解を深めること目標としている。そのため、身体活動の発現、制御、持続に分けて、それらに関連した生理的なメカニズムを最新の研究成果を提示しながら講義を行う。具体的には、身体運動を発現する機能および適応、運動を制御する機能および適応、運動を持続する機能および適応に関して講義を行う。また、健康や体力や運動実践に関する内容に関する講義も併せて行う。なお、本授業は中学校及び高等学校の保健体育の内容に沿って行う。  |  |
|                                     |        | 生理学Ⅱ(運動生理学を含む。)  | 本授業は運動指導の際に必要な不可欠な、身体運動に関わる生理的メカニズムについて理解して、指導の際に応用できるようにすることを目標としている。そのため、生理Ⅰで行われた講義内容を基に、その理解をより深めるために、グループ形式のアクティブ・ラーニングを用いた授業を行う。具体的には、身体運動を発現する機能および適応、運動を制御する機能および適応、運動を持続する機能と適応に関して、学生が調べた成果のプレゼンを授業教材として講義を行う。なお、本授業は中学校及び高等学校の保健体育の内容に沿って行う。   |  |
|                                     |        | 衛生学・公衆衛生学Ⅰ   | 本授業をとおして、健康の維持・増進と社会および環境との関わりを理解し、健康の現状を捉え、疾病予防対策等について理解することを目標としている。そのために、特に健康問題に関わる社会環境、統計資料、生活習慣について、最新の情報を提示しながら講義を行う。具体的には、健康と社会、健康と環境、子どもの心と身体、安全な社会生活、疾病と医療、健康情報の捉え方、学校保健に関して授業を行う。なお、本授業は中学校、高等学校の保健体育の内容に沿い、小児保健、精神保健、学校安全および救急法の内容に関しても触れる。   |  |
|                                     |        | 衛生学・公衆衛生学Ⅱ   | 本授業をとおして、健康の維持・増進と社会および環境との関わりを理解し、健康の現状を捉え、疾病予防対策等について理解することを目標としている。そのために、衛生学・公衆衛生学Ⅰで行われた授業内容を基に、その理解を深めるために、グループ形式のアクティブ・ラーニングを用いた授業を行う。具体的には、健康と社会、健康と環境、子どもの心と身体、安全な社会生活、疾病と医療、健康情報の捉え方、学校保健に関して授業を行う。なお、本授業は中学校、高等学校の保健体育の内容に沿い、小児保健、精神保健、学校安全および救急法の内容に関しても触れる。                                     |  |
|                                     |        | 学校保健Ⅰ(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む。)  | 本授業をとおして、心と身体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持し豊かな生活を実現するための資質・能力を育成することを目標としている。そのために、保健の見方・考え方を働かせ課題を発見し、合理的な解決にむけた学習を行うため、学校で行われている実際の保健活動の現状を、最新の情報を活用しながら授業を行う。具体的には、現代における子ども健康問題、子どもの発育と発達、子どもの心と身体、学校における保健教育、学校における安全管理、学校保健活動の実際に関して講義を行う。なお、本授業は中学校、高等学校の保健体育の内容に沿い、小児保健、精神保健、学校安全および救急法の内容に関しても取り扱う。    |  |
|                                     |        | 学校保健Ⅱ(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む。)  | 本授業をとおして、心と身体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持し豊かな生活を実現するための資質・能力を育成することを目標としている。そのために、学校保健Ⅰで行われた授業内容を基に、その理解を深めるために、グループ形式のアクティブ・ラーニングを用いた授業を行う。具体的には、現代における子ども健康問題、子どもの発育と発達、子どもの心と身体、学校における保健教育、学校における安全管理、学校保健活動の実際に関してグループ形式のアクティブ・ラーニングを用いて授業を行う。なお、本授業は中学校、高等学校の保健体育の内容に沿い、小児保健、精神保健、学校安全および救急法の内容に関しても取り扱う。 |  |
| 技術                                  | 木材加工法  | 中学校技術家庭科、高等学校工業科をはじめ、学校教育の中で木材を取り扱い、木製品の製作に関わる学習活動を計画・指導するための必要最小限の知識を身に付ける。材を安全かつ合理的に加工・利用する上で知っておかなければならない最低限の知識を身に付けることを目的とする。授業内容は、日本産業技術教育学会の策定した技術科教員養成基準を踏まえた上で、高等学校工業科向けにも拡張される。まず、材が樹木の生命活動によって生産される生物材料であることを理解し、これに由来する巨視的・微視的な構造と性質の特徴について学ぶ。続いて、かんなのこのみなどの木工具の構造と使用法について理解し、ほぞ接合など木工の基本的な工作法、および製図法について学ぶ。さらに、帯のこ盤などの木工機械を使用して、原材料である樹木からどのようにして板材・角材などの製材品が生産されるかについて理解する。なお、本授業は「材加工実習」と運動して行われる。 |  |  |

|                                     |           |   |   |
|-------------------------------------|-----------|---|---|
| (中等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) |           |   |   |
|                                     |           |   |   |
|                                     |           |   |   |
|                                     |           |   |   |
|                                     | (技術)      | 木材加工実習 I  | 学校教育におけるものづくり学習活動において木材を取り扱う上で必要となる最小限の工具・工作機械の使用法や木材製品の製作技術を身に付ける。受講者がそれぞれのプロジェクトを構想し、施策やモデル製作などの探究的な設計プロセスを経て、木材加工製品の開発および製作過程を体験的・実践的に学ぶ。まず、手加工によるスライド式木立にて取り組み、木工具の取り扱いや手入れや製作技術を身に付け、次に、構想例が示された小型製作品に取り組み、木工機会を安全に配慮しながら活用し、正確で素早い製作を学び、さらに、一枚板からの自由製作に取り組み。最後に、グループによる共同製作で生活の中で実用的な製作に取り組み。                 |
|                                     |           | 木材加工実習 II   | 中学校「技術・家庭」の教育をするに当たり、指導教師の素養として必要となる加工技術を主要な木工具を中心として学ぶ。中学校技術教育でのものづくり学習においては目的設計と合理的な製作計画の下に手工具を主とする加工実習が展開される。学習の初期段階では木材を主とした加工が中心的課題になる。その際、工具を主とする加工実習が展開される。そこで実習では基礎的な木製品の製作実習を通して、目的加工工程に関する初歩的な捉え方を学習する。本授業は「木材加工法」と運動され、木材及び加工の科学的合理性を踏まえた加工所作を自覚的に理解しながら各種の手工具の使用能力を高めることを課題としている。                       |
|                                     |           | 製図  | 授業目標として、(1)設計者の意図を製作者に的確に伝達する「ものづくり」の指令書としての、図面の意義・役割・効果について説明することができる、(2)製図用器具を適切に使用しながら、正しい姿勢と段取りで製図の演習ができる、(3)正確でわかりやすい製図ができる技能を、実習を通して習得する。(4)正確でバランスのとれた図面を作成するために、粘り強く丁寧な取り組みを行う。授業では、基本的な目的・技能・段取りを解説した後、正しい姿勢や進め方を身に付けることができるように、実習を行う中で個別に留意点を指摘する。機会部品の製図を中心とする題材について、立体と平面図の関連を理解し自在に読図とイメージ形成ができるようにする。 |
|                                     |           | 金属加工法 I   | ものづくり・技術・工業教育において必要となる、金属材料を中心とした工業材料の特性、加工法について理解する。教科書を中心に、各種材料の特性について講義し、連続する金属加工実習Iの内容と合わせて、製図や実習を含めて行う。金属の結晶構造、拡散、平衡状態図の読み方、鋼の状態図、鋼の製造法、鋼の熱処理、鉄鋼の分類と性質、応力とひずみの関係、塑性加工による金属加工法、鋳造による金属加工法、材料評価法(繰返し変形と疲労、クリープ、衝撃強さ、摩耗、硬さ測定)、材料各論(アルミニウムおよびアルミニウム合金、銅および銅合金、チタンおよびチタン合金、マグネシウムおよびマグネシウム合金、アモルファスおよび準結晶、金属間化合物)   |
|                                     |           | 金属加工実習 I  | 教育現場における金属加工の手工板金を用いた授業を行うために必要な製図、金属加工の加工法、加工工具の取り扱い及び整備について実習する。金属加工法Iで得た知識を実践する。教育現場において授業を行うために必要な実技の能力を修得することを念頭に授業を行う。実習の内容は以下のテーマで行い、3では設計製図に関わるレポートを製作後提出する。<br>1. 四角の浅い皿状の器と製作する 2. ブックエンドを製作する 3. キーホルダーを製作する 4. 自由製作コンテスト(習得した技術を活かした雑貨を製作する)  |
|                                     | 金属加工実習 II | 鉄は現代文明を支える殆ど全ての装置、機械、構造物の最も重要な素材である。また近代以降は、工作機械を代表とする機械類の発達により、安価に精度の高い物を簡単に作るできるようになり、生産力は劇的に上がった。その工作機械の中で最も古く基本的なものは旋盤である。そこで本実習では、旋盤を用いた基本的な切削加工を学ぶと共に、鉄(鋼)の特性を実感することにより、その歴史的・現代的意義を知る。   |   |
|                                     | 材料力学      | 機械や構造物を構成する各部材は、例外なくなんらかの力を受けている。したがって、機械や構造物を設計製作する際には、各部材に生ずる変形および抵抗力などに関する知識を持ち、各部材に求められる剛さ強さが確保されるように、材料および寸法を決めなければならない。もし外力に対する抵抗力に不十分な部分があれば機械はその部分から破損するのである。また反対に過大に失すれば不必要に多くの材料を用いることになって不経済であるだけでなく機械等の性能を低下させてしまう。本授業では、外力によって生ずる金属材料の変形および抵抗力を求めるとの理論的な取り扱い方を修得することを目標とする。本授業では、外力によって生ずる金属材料の変形および抵抗力を求めるとの理論的な取り扱い方を修得することを目標とする。 |   |
|                                     | 原動機       | 原動機は、動力発生機関として熱力学、流体力学、材料力学、金属材料などの広い分野の基礎技術の上に成り立っている。ここでは、原動機の基礎について学ぶ。原動機には多くの種類があるが、代表的な原動機であるポンプ、ボイラ、蒸気タービン、内燃機関の作動原理、効率などについてその基礎を理解する。また、環境問題との関係も理解する。  |   |
|                                     | 機械実験      | 機械工学特に熱力学の分野では、熱を運動エネルギーに変換する「エネルギー変換」を取り扱う。また、機械や構造物がその機能を果たす時、それらの構成部材は各種の力を受け変形する。そのため部材には必要にして十分な強度が求められる。最初の実験では歯車伝達実演教材を作成し、エネルギーの伝達についての学習効果のある教材を製作する。次に、試験片を引張試験機で引張変形したときの応力-ひずみ曲線を実際に測定し、材料がどのような機械的性質を持っているかを、実験により明らかにする。さらに、機械材料が熱処理によりどのように変化するかについて、硬さ試験機を用いて実験により明らかにする。最後に形状記憶合金の機械的特性評価の5テーマの内容を理解し、実習を通して機械工学の概要を習得する事を目標とする。 |   |

|                                     |             |   |  |
|-------------------------------------|-------------|---|--|
| (中等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | 電気 I        | 電気に関する諸現象を正しく理解し活用するためには電磁気学を学ぶ必要がある。電磁気学は力学と並ぶ物理学・工学の基礎的な学問であり、電気を学ぶ者にとって最も必要不可欠な学問である。本授業では、具体現象の理解から定量化、数式化とその物理的意味を通して、抽象的な概念の理解に努める。クーロンの法則から出発して、ガウスの定理に至り、その間、電荷、電界、電位等の概念の修得を、またビオ・サバルの法則から出発してアンペールの法則に至り、その間、電流、磁界、磁束密度等の概念の修得を目標とする。   |  |
|                                     | 電気 II       | 電気は目に見えない現象であり、電気ならびに電気機器を扱う場合、電気回路学はその理解を容易にしてくれる。電気回路といえ、オームの法則と誰もが頭に浮かべる。オームの法則を作用反作用的な考え方をすることで電気回路の統一的な見方ができる。まずは、オームの法則から一步前進したキルヒホッフの法則、重ね合わせの理とテブナンの定理を理解し、使いこなすことを第一段階の目標とする。電気回路を学ぶ者にとって交流理論は最初の関門である。しかし、回路を線形回路に限れば、複素数、ベクトルを使うことによって交流回路の諸問題が明確になる。インピーダンス、アドミタンスの概念を理解し、電気回路の具体的な諸問題を解決する道具として、交流理論を使いこなせることをこの授業の第二段階の目標とする。 |  |
|                                     | 電気実習        | 学校教育現場においては、簡単な電気電子回路を生徒たちに実際に設計製作させることによって、電気を学ばせ、理解させることが中心になる。電気電子デバイス（ダイオード、トランジスタ、サイリスタ、フォトダイオード、フォトトランジスタ、発光ダイオード等）を用いた簡単な電気電子回路を設計・製作することによって電気・電子回路についての認識を深め、理解を確かなものとし、学校教育現場での生徒に対する電気技術教育の指導力を身に付けることを目標とする。  |  |
|                                     | 栽培学         | 栽培が人間の生きる営みにどのように関わっているかについての理解を深める。そのために、栽培の農業技術としての位置づけと、技術科における意義、栽培の理論を確認する。さらに具体的な作物栽培の事例を通して、栽培についての基本的な技術について学ぶ。前半で、栽培にかかわる概念を技術の問題とかかわらせながら検討する。栽培とは何か？技術とは何か？技術科の中になぜ栽培があるのか？などについて議論することを通じて、人間の生きる営みの原点の技術として、栽培の本質を明らかにし、理解を深める。後半で、栽培に必要な要素について理論的体系的に明らかにした上で、栽培技術について播種から収穫までを具体的な作物の事例に即して解説する。                             |  |
|                                     | 栽培実習 I      | 作物を実際に自らの手で栽培し、さらに収穫・調理、鑑賞も含めて、栽培の楽しさややりがいを感じとりながら、栽培に必要な技術の基本を体験的に学ぶ。栽培実習 I では、主に夏作物を栽培する。畑の露地栽培で、トウモロコシ・エダマメ・インゲンマメ・カボチャ・ナス・ピーマン・サツマイモなどを栽培する。水耕栽培で、トマト・キュウリ・スイカ・メロンなどを、選んで栽培する。鉢物栽培として、アサガオ・キクを栽培する。水田で、アイガモ放飼稲作を行い、水田の田植え・除草とアイガモの飼育などを行う。  |  |
|                                     | 栽培実習 II     | 作物を実際に自らの手で栽培し、さらに収穫・調理、鑑賞も含めて、栽培の楽しさややりがいを感じとりながら、栽培に必要な技術の基本を体験的に学ぶ。栽培実習 II では、主に秋冬作物を栽培する。自然条件と作物の生育にあわせて、栽培実習 I に述べたのと同様の計画で作業をすすめる。畑の露地栽培で、ダイコン・ハクサイ・ホウレンソウ・シュンギク・モチナなどを栽培する。前期の栽培実習 I から栽培してきたサツマイモの収穫を行い、焼き芋をして食べる。鉢物栽培として、前期から栽培してきたキクを栽培し、開花させ鑑賞する。水田で、前期から行っているアイガモ放飼稲作を行い、水田の稲刈りを行う。   |  |
|                                     | 情報 I        | 情報をコンピュータで扱うとは、どのようなことなのか、その原理について学ぶ。そのためには、コンピュータがどのような機械であるかについての理解が前提となる。その上で、情報をコンピュータが扱える形に加工し、処理する方法や手順について学ぶ。このことを通して、コンピュータと情報通信がどのような技術によって成り立っているのか、そして、コンピュータが魔法の箱ではなく人間の指示に従って動作する機械であることについて、認識を深めることを目標とする。扱うゲームやワークシートは、現在世界的に注目されている「コンピュータサイエンス・アンブラグド」という手法に基づく。こうした、「体験的に、見えない技術を学ぶ」手法を通して、コンピュータと情報通信に関わる根本的な原理を学ぶ。     |  |
|                                     | プログラミング実習 I | コンピュータは人間が与えたプログラムにしたがって、それを順に実行する機械である。このことを体験的に理解するために、実際にプログラミングを行う。この目的のために、教育用プログラミング言語「ドリトル」を用いる。「ドリトル」は、日本語による命令語や日本語に似た語順をもつといった特徴があり、言語そのものの学習は容易である。授業では、プログラミングの題材として、アニメーションや簡単なビデオゲームの作成、計測制御基板としてmicro:bitを用いた作品の製作を行う。このことで、コンピュータを意図通りに操作する感覚を自らのものとするとともに、計測と制御の意味、計測値の性質とその活用、情報通信など、現代社会で広く利用されている技術の基礎の仕組み理解を深める。       |  |

|                                     |      |        |  |  |
|-------------------------------------|------|--------|--|--|
| (中等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | (技術) | 基礎情報技術 | <p>現代の情報技術について理解し、本質に迫るためには、情報をどのように捉えるか、また処理対象や解決したい問題をモデル化する方法について知り、具体例に基づき慣れておくことが肝要である。その際、数理・理論的なものの見方、考え方は重要な柱の一つである。本演習では、そうした数理・理論に関する基礎的な技能を身に付けることを目的として、高等学校の数学程度の内容から始め、情報技術に関連した話題を例題に基づき演習する。授業では、情報技術の基礎である論理と数学的演算の2つを大きな柱として、最終的にこれらが融合してコンピュータが働いていることを理解する。まず、コンピュータは2進法の値を処理すべきデータとして扱っていることを再確認し、2進数を用いてどのように負の値や小数などが表されているかを演習を通して知る。続いて、もっとも簡単な論理である命題論理の入り口を学ぶ。最後に集合と論理と数値の演算が同じように扱われることを確かめ、電気回路としてのコンピュータへと移る。電気回路の組み合わせとして演算装置、記憶装置、そしてCPUとしてのはたらきがどのように実現されているかを知る。</p> |  |
|                                     |      | 家庭経営   | <p>この授業では、小・中・高等学校家庭科を指導する上で必要な家庭経営領域に関する知識を身に付けるとともに、生活の営みを多面的に把握・理解し、またその現代的課題について考察し、解決のための方策について検討することができる力を養うことを目標とする。そのために、生活時間や家計について、家族の形態、ジェンダー、ライフコースなどの多角的な視点から把握し、その現代的課題について考察し、解決のための方策について検討する。また生活のリスクとこれを支えあう制度及び消費者問題の実態や解決の方策についても考える。</p>  |  |
|                                     |      | 家族論    | <p>今日、家族にかかわるライフスタイルは多様化し、個人の選択にひらかれる余地が増しており、家族の意味も多義的なものになっている。その一方で、1990年代後半から生じている雇用流動化のなかで、家族生活にかかわる格差が存在している。この授業では、家族論の基礎概念と視角、現代における人生と家族のかかわりの実態、家族にかかわる法や社会制度を学ぶ。それらを通して現代家族を社会と関連させて総合的に理解した上で、教師として家庭科の「家族・家庭生活」分野を教える上での基本的視点を得ることを目標とする。前半では調査活動、映像視聴、グループ討論などの方法を取り入れながら、家族を捉える視点について学ぶ。後半では、人生と家族にかかわる社会制度とのかかわりを考える。</p>  |  |
|                                     |      | 生活経済論  | <p>この授業では、生活経済において基本となる事項について理解したうえで、これに関連する現代的な生活の諸課題について考察し、解決のための方策について検討する。ここでは現代的な生活の課題として、情報通信技術の発達を背景としたキャッシュレス社会の進展や多様なメディアから発信されるようになった生活情報、持続可能な社会の構築に貢献する倫理的消費などを取り上げる。またこれらはいずれも平成29、30年告示の学習指導要領で追加、明記された指導項目とつながっており、これらの現代的な生活の諸課題をどのように小・中・高等学校の家庭科の学びとしていくのかについて、実践例などを通して考えていく。</p>  |  |
|                                     |      | 被服学Ⅰ   | <p>被服学、家庭科教科書の中の被服学、裁縫用具、被服教材について考え、製作も行う。被服実習Ⅰの復習を基に、なぜその道具を使うのか、なぜその方法で縫製したのか、深く追求していく。第10回から第14回までは教材について考え、目的に合った縫製法を学び、縫製実習も行う。</p>   |  |
|                                     |      | 被服実習Ⅰ  | <p>ポーチ、手提げカバン、エプロン等を教材にし、地直し、アイロンのかけ方、裁断、柄合わせ、裁ち鉄の使い方、しつけ、ミシンでの直線縫い、始末等を正確に行えるよう学習する。ファスナー付きの小物の製作を最終作品として被服構成の基礎理論を把握しながら手縫いの基礎も学ぶ。技術の習得としてはゼロからの出発として、玉結びに始まる手縫いの基礎、ミシンでは上糸のかけ方、下糸の巻き方、糸調子の取り方で基礎を押さえ、理論を踏まえた正確な裁断縫製、始末ができるようにする。</p>  |  |
|                                     |      | 食物学Ⅰ   | <p>五大栄養素であるたんぱく質、脂質、炭水化物、無機質及びビタミンについて栄養学と食品学の視点から解説し、その知識を今後のより良い食生活のために有効活用できるようになることを主な目的とする。また、五大栄養素以外の食品成分として、嗜好成分(色素・呈味・香り)についても解説を加える。さらに授業の最後には、保健機能食品(栄養機能食品、特定保健用食品及び機能性表示食品)についても言及し、どのような有効成分がどのような機能を発揮しているのかについて、具体例を挙げながら解説する。</p>  |  |
|                                     |      | 食物学Ⅱ   | <p>授業の序盤では日本食品標準成分表(以下、食品成分表)の利用の仕方について解説し、日常摂取している食品の栄養に関する情報を、食品成分表から正しく読み取れるようになることを目指す。次に中盤では、食品成分表のデータをもとに、植物性食品(米、小麦、大豆など)及び動物性食品(食肉、牛乳、卵など)がどのような栄養素によって構成されているかについて解説する。そして終盤では食品表示について言及し、加工食品、生鮮食品及び保健機能食品の表示の仕組みについて解説する。</p>   |  |
|                                     |      | 調理実習Ⅰ  | <p>本授業は主体的に食生活を営むために、①調理や食事の役割、②安全で衛生的な食材・調理用具の取扱い、③調理の基礎(計量、調理操作)、④食品の調理特性、⑤食事計画と献立作成、⑥日本の食文化の継承に関する必要な基礎的な知識や技能技術を習得し、生活に役立つ実践力を高めることを狙いとする。<br/>4名ずつ班を編成し、班ごとに教員が指定する献立(第3回～第11回)または自主献立(第12回～第14回)に沿って調理する。指定献立では、教員による示範と配布資料(レシピ)に沿って調理し、自主献立では予めレシピを作成してから試作と調理を行う。</p>   |  |

|                                     |      |         |   |         |
|-------------------------------------|------|---------|---|---------|
| (中等教科内容科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | (家庭) | 調理学     | 本授業は主体的に食生活を営むために、①調理や食事の役割、②安全で衛生的な食材・調理用具の取扱い、③食品の調理特性、④食品の栄養素、⑤食事計画と献立作成、⑥日本の食文化の継承に関する必要な基礎的・基本的な知識を習得し、的確に判断できる思考力を育成することを狙いとする。実際にパン、ジャム、豆腐などの食品を加工し、その際に生じる調理科学的現象を体験的に理解したり、食文化の地域性やその特徴について考察したりする。なお、食事計画については食事摂取基準に基づいた弁当作りやテーブルマナー講習などの機会を設ける。   |         |
|                                     |      | 住居学     | 授業の目標は、住まいの問題が生活のさまざまな側面と深く関わりあっていることを学ぶとともに、住生活における問題の解決のための考え方や手法を身に付けることである。具体的な目的は、現代の住生活の特徴と問題を理解し、問題解決のための考え方を学ぶことにある。この授業では、近年の生活変化と住居の不適合問題(生活様式、建て方、家族関係)や、現在の住居をとりまく社会問題(地球環境 温暖化、住宅事情)に目を向けながら、住生活の特徴およびその問題の原因や解決策を考える。   |         |
|                                     |      | 保育学     | 現代社会において子どもが生まれ育つこと、子どもを産むこと／産まないこと、子どもを育てること、それらを支える社会関係や制度に関する現状と課題を総合的に理解し、中学校・高等学校で「保育」の授業を構想するための基礎的な視点を獲得することが授業の目的である。授業担当者による講義、ゲストスピーカーによる講義(家庭看護に関する内容)、保育実習と報告会を組み合わせて授業を構成する。実習は、現代の子育ち／子育てに関わる探究課題を各グループで設定し、保育・子育て支援の現場での活動計画をたてて実践するフィールドワーク形式で行う。(ゲストスピーカーによる講義1回)  |         |
|                                     | 英語   | 音声学     | 本授業では、音声学の基礎理論を学び、発音指導に役立つ英語の発音の仕方について学習する。授業の到達目標は、(1)発音記号をしっかりと身に付け、母音・子音の個々の音の特徴や単語・文レベルでの発音や音声の仕組み学び、実際にそれらの発音ができるようになること、(2)英語と日本語の発音の仕方と比較して、その共通点及び相違点を理解できるようにすること、そして最終的には(3)それらの学んだ知識と身に付けた技能を発音指導に役立てるようにすること、である。各回、テキストに沿って音声の理論を学び、発音の演習を行う。適宜、国際英語の観点から、多様な種類の英語音声も扱う。   |         |
|                                     |      | 英文法     | 本授業の前半では、言語の特性全般、特に、動物の「ことば」と言語との相違点、言語表現の創造的特性、また言語獲得の生得的側面について理解を深める。後半では、高校までの文法の学習事項を踏まえ、音素、形態素、語、品詞、句構造、変換、意味役割と文法機能等の、文の組み立てに関する基本的な考え方について学ぶ。その上で、発音と綴字、派生語と複合語、主要語を中心とする文法的まとまり、単文と複文、基本文と派生文など学校文法と密接にかかわる各項目について、英語の具体例に基づいた演習を行い、理解の定着を図る。   |         |
|                                     |      | 英語学講義 I | 本授業では、これまで学んできた文法事項について、伝統的な言語学、また、認知言語学などの比較的新しい分野に着目しながら、とらえ直しを図る。そのために、まず前半では、主に学校教育において学んできた文法・語法の事例をいくつか取り上げて、英語学的、言語学的にそれらがどのように捉えられ、説明されてきたかを見て、文法理解を深める。また、そのうち一回では、現職の中高教員を交えて、中高英語教育における文法指導の実際に関する知見を得る。後半では最近の主要な言語理論の一つである認知言語学に焦点を当て、その基礎を学ぶとともに、認知言語学に基づいて中高英語教育で学ぶ事項を見直し、理解を深める。                                |         |
|                                     |      | 英語学演習 I | (概要) 英語の教育・研究の上で基礎となる、文法とその運用についての基礎的な知識を身に付ける。<br>(オムニバス方式／全15回)<br>(113 濱寄 通世／8回)<br>語彙同士の意味的な関係に着目し、語彙力向上を意識したトレーニングを行うとともに、述語を中心とした基本文型の組み立てやテンス、モダリティ、アスペクト、また言語運用に関する基本的な事項として、会話の含意について理解を深める。<br>(111 ライアン・アンソニー／7回)<br>より実際の言語使用を意識した内容として、談話の種類、談話の構造と言語行為、会話構造分析、会話におけるチャットやチャングの構造について、演習を行う。                       | オムニバス方式 |
|                                     |      | 英語史 I   | 英語がどのようにして現在のようになつたのかを学び、英語に対する理解と関心を深める。具体的には、以下の三点を目標とする。<br>(1) 英語を「歴史」という観点から捉えなおし、より深く理解する。<br>(2) 英語の一見不規則、不合理な性質の多くが、その歴史に原因があることを学ぶ。<br>(3) 表現が持つ歴史的背景を知る(考える)ことで、言葉の面白さ、奥深さを感じる。<br>以上の目的のもと、まず、序盤で、英語の各時代の姿と特徴、また、それに関わる外面史を見て、中盤で、比較言語学の基礎を学びながら、広い視座で英語の歴史を理解する。終盤では、英語のアルファベットの歴史を理解し、その背景にある長い歴史と、各文字の興味深いルーツを知る。 |         |

|      |                 |  |          |       |   |  |
|------|-----------------|--|----------|-------|---|--|
| (英語) | (中等教科内容科目)      | (専攻基礎科目群)  | (専門教育科目) | 英文学概説 | 英文学の主だった作品を、時代背景を踏まえて概観し、作品のさわりや文体(style), 語りの特徴(narrative discourse), ジャンル(genre)について学ぶ。具体的には、アングロ・サクソン文学を代表するBeowulfから始まって、チャウサーのCanterbury Tales, シェークスピアのHamletやMacbeth, ミルトンのParadise Lost, デフォーのRobinson Crusoe, スイフトのGulliver's Travels, ロマン派の詩人たちの作品, ディケンズのChristmas Carols, 世紀末の詩人たちの作品, ジョイスのUlysses, ペケットのWaiting for Godot, およびゴールディングのLord of the Fliesを扱う。 |  |
|      | 米文学概説           | 米国の植民地時代から二十世紀後半までの時代思潮を概観しつつ、各時代の文学を通史的に概説する。アメリカ文学が抱える特殊性を考察するとともに、個々の文学作品の背景にある社会や文化、歴史に関する知識及び理解を養うことを目的とする。アメリカ文学を語る上で重要なビュウリタニズムとフロンティアの視点からアメリカの文化と歴史について考え、次にクーバー、ホーソン、メルヴィル、ポウ、ストウ夫人、マーク・トウェイン、スタインベック、ヘミングウェイ、サランジャー、アリス・ウォーカーなど、各時代を代表する作品について紹介し、その現代的意義について考える。   |          |       |   |  |
|      | 英語文学演習 I        | 前半回では「英文学」という学問の成り立ち、批評的態度、批評方法などを概観し、後半回では短編小説(キャサリン・マンスフィールドの'Bliss'と余裕があればオスカー・ワイルドの'The Selfish Giant')を読む作業を通して、英文の正確な読解と批評的視点('Bliss'では「信頼できない語り手」を、'The Selfish Giant'ではクイア批評の一端)の涵養を目指す。毎回、各グループに配布プリントの和訳・まとめを行ってもらい、それを基に皆で合評する。   |          |       |   |  |
|      | 英語文学演習 II       | 短編小説を扱った英語文学演習 I の学びを踏まえ、英語文学演習 II では長編小説を扱う。具体的にメアリー・シェリーのFrankenstein, or the Modern Prometheusをテキストに小説技法及び(参考文献に挙げている『批評理論入門』と、デヴィッド・ロッジの『小説の技法』を援用しながら)批評理論を学ぶことで、テキストの正確な読解と批評的視点の涵養を目指す。毎回、各グループに配布プリントの和訳・まとめを行ってもらい、それを基に皆で合評する。   |          |       |   |  |
|      | 英語文学講義 II       | 二十世紀アイルランド文学を代表する二人の作家、W. B. YeatsとJames Joyceの作品を読み、その歴史的・文化的コンテクストを踏まえたうえで、作品のテーマ、文体、言葉の技法、語りの特質等について学ぶ。具体的には、イェイツの初期の詩集The RoseおよびThe Wind among the Reedsとアイルランド文芸復興運動の関わり、ジョイスの初期の短編集Dublinersにおける植民地支配と麻痺の問題を学ぶ。同時に文学形式あるいは運動としての象徴主義とリアリズム、またモダニズムについて理解する。   |          |       |   |  |
|      | オーラルコミュニケーション I | (英文) This course will focus on three interrelated aspects of oral communication. First, students will develop the ability to actively negotiate meaning in English in the classroom and in conversations. Second, students will learn about connected speech and demonstrate the ability to incorporate aspects in monologues. Finally, student will learn how to actively take part in conversations and this ability will be tested in a final speaking test.<br><br>(和訳) 本授業ではオーラルコミュニケーションにおいて関連しあう三つの要素に焦点をあてる。第一に学生は、積極的に英語で意味交渉する能力を向上させる。第二に連続音声について学び、個人練習によりその習熟度を見る。最後に会話に積極的に参加できるようになり、最終試験でその力を測る。 |          |       |   |  |
|      | ライティング I        | ライティングの能力向上を中心として、その他の英語技能も視野に入れながら、汎用的な英語スキルを養うことを目標とする。映画のスク립トを利用したごく日常的な英語表現の理解から始め、徐々に英字新聞や英語雑誌を利用した長めのライティングに進むように授業を構成する。これらの材料を利用した演習を通して、平易な英語表現の中に重要な文法事項や言語運用上のルールを学習者自身が気づけ出していくような、発見学習型の授業とする。  |          |       |   |  |
|      | 異文化理解           | (英文) This course will focus on cultural differences and intercultural communication. Classes will be organized around 2 to 3-week themes such as the stages cultural adaptation, verbal and nonverbal communication, and cultural differences among families and the workplace. Students will be expected to read prior to attending class and participate actively in classroom activities and discussions.<br><br>(和訳) 本授業では文化的な差異や異文化間コミュニケーションに焦点を当てる。授業は2-3週間ごとにテーマを変え、その中で文化適応の各ステージ、言語的・非言語的コミュニケーション、家族や職場での文化的差異等について考察する。学生は予習と、教室でのアクティビティや討議への積極的参加を要求される。   |          |       |   |  |



|                                    |       |                        |   |  |
|------------------------------------|-------|------------------------|---|--|
| (専門教育科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>中等教科教育法科目 | 国語科教育 | 中等国語科教育法 C I           | 中等学校用の国語教科書の教材について、学習指導案のかたちで表現できるように教材研究を行う。基本的には指導案のなかでも、「教材観」の記述が中心である。ここでは、学習指導要領における国語科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解した記述が求められる。授業はひとつの教材につき、教員からの分析の観点の説明およびそれをもとにしたグループディスカッションの回と、グループディスカッションで明らかになったことの発表と総括の回を繰り返すかたちで行う。また文学的文章教材、説明的文章教材それぞれの読み方について、1回を設けて講義を行う。   |  |
|                                    |       | 中等国語科教育法 C II          | 中等学校用の国語教科書の教材について、実際の研究授業と同じ形式(授業役、授業観察役、生徒役に分け、授業役はグループの代表1名が行う。場合によってはT Tのかたちでグループの複数メンバーが授業役を務めることもある)で模擬授業を行う。授業役は、事前に、グループでの指導案やワークシート等を作成する。実際に行われている研究授業と同形式として、授業討論会を実施する。各回の前半50分を模擬授業、後半40分を討論会とする。  |  |
|                                    |       | 中等国語科教育法 C III         | 中学校学習指導要領における国語科の「目標」「内容」を把握したうえで、「知識及び技能」を育てるための国語科の役割を「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」において考察し、どのような授業づくりをするかについて考えて行く。そのうえで、現行中学校国語教科書に掲載される小説・説明文・詩を対象として、ジャンルの特性に配慮しつつ、教材研究の方法を習得し、生徒の読みに対応するための教師としての読みを持つことをめあてとする。  |  |
|                                    |       | 中等国語科教育法 C IV          | 高等学校学習指導要領における国語科の「目標」「内容」を把握したうえで、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を育成するための国語科の役割について理解を深める。そのうえで、現行の高等学校国語教科書に掲載される小説・説明文・詩について、先行研究をふまえて、教材研究の方法を習得し、生徒の読みに対応するための教師としての読みをもつことをめあてとする。また、論理的思考力を育てるための評論・論説文の読み方や表現力を養うための文章の書き方の方法について理解する。   |  |
|                                    | 社会科教育 | 中等社会科教育法 C I           | 中学校学習指導要領(社会、特に公的分野)における目標や育成を目指す資質・能力を理解し、学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして、様々な学習指導理論、学習指導案の書き方を学んだ後、模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第1～5回は学習指導要領、指導する上での留意点、評価、学問領域と学習内容の関係、課題解決型などの発展的内容について学びます。第6～9回は子どもの実態にあった授業作り、ICTの利用、学習指導案作成上の留意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい、第15回は模擬授業の振り返りを行い、よりよい授業作りについて考えていきます。  |  |
|                                    |       | 中等社会科教育法 C II          | 中学校学習指導要領(社会、特に歴史的分野)における目標や育成を目指す資質・能力を理解し、学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして、様々な学習指導理論、学習指導案の書き方を学んだ後、模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第1～5回は学習指導要領、指導する上での留意点、評価、学問領域と学習内容の関係、課題解決型などの発展的内容について学びます。第6～9回は子どもの実態にあった授業作り、ICTの利用、学習指導案作成上の留意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい、第15回は模擬授業の振り返りを行い、よりよい授業作りについて考えていきます。   |  |
|                                    |       | 中等社会科教育法 C III(地理歴史分野) | 中学校学習指導要領(社会、地理・歴史的分野)と高等学校学習指導要領(地理歴史)における目標や育成を目指す資質・能力を理解し、学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして、様々な学習指導理論、学習指導案の書き方を学んだ後、模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第1～5回は学習指導要領、指導する上での留意点、評価、学問領域と学習内容の関係、課題解決型などの発展的内容について学びます。第6～9回は子どもの実態にあった授業作り、ICTの利用、学習指導案作成上の留意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい、第15回は模擬授業の振り返りを行い、よりよい授業作りについて考えていきます。   |  |
|                                    |       | 中等社会科教育法 C IV(公民分野)    | 中学校学習指導要領(社会、公的分野)と高等学校学習指導要領(公民)における目標や育成を目指す資質・能力を理解し、学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして、様々な学習指導理論、学習指導案の書き方を学んだ後、模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第1～5回は学習指導要領、指導する上での留意点、評価、学問領域と学習内容の関係、課題解決型などの発展的内容について学びます。第6～9回は子どもの実態にあった授業作り、ICTの利用、学習指導案作成上の留意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい、第15回は模擬授業の振り返りを行い、よりよい授業作りについて考えていきます。中学校社会科公的分野と高等学校現代社会の内容を取扱い、その相違や接続を考えるカリキュラムになっています。 |  |
|                                    | 数学科教育 | 中等数学科教育法 C I           | 数学教師として、数学教育の基本的知識や教育実践に生かせる見識を得る。数学教育の目標となる資質・能力について理解し、指導の際に意識できるようにすること、各領域の基本的な内容を理解し、指導の際に留意すべき点を明確化すること、を目標とする。前半では、数学教育の目標を資質・能力の観点からいくつか挙げ、講義を行う。後半では、各領域の内容についてその背景や問題点と共に解説し、実際に問題を解いてもらったリ、指導計画を練ったりしてもらう。   |  |

|                                      |         |               |   |  |
|--------------------------------------|---------|---------------|---|--|
| (専門教育科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(中等教科教育法科目) | (数学科教育) | 中等数学科教育法C II  | 数学の特性に応じた情報機器を利用した教材研究・授業設計/研究の方法を習得することを目的とする。教材研究・授業分析・授業設計・模擬授業の実施を踏まえた指導案修正などをテーマとする。図形を中心的な素材として、コンピュータ・ネットワークを利用した教材研究・授業設計/研究の方法を習得する。毎回、一定量の課題を解決しながら、最終的に自分なりの指導案を作成し、発表する。  |  |
|                                      |         | 中等数学科教育法C III | 中学校・高等学校数学科の学習指導要領における目標の変遷を押さえ、中等数学教育における目標論に関して基本的な知識を身に付けると共に、問題解決を軸にした教授・学習の基本的な考え方を理解することを目標とする。そのために、前半では、算数・数学教育カリキュラムの目標・内容の構造とその歴史的変遷について体系的な講義を行い、後半では、問題解決的な授業の構成方法に関する基本事項について講義すると共に、幾つかの指導内容に関して具体的な授業設計を行う。  |  |
|                                      |         | 中等数学科教育法C IV  | 算数・数学科の指導内容としては新しい統計領域の指導実践を行う力の習得を目指す。統計領域の指導が重要視される背景や求められる教育像を理解した上で、先進的な教材、授業実践についても体験的に学習する。また自身が担い手として新規的教育実践を展開していきけるよう、教材・授業開発力の習得も目指す。資料等を配布しての講義、現在の教育状況に関する調査・レポートの作成、新規の教材を用いた協働的問題解決を取り入れたグループワークなど幅広く展開する。  |  |
|                                      | 理科教育    | 中等理科教育法C I    | 中学校・高等学校の理科における教育目標や学習内容に適した授業での指導・評価や、その計画に関わる授業研究の方法等が理解できること、さらに生徒に育成する理科の資質・能力を考え、その達成にむけた授業実践についての意見が持てることを目指す。学習指導要領解説理科編に示される理科の資質・能力やその形成の順序性、生徒の自然認識の多様性や抱える学習困難性、さらに理科指導に向けて教師に必要な資質力量に関わる概説を行うほか、理科授業における指導や評価の技法に関する場面指導の演習を物理・化学・生物・地学の単元に基づき取り入れることで、主体的に理解し、考え、工夫し、表現する体験を重視した学修を展開する。                 |  |
|                                      |         | 中等理科教育法C II   | 中学校・高等学校の理科の教育課程に位置づけられる科学的な探究活動の実践に関わる教材研究や授業設計、またそれらを基盤にした指導計画を理解できること、また、生徒の活動実態に即した技能指導に必要な能力を知り、演習等を通じて獲得することを目指す。科学的探究能力の育成を重んじる教育課程の在り方、理科学習活動を想定した協働学習の演習とそこでの指導の検討、ESD・SDGs(教材やプログラム)の推進、教育実践報告をもとにした学習環境構成等について協議や演習を行うことで、理科学習の場づくりに関するスキル獲得の体験的な学修を展開する。  |  |
|                                      |         | 中等理科教育法C III  | 中学校・高等学校の理科授業における単元展開設計やそこでの学習指導計画に関する基本的な理解に基づき、授業実践において教師に必要な理科指導技術の理解と獲得を、学生グループの協働による学習指導案の作成や模擬授業の実施を通じて目指す。物理・化学・生物・地学に関する学習内容の中から学生グループ毎に選択させた学習単元について、全授業時間にわたる具体的な授業デザインを協働で行わせ、学習指導案としてまとめ、全体での指導案協議の場で発表して意見交換を行わせる。さらに、改善した学習指導案に基づいて模擬授業(マイクロティーチング)を実践したうえで、活動成果と課題に関する協議を通して、実践的指導力を獲得させる。             |  |
|                                      |         | 中等理科教育法C IV   | 中学校・高等学校の理科で生徒が学ぶ基本的な科学概念とその理解構築のための指導における具体的な留意事項を、教科書分析や教材研究から確認し、探究的な学習過程の論理展開を検討することで、観察実験場面の指導力の獲得を目指す。取り扱う内容として、前半は第1分野・物理/化学系、後半は第2分野・生物/地学系に分けて、中学校から高等学校の学習内容の接続(系統性)も踏まえつつ、教科書や教材のほか、演示実験や生徒実験の分析を行わせる。さらに、観察・実験の場面指導演習の経験を踏まえさせることにより、科学概念と実験操作や実験結果との論理的な関係づくりを意識した指導計画のあり方について追究させる。                     |  |
|                                      | 音楽科教育   | 中等音楽科教育法C I   | 音楽科の教育目標を理解し、学習指導要領に示してある内容を踏まえて、授業の立案ができるようになること、そして、実際に指導を行うために必要な知識や技能を身に付けることを目指す。現在の学習指導要領だけでなく、学習指導要領の歴史的な流れについて学ぶことにより、学習指導要領の目標の背景についても理解する。また、これまでに培ってきた音楽の力を、教材研究や授業の立案に活かす方法を身に付け、実際の指導を行うための技術も身に付ける。様々なグループで協働作業をしていくことを通じて、幅広い意見の捉え方やコミュニケーション能力、意見のまとめ方なども身に付けていく。                                     |  |
|                                      |         | 中等音楽科教育法C II  | 学習指導要領で求められている和楽器の指導、伝統的な歌唱の指導、我が国の音楽(伝統音楽)の鑑賞指導の実践を見据えて和楽器「箏」と伝統的な歌唱を学び、実際に指導ができるための基礎知識を身に付けることを目的とする。実技と鑑賞の往還による演習形式の授業。学習指導要領における日本の伝統音楽の位置付け、日本音楽史との関連も学ぶ。グループワークを通して個人の習熟度を高める。和楽器の伝統的な指導法である「真似」「模倣」、楽譜に頼らない「口唱歌」を用いての指導を取り入れた授業。その際、情報機器や教材の効果的な活用法についても検討する。オンラインコンテンツ映像を活用し繰り返し練習を行うとともに授業の空き時間で自主的に練習すること。 |  |

|                                      |         |              |   |  |
|--------------------------------------|---------|--------------|---|--|
| (中等教科教育法科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | (音楽科教育) | 中等音楽科教育法CⅢ   | 学習指導要領で求められている和楽器の指導、伝統的な歌唱の指導、我が国の音楽(伝統音楽)の鑑賞指導の実践を見据えて和楽器「三味線」と伝統的な歌唱を学び、実際に指導ができるための基礎知識を身に付けることを目的とする。実技と鑑賞の往還による演習形式の授業。学習指導要領における日本の伝統音楽の位置付け、日本音楽史との関連も学ぶ。グループワークを通して個人の習熟度を高める。和楽器の伝統的な指導法である「真似」「模倣」、楽譜に頼らない「口唱歌」を用いた指導を取り入れた授業。その際、情報機器や教材の効果的な活用法についても検討する。オンラインコンテンツ映像を活用し繰り返し練習を行うとともに授業の空き時間で自主的に練習すること。  |  |
|                                      |         | 中等音楽科教育法CⅣ   | 授業の目標<br>音楽科の授業の中で取り扱われている活動(歌唱、器楽、創作、鑑賞)の指導法について、実習を通じて指導に必要な知識と技術を身に付け、留意すべき点などを理解する。さらに文部科学省の音楽科学習指導要領(小学校、中学校)の内容を理解する。<br>授業計画の概要<br>授業の最初に、受講者3名ずつ中学校音楽科教科書に掲載されている合唱曲の指揮実践(指導実習)を行う。続いて、歌唱・器楽・鑑賞の各教材について理解を深めるとともに、それぞれの活動の意義について考察する。創作は、実際に曲を創る活動を通して指導のポイントを実体験する。テキストは、文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』東洋館出版社と、文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』教育芸術社を使用する。学生に対する評価は、授業への取り組み(30%)、合唱曲の指揮実習への取り組み(30%)、創作活動の作品課題作成及び課題への取り組み(40%)を総合して判断する。 |  |
|                                      | 美術科教育   | 中等美術科教育法CⅠ   | 中学校美術科及び高等学校芸術科(美術)の教育目標や内容を理解し、関連する理論を踏まえて、単元構想ができるようになる。前半は学校教育における美術教育の意義を歴史やその背景となる理論を学習することで理解する。後半は学校現場で使用されている教科書を材料に、学習指導要領で示されている内容を理解し、単元の構想を目指す。各回において、個人での学習から小グループ(4人程度)での討議・発表をする時間を設け、学習を定着させる。  |  |
|                                      |         | 中等美術科教育法CⅡ   | 中学校美術科及び高等学校芸術科(美術)の教育目標や内容を理解し、学習指導案を作成する。また教材研究を通して、具体的に学習内容や指導方法を考察する。<br>前半は学習指導案の構成の理解と作成を行う。個人での作成を基本とするが、適宜小グループ内で発表・討議を行い、学習内容の共有・定着を行っていく。後半は分野ごとに教材研究とその発表を行っていく。個人または小グループでの活動とする。発表を通して学習内容の共有・定着を行っていく。  |  |
|                                      |         | 中等美術科教育法CⅢ   | 3年次の教育実習において行った研究授業に関する発表を行い、授業改善に向けてのディスカッションを行う。<br>前半は主に教育実習において行った研究授業に関する発表と協議を行う。適宜、授業者から子ども理解や教科指導に関する内容を指導する。後半は、題材・単元事例をもとに、授業に向けた取り組みを行う。個人での作成を基本とするが、適宜小グループ内で発表・討議を行い、学習内容の共有・定着を行っていく。  |  |
|                                      |         | 中等美術科教育法CⅣ   | 学習指導要領への深い理解を確認し、主に中学校美術科教育における指導内容や方法、評価について整理し、学習指導に必要な基礎的な実践力を確認する。これらを踏まえ、小グループ(4人程度)で模擬授業として単元の導入授業(50分)を実施する。その中で学習指導案の作成や実際の学習指導における指導方法・評価について協議し、実践力の素地を身に付けます。  |  |
|                                      | 保健体育科教育 | 中等保健体育科教育法CⅠ | 授業のテーマ及び到達目標は、保健体育科教育の授業づくりのイメージを具体的に描けることに重点を置き、現場に出て保健体育科の授業に日々取り組むために必要な理論と実践の具体を理解し、実践的指導力を養うことである。内容は、中等保健体育科の3年間の指導内容と学習指導の具体的な方法について、各領域の整理表を参考に検討する。また、学校現場での実務経験を活かし、実践上の課題を踏まえながら、学習指導における「陥りやすい現状の問題点」を見付けるとともに、その改善の視点を検討する。  |  |
|                                      |         | 中等保健体育科教育法CⅡ | 授業のテーマ及び到達目標は、中等保健体育科における単元の構想、計画、実施、評価について実践的な能力を身に付ける。また、確実に学習指導案を作成できるようにする。内容は、中等保健体育科の各領域(体づくり運動領域・器械運動領域・陸上競技領域・水泳領域・球技領域・武道領域・ダンス領域・体育理論・保健分野)における学習指導案の作成とそのピアレビューを学生同士で検討し、単元の構想・計画を重点的に行い、教育実習での実施と評価のイメージをもつ。  |  |
|                                      |         | 中等保健体育科教育法CⅢ | 保健体育科の学習指導計画について、原理的及び構造的な理解を図るための講義と学習指導案作成を実際に行う。学習指導案の構成について、内容項目の関係を考えながら単元構想、単元計画、1時間の展開など、まず事例を参照する。次いで、保健体育の複数領域について実際の学習指導案を作成する。作成した学習指導案について受講者相互にピアレビューをしながら実践的な力量を高める。また、想定される実践上の諸問題を挙げながら、より実践的な学習指導案を作成する能力を高める。   |  |

|                                      |           |                |   |  |
|--------------------------------------|-----------|----------------|---|--|
| (専門教育科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(中等教科教育法科目) | (保健体育科教育) | 中等保健体育科教育法C IV | 保健体育科の実践上の諸問題と今日的教育課題について理解するとともに、これら問題(課題)解決の方法について考える。実践上の諸問題については、公開授業や教育実習等で経験した児童生徒の学習状況や学習環境の問題を指摘しながら、その改善のためのアイデアを提示しながら受講者相互に話し合う。<br>今日的教育課題については、過去30年の教育審議会から提示された課題の変遷を系譜するとともに、最新の教育課題について実践による解決を考えアイデアを出し合う。  |  |
|                                      |           | 中等保健科教育法C I    | 最終目標 主として初等教育体育科保健領域の基礎知識の形成<br>1. 教科としての初等教育体育科保健領域の意義、目標、内容、指導計画、学習指導方法、評価方法を説明できる (知識/理解)<br>2. よりよい授業を展開するために、健康リテラシー(健康についての識字能力→情報を収集し、吟味し、活用する)に寄与できる (思考/判断)<br>3. 保健担当教員に必要な優れた授業観を自ら進んで形成できる (関心/意欲)<br>保健担当教員の役割と職務内容などに触れながら、教職の意義について理解し、自らの教職への意欲や適性を認識する。更に、教員免許状を習得すること、教育実習を充実したものにするための準備として、保健科の教育内容及び指導法、指導案作成(細案)などの能力を身に付ける。講義形式のほか各自で内容について思考し、グループで討論をする。講義後は、内容に基づいて課題研究(レポート)を設定する。 |  |
|                                      |           | 中等保健科教育法C II   | 最終目標 中等教育保健体育科保健分野の基礎知識の形成<br>1. 教科としての中・高等学校保健体育保健分野(科目保健)の意義、目標、内容、指導計画、学習指導方法、評価方法を説明できる(知識/理解)<br>2. よりよい授業を展開するために実際の授業を分析し、児童が課題解決をできる授業展開を組み立てることができる(思考/判断)<br>3. 保健担当教員に必要な優れた授業観を自ら進んで形成できる(関心/意欲)<br>保健担当教員の役割と職務内容などに触れながら、教職の意義について理解し、自らの教職への意欲や適性を認識する。更に、教員免許状を習得すること、教育実習を充実したものにするための準備として、保健科の教育内容及び指導法、指導案作成(細案)などの能力を身に付ける。講義形式のほか各自で内容について思考し、グループで討論をする。講義後は、内容に基づいて課題研究(レポート)を設定する。   |  |
|                                      |           | 中等保健科教育法C III  | ・保健科教育の意義、目標、内容、方法、評価について、保健授業の問題点と関連づけながら説明できる(知識/理解)<br>・模擬授業やグループワークを通して、他の受講生と保健科教育の内容や指導方法について討議できる(思考/判断)<br>・「保健」担当教員に必要な優れた授業観や指導方法を自ら進んで形成できる(関心/意欲)   |  |
|                                      |           | 中等保健科教育法C IV   | 最終目標 高等学校保健体育科保健分野の実践力の形成<br>1. 保健科教育の意義、目標、内容、方法、評価について、保健授業の問題点と関連づけながら説明できる(知識/理解)<br>2. 模擬授業やグループワークを通して、他の受講生と保健科教育の内容や指導方法について討議し、保健科の各内容に対して新しい考えを持つことができる(思考/判断)<br>3. 保健担当教員に必要な優れた授業観や指導方法を自ら進んで形成できる(関心/意欲)  |  |
|                                      | (技術科教育)   | 中等技術科教育法C I    | 1. 技術科の単元構成と授業づくりの習得 2. 授業検討力の習得 3. 技術科の単元構成と授業づくりへの関心 4. 技術科の単元構成と授業づくりの技法習得。学習指導要領の4単元内容の理解の上で、典型実践の把握、関連の授業づくりを行い、学びあう。学校教育における技術教育の役割、技術科の単元構成と授業論、授業づくり演習、単元A(材料と加工)の目標と授業例、単元Aの授業づくり演習、単元Aの模擬授業、単元B(生物育成)の目標と授業例、単元Bの授業づくり演習、単元Bの模擬授業、単元C(エネルギー変換)の目標と授業例、単元D(情報)の授業づくり演習、単元Dの模擬授業  |  |
|                                      |           | 中等技術科教育法C II   | 技術科教育の特徴的な役割と機能について総合的に学習する。最初に、技術科教育で育成する資質と能力を、技術教育の基本的視点から自己教育力、問題解決能力、創造性の育成について検討する。次に、生徒の発達段階を考慮して、学習心理との関わりについて検討する。また、技術科教育と総合的学習との関わりについて検討する。最後に、技術科教育について国際的な視野から検討する。これらのことから、教師になった際の課題に対応する資質を身に付けることを目指す。本授業科目の内容は、主に、「技術科教育と問題解決能力の育成」を中心に扱うとともに、各受講者に模擬授業を実施する。模擬授業を通して、「問題解決的な学習」を重視した技術科教育の指導技術を身に付けさせる。   |  |
|                                      |           | 中等技術科教育法C III  | 授業の目標は、1. 技術科の学力論、内容論、方法論、教材論の習得、2. 授業構成力の習得、3. 技術科の学力論、内容論、方法論、教材論への関心である。技術科の学力論の知見をふまえつつ、技術科の典型的授業を対象にした内容論、方法論、教材論の考察を通して、それら授業づくりの基礎的知見を習得する。内容として、技術科教育の目標・役割、子どもの発達と技術の学力、内容論①技術の科学、内容論演習①技術の科学、内容論②技能、内容論演習②技能、内容論②技術観・労働観、内容論演習②技術観・労働観、教育方法論①技術の科学、教育方法論演習①技術の科学単元、教育方法論②技能、教育方法論演習②技能、教材論①技術の科学、教材論演習①技術の科学を行う。  |  |

|                                      |         |               |  |  |
|--------------------------------------|---------|---------------|--|--|
| (専門教育科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(中等教科教育法科目) | (技術科教育) | 中等技術科教育法C IV  | 技術科の授業の立案・運用に関する総合的知識を習得させる。活動的な学びの教材例をもとに、授業の立案・模擬授業をもとに、①授業の目標・課題設定、②学びの場面の分節化、③発問と応答について授業実践の課題を学び取る。授業内容は以下。授業のガイダンス、配送計画ゲームの授業を体感する。ルータゲームの授業を体感し、授業の目標、教材の方法的特徴を学ぶ。技術ゲームの授業を体感し、授業の目標、教材の方法的特徴を学ぶ。模擬授業(20分間)の技術科教育における単元上の位置づけを考えるとともに、授業案を考え、模擬授業のシミュレート。模擬授業の実施・授業改善の検討会。技術科の授業論・教材論の動向。成長する技術教師の授業研究とコミュニティ。技術科の授業づくりに関する考察、レポート作成・代表者の発表。成長する教員になるための方策の検討、レポート作成・代表者発表。 |  |
|                                      | 家庭科教育   | 中等家庭科教育法C I   | 授業では、子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ、中学校家庭科で取りあげる教育内容をどのように指導するかを検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち、多様に変化し、多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち、子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を、個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけた指導について、総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。   |  |
|                                      |         | 中等家庭科教育法C II  | 授業では、子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ、高等学校家庭科で取りあげる教育内容をどのように指導するかを検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち、多様に変化し、多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち、子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を、個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけた指導について、総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。  |  |
|                                      |         | 中等家庭科教育法C III | 授業では、子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ、中学校・高等学校家庭科で取りあげる教育内容をどのように指導するかを家庭科と家事・裁縫科の歴史の変遷、ならびに諸外国と日本にみる教育の歴史で課題とされた事柄と関連づけて検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち、多様に変化し、多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち、子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を、個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけた指導について、総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。  |  |
|                                      |         | 中等家庭科教育法C IV  | 授業では、子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ、中学校・高等学校家庭科で取りあげる教育内容をどのように指導するかを諸外国にみる家庭的教科、および日本国内における現代的課題等の具体的な事柄と関連づけて検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち、多様に変化し、多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち、子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を、個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけた指導について、総合的・理論的・実践的に検討し探究し、今後を展望することを目標とします。   |  |
|                                      | 英語科教育   | 中等英語科教育法C I   | 第二言語習得理論、及び、これまでの様々な外国語教授法の理論と実践について学ぶ。具体的には、学習指導要領をふまえ、外国語教育(英語)の目標と小・中・高の連携の英語教育、第二言語習得理論からの示唆と応用、20世紀の言語教育の歴史の流れをたどり、過去に実践されてきた主な教授・指導法の理論的な側面を理解する。そして、それらの教授法を活用して、実際に日本の中学・高等学校で指導するために、教授法を活用した授業づくりを試みる。   |  |
|                                      |         | 中等英語科教育法C II  | 教育実習前の学生に、教育現場での実践力を身に付けることを目的とした内容で行う。グローバル社会における英語の役割、小・中・高等学校における学習指導要領の理解、各学校の授業観察、指導案の作成、指導の展開・工夫、教室管理等、充実した英語教育実習のために知っておきたい知識を身に付ける。また、実践指導力を習得するために指導者として身に付けておきたい英語コミュニケーション能力、教材研究、評価等についても学ぶ。さらに、小・中・高一貫の英語の授業やその役割等についても理解し、教育実習に活かせる総合的な力を習得する。   |  |
|                                      |         | 中等英語科教育法C III | 授業の到達目標は、教育実習を控え、授業で各領域を掘り下げて取り扱うことができるようにする。英語教育の理論と実践を見通した上で、最新の知見を踏まえ教育実践ができる素地を養うことを目的とする。授業の概要では、第二言語学習の概要を踏まえ、それらの理論と実践との関わりを掘り下げて学んでいく。言語習得理論では、母語を基礎として外国語習得、臨界期仮説、個人差と動機づけ、外国語学習のメカニズム、外国語を身に付ける、効果的な外国語学習を扱う。さらに教室学習での特徴を理解できるように学び、生徒同士、教師と生徒とのやり取りに着目できる機会を理論および実践で行う。さらに評価に関わり、試験作成での信頼性及び妥当性を実践に生かせる力を付ける。これらを踏まえて、模擬授業も行い英語コミュニケーション力の養成を進める。                       |  |

|                                      |         |                |  |  |
|--------------------------------------|---------|----------------|--|--|
| (専門教育科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(中等教科教育法科目) | (英語科教育) | 中等英語科教育法 C IV  | <p>中学校及び高等学校の学習指導要領解説に書かれている内容を、これまでの教科指導法で身に付けた理論を援用して、授業の中で具現化できるようにすることを目標とする。また、中高の英語教育の基盤となる小学校外国語活動及び外国語の概要についても学ぶ。</p> <p>具体的には、「英語科における学年目標」「単元目標」「本時の目標」を設定する力、「本時の目標」を達成することができる教材の開発及び作成の力、授業における指導力を、演習を通してそれぞれ身に付けていく。また、実際の学校現場で行われているテスト及び評価の方法についても演習を通して身に付けていく。最後に、英語科教育における理論と実践との往還について、学んだ内容や自身の模擬授業の省察から各自の考えをまとめ、各校種における教育現場で効果的な授業ができるようにする。</p> |  |
|                                      | 職業指導科教育 | 職業指導科教育法 C I   | <p>職業指導、キャリア教育の意義と歴史的経緯から現在の学校教育における職業指導についてキャリア教育と関連づけて検討する。また、我が国の教育理念とその具現化のために、社会的・職業的自立に向けた能力育成の方策として、キャリア発達の基礎理論及び発達段階に即した効果的指導、各教科、領域との関連、地域社会との連携について主に演習を通じて論議し理解を深める。授業は、論点の提示をもとに講義形式、アクティブ・ラーニング、演習など内容に応じてスタイルを変更し論議する。</p>   |  |
|                                      |         | 職業指導科教育法 C II  | <p>職業指導、キャリア教育の意義と歴史的経緯から現在の学校教育における職業指導についてキャリア教育と関連づけて検討する。また、我が国の教育理念とその具現化のために、社会的・職業的自立に向けた能力育成の方策として、キャリア発達の基礎理論及び発達段階に即した効果的指導、各教科、領域との関連、地域社会との連携について論議し理解を深める。授業は、論点の提示をもとに講義形式、アクティブ・ラーニング、演習など内容に応じてスタイルを変更し論議する。</p>   |  |
|                                      |         | 職業指導科教育法 C III | <p>雇用が流動化し、予測しづらい社会の中で生徒たちが生きていくために、どのような力を育てていくことが求められるのかを理解すると共に、教育課程の中で具体的にそれをどう指導していくのかについて、これまでに学習した理論や内容を踏まえて指導案を作成する力を育成する。また、指導案作成にあたっては、中学・高校(普通科)における指導の在り方だけではなく工業・商業高校などにおける取組も念頭に置きながら、地域社会と連携を図りながら職業指導を行っていく方策を議論していく。</p>  |  |
|                                      |         | 職業指導科教育法 C IV  | <p>産業や経済の構造的変化に伴って雇用形態が多様化・流動化する中、子どもの進路の不安定化と不透明化が急速に進行しつつあります。生徒にとって進路選択および進路先への適応は決して容易なものではなく、様々なリスクに直面することも少なくありません。現代の職業指導には、予期できない事態を乗り越えて自らの人生の可能性を拓き、キャリアを積極的に構築できる生徒を育成することが求められています。本講義では、職業指導の理論と方法について講義を通して学習した上で、アクティブ・ラーニング形式で職業指導に関する授業の計画・実践・評価・改善を行うことで、学校や生徒の状況をふまえた効果的な支援を展開できるようにします。</p>  |  |
|                                      | 情報科教育   | 情報科教育法 C I     | <p>本授業の到達目標は、(1)情報科の教育的な背景となる考え方について、学習指導要領から読み取ることができる、(2)情報科の各教育内容について、関連する学問領域と結びつけることができる、(3)教育的な背景と学問的な背景を踏まえ、各単元の教材研究に活用することができる、である。目標を達成するため、指導要領および指導要領解説を読み解きながら、目標や内容と指導上の留意点、学習評価の考え方、関連する学問領域を結びつける学習活動を行う。また情報科の各単元についてグループに分かれて教材研究を行い、教材研究の結果について発表・共有する。</p>  |  |
|                                      |         | 情報科教育法 C II    | <p>本授業の到達目標は、(1)基礎的な授業設計理論を理解し、学習目標の種類に基づいた授業設計や評価基準の作成ができる、(2)情報科の特性に応じた情報機器及び教材の効果的な活用法を理解し、具体的な授業場面を想定した指導案を作成することができる、(3)具体的な授業場面を想定した模擬授業を行い、振り返りを通して授業の改善ができる、である。目標を達成するため、情報科の授業実践事例や実践研究を調査・分析し、情報科の特性に応じた情報機器及び教材の活用法や、学習指導要領との対応等を理解する。また、基礎的な授業設計理論に基づき、授業実践例を参考に具体的な授業を想定した指導案を作成する。さらに、模擬授業を行い検討会を行い、授業改善を行う。</p>  |  |
|                                      | 地歴科教育   | 地歴科教育法 C I     | <p>高等学校学習指導要領(地理歴史科)における目標や育成を目指す資質・能力を理解し、学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして、様々な学習指導理論、学習指導案の書き方を学んだ後、模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第1～5回は学習指導要領、指導する上での留意点、評価、学問領域と学習内容の関係、課題解決型などの発展的内容について学びます。第6～9回は子どもの実態にあった授業作り、ICTの利用、学習指導案作成上の留意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい、第15回は模擬授業の振り返りを行い、よりよい授業作りについて考えていきます。</p>                                     |  |
|                                      | 公民科教育   | 公民科教育法 C I     | <p>高等学校学習指導要領(公民科)における目標や育成を目指す資質・能力を理解し、学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして、様々な学習指導理論、学習指導案の書き方を学んだ後、模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第1～5回は学習指導要領、指導する上での留意点、評価、学問領域と学習内容の関係、課題解決型などの発展的内容について学びます。第6～9回は子どもの実態にあった授業作り、ICTの利用、学習指導案作成上の留意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい、第15回は模擬授業の振り返りを行い、よりよい授業作りについて考えていきます。</p>                                       |  |

|                                      |          |  |  |  |
|--------------------------------------|----------|--|--|--|
| (中等教科教育法科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(専門教育科目) | 書道科教育    | 書道科教育法C I  | <p>高等学校における書道は、書写が国語科の中に位置づけられているのに対し、芸術科の中に位置づけられている。芸術科の目標はただ単に技術・技能の習得に終わるだけではなく、生涯にわたって芸術を愛好する心情を育て、芸術文化を理解し、豊かな感性を養うことにある。高等学校において書道を教えるようとする学生に対し、表現と鑑賞のそれぞれの分野における基礎的な知識・技能を身に付けながらも、より具体的な教材開発と指導方法についての専門性を養い、授業に対する実践力を獲得することを目標とする。具体的には、高等学校の教科書教材を取り上げ、教材研究の仕方や、学習指導案の書き方などについて具体的に指導する。授業を構想し、共同で検討することによってよりよい指導方法と実践について研究する。また指導者と生徒双方の視点から考えることでより実践的な指導能力を身に付けるとともに、指導方法の工夫と改善を試みる。</p> |  |
|                                      |          | 書道科教育法C II   | <p>小・中学校国語科書写と高等学校芸術科書道の違いと両者の関連について整理したうえで、書道の指導方法の在り方について学ぶとともに、授業実践力を養う。高等学校の教科書教材の中でも、日本書道の名筆を取り上げ、教材研究の仕方や、学習指導案の書き方などについて具体的に指導する。授業を構想し、共同で検討することによってよりよい指導方法と実践について研究する。また指導者と生徒双方の視点から考えることでより実践的な指導能力を身に付けるとともに、アクティブ・ラーニングやICT機器を利用した指導方法の工夫と改善を試みる。</p>  |  |
|                                      | 工業科教育    | 工業科教育法C I  | <p>本授業では、工業高校の現状及び教科工業の科目を俯瞰して、内容と取り扱いについて理解することに主眼を置く。専門高校としての工業高校の位置づけについてまず確認した上で、教科工業の科目について、機械系学科で主に設置する科目、電気系学科で主に設置する科目と、その他の科目に分類して、それぞれの内容を概観する。その上で、過去と現在の教科書を比較することで、工業科教育の変化をみる。また、科目「課題研究」について、取り組みの事例と評価について概説した後、現在公開されている事例と成果発表会について、ネット等を用いて調査し、発表と議論を行う検討会により、理解を深める。さらに、技術教育と工業教育及び工学教育との関係についてみた後、工業科における安全教育について理解する。</p>  |  |
|                                      |          | 工業科教育法C II   | <p>本授業では、学習指導要領に示される教科工業を学ぶ高校生の育成像、及び社会から求められている人材像を理解する。また具体的な教科工業の科目を選定の上、内容を深く理解し、模擬授業などを通して実践力を身に付ける。そのために、教科工業の授業科目を確認した上で、基礎的共通科目と各分野の科目に大別して、学習指導案と評価のための考え方を理解し、授業案を考え、模擬授業を行う。さらに、我が国の工業教育の現状と課題として、技術の高度化の視点、地域社会との連携の視点、国際的な視点について概説し、議論を通して理解を深める。</p>   |  |
|                                      | 養護に関する科目 | 衛生学・公衆衛生学  | <p>養護教諭養成課程1年生の専門科目(必修)として開講する。水や空気などの身近な環境や、化学的、物理的あるいは生物学的、さらには社会的環境など、人間を取り巻くさまざまな環境が健康に及ぼす影響について学ぶ(衛生学)。さらに、疾病の予防や健康の保持増進のための組織的取り組みを、特に日本で行われている施策(法律、行政、教育を含む)を中心に理解する(公衆衛生学)。今後健康関連の分野で活躍する学生にとっては必須の内容であり、この分野の基本知識の習得を目標とする。</p>  |  |
|                                      |          | 予防医学   | <p>養護教諭養成課程の専門科目(必修)として、主として感染症や生活習慣病の予防を中心に、現代日本における「健康管理」の現状と問題点を中心に講義と演習を行う。将来、養護教諭として学校現場で活躍する学生にとっては必須の内容であり、この分野の基本知識の習得を目標とする。主な講義内容は次の通りである。新感染症法と学校伝染病、結核、新型インフルエンザ、ウイルス性肝炎、その他の感染症の予防、予防接種、性感染症および食中毒、疫学調査とエビデンス、ヘルスプロモーションと健康増進活動、特定健康審査と学校職員の健康診断、循環器疾患の予防、がん予防など。</p>   |  |
|                                      |          | 学校保健(小児保健、学校安全を含む。)  | <p>・学校保健の意義、目的、内容などについて、児童・生徒・学生の健康問題と関連づけながら説明できる。(知識/理解)<br/> ・本講義で学習した内容とこれまでに自分が経験してきた学校保健活動を他の受講者と討議し、具体的な学校保健活動計画等を作成することができる。(思考/判断)<br/> 養育発達期にある幼児・児童・生徒・学生と教職員の健康の保持増進を図ることを目的とする学校保健について、保健教育と保健管理の両領域の円滑な運営を図るための保健組織活動の側面から理解を深める。<br/> ① 通常は講義形式で行うが、VTR等の教育媒体を活用する。<br/> ② 授業後は課題研究(レポート)を提出する。なお、課題研究は、講義の内容に基づいて設定するので、提出を義務づける。</p>  |  |
|                                      |          | 養護概説   | <p>養護教諭は、学校看護婦としてその始まりを見る教育職員であり、児童生徒の養護をつかさどる専門職である。それぞれの時代背景のなかでその職務内容は変化も見られるが、誕生から今日まで常に子どもたちの健やかな成長を願いその支援を続けてきた事実は揺るぎない。本講義では、養護教諭の歴史や現状を概観した1年次の「養護教諭論」をふまえて、固有の専門性を有する養護教諭の役割やその活動に対する基本的な理解をさらに深めていくことをねらいとする。</p>  |  |
|                                      | 健康相談     | <p>健康相談を支える心理学的技法を学ぶとともに、それらをロールプレイや模擬体験(ソーシャルスキルトレーニング、ストレスマネジメント、非言語的技法・コラージュ、心理アセスメント)を通して活用することで、養護教諭としての健康相談のあり方を考えることを目標とする。<br/> 健康相談活動に必要な知識の獲得と、それを活用する模擬体験の両側面から授業を展開する。模擬体験については、スクールカウンセラーの視点から学校で活用しやすいテーマと内容を取り上げて行っていく。</p> |  |  |

|                                     |              |   |  |
|-------------------------------------|--------------|---|--|
| (専門教育科目)<br>(専攻基礎科目群)<br>(養護に関する科目) | 養養学(食品学を含む。) | 1. 養護・栄養教諭として備えるべき栄養学に関わる基礎的な知識の習得、及び2. 基礎知識を基に実際の栄養指導に対する思考、判断能力を養うことを目的とする。<br>具体的内容としてはじめに基礎的な有機化学と細胞生物学を学び、人体の構造の中でも特に栄養と関連が深い消化器の構造、主な栄養素である糖質・脂質・タンパク質の化学的構造、体内での利用・機能、代謝・調節機構、微量栄養素であるビタミンおよびミネラルの人体にとっての必要性、代謝調節機構について学ぶ。また、栄養素ではないが水および食物繊維についても学ぶ。また、栄養素の観点から人のエネルギー代謝を学び、国民健康栄養調査に基づく日本人の食事摂取基準について解説を行う。  |  |
|                                     | 解剖生理学 I      | 将来、養護教諭として健康教育を行っていく上で、人体の解剖および生理機能を系統だって記憶し理解しておくことは非常に重要である。また、解剖学は医学の基礎であり、器官の解剖学的構造は、生理学的機能と密接に関連している。<br>【解剖生理学 I】では、細胞の構造、生命を維持するための機能(植物性機能)である、心・脈管系、呼吸器系、消化器系や腎・泌尿器系の解剖学的構造を把握し、それらと関連した機能を理解することを目標とする。   |  |
|                                     | 微生物学         | 1. 養護教諭として備えるべき感染症に関わる基礎的な知識の習得、及び2. 基礎知識を基に実際の感染症に対する思考、判断能力を養うことを目的とする。<br>講義形式で行う。また、授業毎に単元の理解が得られているかどうか確認する為に、簡単な小テストを実施する。<br>授業内容は微生物の分類、構造について、つぎに感染症の原因となる病原体に基づいて接触感染(性感染症含む)、呼吸器感染、経食道感染についてどのような感染症がどのような微生物によって引き起こされるのかを学ぶ。また消毒・滅菌法、化学療法、さらに基本的な免疫学(自然免疫、獲得免疫)について学ぶ。さらに、実務上必須の知識として感染症法および学校保健安全法についても解説する。  |  |
|                                     | 精神保健         | 養護教諭として必要な精神保健の基礎的な知識を体系的に獲得し、メンタルヘルスを支える援助者としての考え方を身に付ける。<br>各種の病気・障害(統合失調症圏の病気、躁うつ病圏の病気、神経症圏、パーソナリティ障害、発達障害、外因性精神病等)を中心とした精神保健に関わる諸知識を、治療者としてではなく、病気や障害を持つ者と関っていく可能性がある者(教師・スクールカウンセラー)の立場から必要なものは何かという点について、講義形式で授業を行っていく。積極的な参加と発言を求める。   |  |
|                                     | 看護学概論        | 養護教諭としての専門性を高めるために、基礎的学問として、看護の知識を習得する。<br>教科書に基づき、看護の構成要素について学習を深めるとともに、現在の関連する理論についても知ることができるよう、調べ学習を行うことをのぞむ。<br>各授業には、教科書に出てくる漢字および単語の意味等の小テストを行う。<br>また、看護理論についての学習を深めるため、冬休みには、看護理論家の理論書を読み、養護教諭の看護についてレポートをすること。<br>試験の日には、看護学概論のポートフォリオを提出すること。   |  |
|                                     | 看護実習 I       | 1. 知識/理解<br>養護教諭としての専門性を高めるために、看護を理解し、習得した技術を他者に説明できる。<br>2. 思考/判断<br>看護技術を用いる場面を考えながら、各技術を安全・安楽に用いるためのアセスメントができる。<br>3. 関心/意欲<br>養護教諭として看護技術を用いる際の自分の現在の到達度を把握し、安全・安楽に実施するための目標を持ち、技術習得に向けての意欲が示せる。<br>4. 技能/表現<br>安全・安楽に基づいた基礎看護技術の習得ができる。<br>5. その他<br>看護のポートフォリオを作成し、学習の成果を示すことができる。  |  |
|                                     | 臨床実習 I       | 学内外において学習した知識や技術を統合し、地域における保健医療福祉活動の実際を体験して養護教諭として必要な能力を養うことを目標とする。養護教諭を目指す学生としての視点を持ち、臨床実習を通して保健医療福祉機関とどのように関わる事ができるかを常に意識しながら実習をすすめる。養護教諭の役割・機能に関して考察をする。行動目標は以下である。<br>①保健医療福祉機関ではどのような活動が行われているのかを理解する。<br>②子どもの成長発達を踏まえ、学校における児童生徒の心身の訴えを多面的にとらえて疾病の早期発見と迅速かつ適切な対応といった保健活動に結びつけるために、養護教諭にできることは何か、何をなすべきかを考察する。<br>③そのためにはどのような知識と技術が必要か気づいて学習する。<br>④養護教諭として保健医療福祉機関とどのような連携をとる事ができるかを考察する。 |  |



|          |           |            |   |  |  |
|----------|-----------|------------|---|--|--|
| (専門教育科目) | (専攻基礎科目群) | (養護に関する科目) | 臨床実習Ⅱ   | <p>学内外において学習した知識や技術を統合し、さまざまな臨床場面における保健医療活動の実際を体験して養護教諭として必要な能力を養うことを目標とする。養護教諭を目指す学生としての視点を持ち、臨床実習を通して保健医療機関とどのように関わる事ができるかを常に意識しながら実習をすすめ、養護教諭の役割・機能に関して考察をする。行動目標は以下である。</p> <p>①保健医療機関ではどのような保健医療活動が行われているのかを理解する。</p> <p>②学校における児童生徒の心身の訴えをいろいろな疾病の早期発見と迅速かつ適切な対応といった保健活動に結びつけるために、養護教諭にできることは何か、何をなすべきかを考察する。</p> <p>③そのためにはどのような知識と技術が必要かについて学習する。</p> <p>④養護教諭として保健医療機関とどのような連携をとる事ができるかを考察する。</p> |  |
|          |           |            | 救急処置  | <p>傷病者をすみやかに救助し、正しい応急手当をして、医師や救急隊員、保護者などに渡すまでの救命処置と応急手当の具体的な方法を学び技術を習得する。さらにけがや疾病の発生を未然に防ぐための対策について養護教諭の視点で創意工夫ができることを目標とする。</p> <p>一般的な救急蘇生法（一次救命処置および応急手当：ファーストエイド）の理論について解説し、また実習を通して具体的な技術を習得させる。さらに学校における救急処置の在り方を踏まえた上で養護教諭として必要な能力を身に付けさせる。</p>   |  |
|          |           |            | 診断学Ⅰ  | <p>養護教諭として、児童生徒の健康管理・健康教育を行っていくためには、疾患全般についての幅広い知識を持っていることが必要である。本授業では、学校現場で遭遇し得る児童生徒の内科系疾患（血液・造血器疾患、呼吸器疾患、消化管・消化器疾患、代謝・栄養疾患、神経・筋疾患等）に対して適切に対応できるようになること、生活習慣病等の予防につながるような健康教育が効果的にいえるようになることを目標とする。</p>   |  |
|          |           |            | 専攻科目群   | 幼児教育専攻科目   |  |
|          |           |            | 幼児期の教育理念と教育の基本について学ぶことを目標とする。具体的には、現在の幼児教育の目的・目標、法令・制度、保育内容、方法等とその考え方を理解するために、明治期以来の日本の幼児教育制度や思想の変遷を学び、日本として目指してきた方向性やその背景を学修する。合わせて、日本の保育に影響を及ぼしたフレーベルをはじめとする欧州の幼児教育・保育の思想や実践も適宜取り上げる。後半は現在の幼稚園教育要領等の内容について取り上げ、現代の保育実践状況や子ども・子育てをめぐる社会的課題などにも触れながら、幼児の特性を踏まえた今後の幼児教育のあり方について考究する。 |  |  |
|          |           |            | 前半では、保育事例の検討を通して保育実践力の向上を図る。保育事例は、実習で経験した内容をエピソード記録として取り上げて一人ずつ発表し、子どもの心情や遊びの状況、保育者の援助や環境構成等の観点から検討し、子ども理解・遊び理解を深め、より良い保育実践方法について学び合う。後半では、保育制度や保育の質の向上と評価の問題など、乳幼児や幼児教育・保育に関わる諸課題や、海外の保育の動向について各自でレポートして発表し、議論を通して今後の幼児教育の目指すべき方向性や改善方法等について考究する。                                  |  |  |
|          |           |            | 乳幼児の心身の発達における基本的な知識について、心理学的及び保育学的視点から身に付け、乳幼児に対する理解を深める。第一に、胎内から始まる心身の発達過程について学ぶ。具体的には、言語・認知・知能等の発達や、親子関係を基盤とする子ども同士の仲間関係の発達等を知る。第二に、出生直後の新生児及び保護者と、社会との繋がりの実相や、現代の乳幼児とその家族を取り巻く様々な社会的・教育的課題を知り、具体的な対応方法等について学ぶ。   |  |  |
|          |           |            | 乳幼児の心身の発達に関する、心理学的及び保育学的視点からの基本的な知識を基に、乳幼児における人と関わる力の育ちと、その支援方法を含む専門的事項について理解を深める。脳機能及び情緒の発達や性格及び社会的役割等の発達過程の学びから、子どもの育ちを総合的に捉える視点を身に付けることを目指す。また、今日的課題としての発達障害に関する基本的な理解と具体的な対応及び支援の方法について考え、発達障害幼児が有する日常生活における困難感等について理解を深める。   |  |  |
|          |           |            | 子どもが最初に出会う社会は家庭である。子どもは、まず、家庭において人間関係の基礎を学ぶと考えられる。そこで、子どもを取り巻く状況を時代背景を含めて理解すると共に、現代社会における家族の定義や意義、またその機能について学び、子どもの心身の健康を育む場としての家庭と養育者の役割について知識を深める。さらに、支援を必要とする家庭における養育力の向上を支援するための保育者としての専門性の学びを深め、具体的な方法を身に付けることを目指す。  |  |  |
|          |           |            | 現代社会における社会福祉の意義と歴史の変遷及び社会福祉における子ども家庭支援の視点について理解する。社会福祉の制度や実施体系について理解する。社会福祉における相談援助について理解する。社会福祉における利用者の保護に関わる仕組みについて理解する。社会福祉の動向と課題について理解する。具体的には、社会福祉の理念と歴史の変遷、社会福祉の制度と法体系、社会福祉行政と実施機関、社会福祉施設、社会福祉の専門職、社会保障及び関連制度の概要、相談援助の理論、相談援助の意義と機能、相談援助の対象と過程、相談援助の方法と技術、情報提供と第三者評価を内容とする。   |  |  |

|                     |            |           |  |  |
|---------------------|------------|-----------|--|--|
| (専攻科目群)<br>(専門教育科目) | (幼児教育専攻科目) | 子ども家庭福祉   | 現代社会における子ども家庭福祉の意義と歴史の変遷について理解する。子どもの人権擁護について理解する。子ども家庭福祉の制度や実施体系について理解する。子ども家庭福祉の現状と課題について理解する。子ども家庭福祉の動向と展望について理解する。具体的には、子ども家庭福祉の理念、子ども家庭福祉の歴史の変遷、現代社会と子ども家庭福祉、子どもの人権擁護の歴史の変遷、児童の権利に関する条約、子ども家庭福祉の制度と法体系、子ども家庭福祉の実施体系、児童福祉施設、子ども家庭福祉の専門職、多様な保育ニーズへの対応、子ども虐待・DV、障害児、非行少年、貧困家庭、外国籍の子どもへの対応を内容とする。                                       |  |
|                     |            | 社会的養護     | 現代社会における社会的養護の意義と歴史の変遷について理解する。子どもの人権擁護をふまえた社会的養護の基本について理解する。社会的養護の制度や実施体系について理解する。社会的養護の対象や形態、関係する専門職について理解する。社会的養護の現状と課題について理解する。具体的には、社会的養護の理念、社会的養護の歴史の変遷、子どもの人権擁護と社会的養護、社会的養護の基本原則、社会的養護における保育士の倫理と責務、社会的養護の制度と法体系、社会的養護の対象、家庭養護と施設養護、社会的養護に関わる専門職、社会的養護に関する社会的状況、施設の運営管理を内容とする。  |  |
|                     |            | 社会的養護内容   | 子どもの理解をふまえた社会的養護の基礎的な内容について理解する。施設養護及び家庭養護の実際について理解する。社会的養護における計画・記録・自己評価の実際について理解する。社会的養護における子ども虐待の防止と家庭支援について理解する。具体的には、社会的養護における子ども理解、日常生活支援、治療的支援、自立支援、施設養護の生活特性及び実際、家庭養護の生活特性及び実際、アセスメントと個別支援計画の作成、記録及び自己評価、保育の専門性に関わる知識・技術とその実践、社会的養護に関わる相談援助の知識とその実践を内容とする。   |  |
|                     |            | 子ども家庭支援論  | 保育士の専門性として必要とされる、子ども家庭支援に関する基本的知識と態度について学ぶ。また、現代における家族が置かれている様々な現状と課題を理解し、保育のみならず、個別の家族を支援する立場に就く者としての意識を高めることを目標とする。特に、保育において必要とされるカウンセリングマインドの理念と実際を学ぶことに主眼を置き、講義と演習を組み合わせ理解を深め、総合的に家庭支援の方法について学ぶことを目指す。   |  |
|                     |            | 子育て支援     | 保育士の行う保育の専門性を背景とした保護者に対する相談、助言、情報提供、行動見本の提示の支援について、その特性と展開を具体的に理解する。保育士の行う子育て支援について、様々な場や対象に即した支援の内容と方法及び技術を、実践事例を通して具体的に理解する。具体的には、子どもの保育とともに行う保護者の支援、日常的・継続的な関わりを通じた保護者との相互理解と信頼関係の形成、保護者や家庭の抱える支援のニーズへの気づきと多面的な理解、子ども・保護者が多様な他者と関わる機会や場の提供、子ども及び保護者の状態の把握、支援の計画と環境の構成、支援の実践・記録・評価・カンファレンス、職員間や関係機関との連携・協働、多様な支援ニーズを抱える家庭に対する支援を内容とする。 |  |
|                     |            | 子どもの保健    | 子どもの心身の健康増進を図る保健活動の意義の理解をもとに、子どもの身体的な発育・発達と保健、心身の健康状態とその把握、子どもの疾病とその予防法及び他職種間の連携・協働の下の適切な対応についての知識や技能を習得する。具体的には、子どもの保健の意義を説明できる、母子保健(生命の誕生、胎児期、出生)について理解し子どもの健康を母子保健から説明できる、人体の生理機能について理解し乳幼児の発育の特徴を説明できる、子どもの生理機能、運動機能の発達について説明できる、子どもの認知機能、人格形成(社会性の獲得)について説明できる、子どもの健康観察の重要性を保育者の視点から説明できる、ことを到達目標とする。                               |  |
|                     |            | 子どもの健康と安全 | 保育における保健的観点を踏まえた保育環境や援助について理解するとともに、関連するガイドラインやデータ等を踏まえ、保育における衛生管理・事故防止及び安全対策・危機管理・災害対策、また子どもの体調不良等に対する適切な対応、保育における感染症対策について具体的に理解する。さらに保育における保健的対応の基本的な考え方を踏まえ、関連するガイドラインや近年のデータ等に基づく、子どもの発達や状態等に即した適切な対応、子どもの健康及び安全の管理に関わる組織的取り組みや保健活動の計画及び評価等についての知識や技能を習得する。理論的事項を把握し、能動的な学修への参加を通して、理論や知識の定着、理論と実践の結合を目指す。                          |  |
|                     |            | 子どもの食と栄養  | 乳幼児における心身の発育・発達過程を理解し、それぞれの時期における特性に対する科学的な知識を習得し、離乳期からの適切な食事支援の方法などを身に付ける。時代的背景を踏まえて、子どもたちの生活における問題点を取り上げ、栄養状態を評価する方法や食生活の重要性を知るとともに、食育の重要性について理解を深める。保育者として子どもの精神的な満足や個々の体質に配慮した食生活の支援、子どもの食を想定した食材の選択・献立作成・調理方法・衛生管理、食育の基本とその内容及び食育のための環境に対する知識や技能を習得する。  |  |
|                     |            | 乳児保育 I    | 乳児保育の意義・目的と歴史の変遷及び役割等、保育所、乳児院等の多様な保育の場における乳児保育の現状と課題、3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育の内容と運営体制、乳児保育における職員間の連携・協働及び保護者や地域の関係機関との連携についての知識を習得する。また、現代における乳児保育の社会的意義を知り、保育士の役割、乳児保育を担当する保育者として必要な知識・技能の習得、乳児期の子どもと子どもの発達や子どもの姿、発達過程に応じた保育士の適切な対応や援助方法について理解を深める。   |  |

|                     |            |              |   |  |
|---------------------|------------|--------------|---|--|
| (専攻科目群)<br>(専門教育科目) | (幼児教育専攻科目) | 乳児保育Ⅱ        | <p>3歳未満児の子どもに対する発育・発達過程や特性を踏まえた援助や関わりの方、養護及び教育の一体性を踏まえた生活や遊びと保育の方法及び環境、保育所保育指針にある子どもの心身の健康・安全と情緒の安定を図るための配慮についての理解をもとに、乳児保育における長期的、短期的指導計画および個別、集団の指導計画の作成についての知識や技能を実践的に習得する。また、乳児保育における保護者との連携、乳児保育の場である乳児院、家庭的保育、子育て支援施設における現状と課題についても理解する。</p>  |  |
|                     |            | 障害児保育        | <p>障害児保育を支える理念や歴史の変遷について理解する。個々の特性や心身の発達に応じた援助や配慮について理解する。障害児その他特別な配慮を要する子どもの保育における計画の作成や援助の具体的な方法について理解する。家庭への支援や関係機関との連携・協働について理解する。具体的には、障害の概念と障害児保育の歴史の変遷、障害児のインクルージョン及び合理的配慮を理解する。障害児保育の基本を理解する。肢体不自由児、知的障害児、視覚障害児・聴覚障害児・言語障害児、発達障害児（ADHD、PDD）、重症心身障害児、その他特別な配慮を要する子どもの理解と援助、個別の支援計画の作成、個々の発達を促す生活や遊びの環境、子ども同士の関わりと育ち合いを内容とする。</p>                 |  |
|                     |            | 児童文化         | <p>児童文化という概念について、その考え方の背景や歴史的な変遷について現在から遡っていかたちで辿っていくとともに、その時々々の概念の中身について深く学んでいく。また一方では、児童のための文化創造、文化財、文化施設、さらには児童自身の文化的創造活動を含めた内容についても、その理論と実践を踏まえながら学んでいく。さらに、児童文化財とも呼ばれる絵本、児童文学、唱歌、詩歌、紙芝居、児童劇などについても個々の内容について理解を深めていく。</p>   |  |
|                     |            | 保育内容の理解と方法AⅠ | <p>領域&lt;健康&gt;&lt;表現&gt;の内容を理解したうえで、「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置き、保育者に必要とされる基本的な身体動作及び身体表現能を培うとともに、乳幼児を対象とした身体活動・運動遊び、身体表現活動の内容や方法について、発達過程を含めた子ども理解を深めながら実践的な教材研究を通して知識と技能を習得する。身体意識、模倣、リズムダンス体操、イメージと動きの相互作用などをテーマに、理論と実践を往還させ、主として身体表現、身体を使った遊びに関わる保育を展開できる技能を培う。</p>  |  |
|                     |            | 保育内容の理解と方法BⅠ | <p>領域表現の内容を理解し、保育現場において行われる乳幼児を対象とした音楽活動・音楽表現活動の基礎的な理論について学ぶ。また、保育において実践的な音楽表現活動を通して子どもの感性・創造性・想像力を豊かに育むために必要な音楽表現能力を養うことを目的とし、演奏技術および音楽基礎知識、表現遊び等を学ぶ。また、ピアノ演奏や幼児曲の弾き歌いを通して読譜力、ソルフェージュ能力を高めるとともに、理論と実践の融合を目指す。</p>  |  |
|                     |            | 保育内容の理解と方法CⅠ | <p>領域&lt;表現&gt;の内容のうち、特に造形表現に関する部分を理解するために、「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置き、保育者に必要とされる造形表現に関する基本的な内容を理解し学ぶとともに造形表現能を培う。さらに乳幼児を対象とした造形表現活動の内容、造形素材に関する知識、造形用具の使用法、造形表現のための環境やその整え方について、発達過程を含めた子ども理解を深めながら実践的な教材研究を通して知識と技能を習得することを目指す。</p>  |  |
|                     |            | 保育内容の理解と方法DⅠ | <p>領域表現について理解した上で、ミュージカルや劇を創作し、子どもの前で演じることを経験する。仲間と伝えあい、自身で表現することを感じ、どのようにすると幼児に表現の喜びが伝わるかについて考えることによって、表現技術および能力の向上を目指す。また、子どもたちの前で表現する実習を通じて、劇表現活動が子どもの育ちに与える影響・効果を理解し、幼児理解を深める。劇創作の過程を理解し、保育において子どもの劇遊びなどの指導法について体験を通して学ぶ。</p>   |  |
|                     |            | 保育内容の理解と方法BⅡ | <p>領域表現の内容を理解し、保育において行われる様々な音楽表現活動における、歌唱や楽器遊び、劇遊び等の指導に必要な知識および技能として、アンサンブルや合唱など様々な形態による音楽活動について学ぶ。具体的には発声法・指揮法・編曲法・歌唱および楽器指導法等の基礎を身に付け、それらを保育において効果的に活用し、子どもの感性・創造性・想像力の育成およびコミュニケーション能力を高めるための視点について理解することを目指す。</p>   |  |
|                     |            | 幼児教育研究法      | <p>日本、諸外国の幼児教育に関する諸現象を実証的に研究する方法を学ぶとともに、研究論文の基本的な構造や執筆に関する基礎知識を学ぶ。国内外の学会や学会誌などで発表された幼児教育に関する最近の研究論文や、これまでに行われてきた幼児教育の卒業論文や紀要論文などの中から方法的にできるだけ多様なものを取り上げ、研究方法という観点から検討を行う。それぞれの学生が自己の関心に合わせて担当する論文を選択し、読み、その内容や問題点を他の生の前で発表し、その後討議をする。研究論文を批判的に読む力としての課題抽出力を養う。次いで卒業研究に向けて、自らの掲げたテーマに基づき、先行研究の検討、研究計画の精選、予備実験・実践を通して研究という視点から幼児教育・保育、その周辺社会への関心を深める。</p> |  |

|   |                 |  |   |  |
|---|-----------------|--|---|--|
| (専攻科目群)<br>(専門教育科目)<br>義務教育専攻科目<br>学校教育科学 | (幼児教育)<br>専攻科目) | 幼児教育研究実践   | <p>幼児教育に関する特定のテーマについて、オリジナルなデータを収集、分析考察を行い、卒業研究として執筆しまとめる過程を経験する。それを通して、自主的な研究の進め方、論理的思考、学術的研究法、データの分析法、論理的な論文執筆、効果的なプレゼンテーションの技法などを学ぶ。到達目標として、研究テーマの目的を社会的背景や既往の研究と関連付けて理解できる、研究目的に沿って実験を遂行し、その結果を観察・記録し、実験ノートに整理できる、得られたデータから導かれる解釈を正しく理解できる、成果を取りまとめ、論理的に文章で記述できる、成果を口頭で発表し、討論において的確に受け答えができることを目指す。</p> |  |
|   | 教育学基礎実習 I       | <p>この授業では、教育学に関する文献等を講読することとおして、大学生に求められる基本的な力の習得を目的とする。具体的には、次の五つである。①文献や論文等を集める力、②文献や論文等を読む力、③レジュメなどにまとめる力、④自らの意見をまとめ、発表する力、⑤多様な意見や立場を理解し討論する力。講読する図書は年度によって異なるが、教育学の入門的なテキストを選択する。授業では課題図書やレジュメにまとめ、2名1組などのグループで発表・司会・討論などを進行する。</p>  |   |  |
|   | 教育学概論 I         | <p>この授業では、教育学における多様な専門領域について、それぞれの具体的な研究テーマや研究方法の概略を理解することを目標とする。受講生には、専門的な教育学研究に向けて問題意識を深めるとともに、授業を通じて、自身の研究領域や研究テーマを明確化していくことが求められる。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(24 山口 匡/4回)<br/>教育哲学について論じる。</p> <p>(99 竹川慎哉/4回)<br/>カリキュラム論について論じる。</p> <p>(23 野平 慎二/4回)<br/>教育思想論について論じる。</p> <p>(101 釜田 史/3回)<br/>教育史について論じる。</p>                        | オムニバス方式   |  |
|   | 教育学概論 II        | <p>この授業では、教育学における多様な専門領域について、それぞれの具体的な研究テーマや研究方法の概略を理解することを目標とする。受講生には、専門的な教育学研究に向けて問題意識を深めるとともに、授業を通じて、自身の研究領域や研究テーマを明確化していくことが求められる。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(101 釜田 史/3回)<br/>教育史について論じる。</p> <p>(98 片山 悠樹/4回)<br/>教育社会学について論じる。</p> <p>(92 田久保 清志/4回)<br/>生活指導論について論じる。</p> <p>(94 趙 卿我/4回)<br/>教育方法学について論じる。</p>                       | オムニバス方式   |  |
|   | 教育学基礎実習 II      | <p>この授業では、教育学を学ぶ上で必要不可欠な基礎的な力を習得することを目的とする。具体的には、次の五つである。①テーマ(問い)を考え、選択する力、②文献や論文等を収集する力、③文献や論文等を読み込む力、④レジュメを作成し、発表し、討論する力、⑤自らテーマを選択し、関連する文献等を集め、読み、レポートとしてまとめることができる力。授業の前半部分では教育学の調査・研究方法等に関わる文献等について検討し、後半部分では各自設定したテーマの報告会やレポートの作成に取り組む。</p>   |   |  |
|   | 教育学特別研究         | <p>この授業では、学生の興味・関心によりテーマごとに文献の講読や授業実践にふれること、調査の実施等を通して、学生自身の解釈についてレジュメ発表やディスカッションを通して理解を深めることを目標とする。本授業は、実際の授業実践の観察や調査を含むことから集中にて開講をする。具体的なテーマについては、教育哲学・教育思想に関する重要事項、重要人物についての担当範囲を要約し討論を行うことや、授業研究とカリキュラム研究の関係について先進的な授業実践を展開する教室を実際に参観し、授業を記録し、ディスカッションするなかで、授業の多層的な構造の理解を行うこと、大学史に関して史料群を活用し、大学の歴史に関わるポスターなどの作成・展示にグループ別で取り組むことなどがあげられる。</p> |   |  |
|   | 教育哲学演習 I        | <p>教育哲学・教育思想論に関する基礎的な文献・研究論文等の講読および演習をおして、教育哲学・教育思想研究の主要なテーマと方法論について理解を深めることを目標とする。授業はテキスト(年度によって異なる)の基本的な理解と解説のあと、互いの質疑応答、ディスカッションによって進められる。1回に定められた範囲を担当者が要約し(レジュメを用意)、討論を行う。受講生には、全員が各回のテキストを熟読のうえ、各自の疑問点、問題意識をもちよってもらう。</p>  |   |  |

|                                   |   |             |   |  |
|-----------------------------------|---|-------------|---|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | (学校教育科学)  | 教育思想論演習 I   | 教育思想論, ならびにそれに関連する教育哲学の専門文献を講読することを通して, 代表的な教育思想ならびに教育哲学の諸理論と諸概念について理解を深める。教育思想に対して批判的に再検討できるようになるとともに, 教育哲学の知見を踏まえて現代の教育に対する専門的見解を述べることができるようになることを目標とする。授業では特に, 西洋の古代から近代にかけての教育思想, 西洋近代以降の教育哲学の諸理論と諸概念を主な内容として取り上げる。   |  |
|                                   |   | カリキュラム論演習 I | 本演習では, 現代のカリキュラム理論の系譜について, 代表的な文献の講読, レジュメ発表, ディスカッションを通して理解することを目的とする。具体的には, 哲学・思想的アプローチ, 授業研究アプローチ, 政治学的アプローチ, 評価論からのアプローチを取り上げる。また, 国際的な研究・実践動向についての理解を図るため, 外国語文献も一部講読しながら, 世界的な潮流の中で日本のカリキュラム政策・理論・実践の特質や課題点を理解していく。   |  |
|                                   |   | 教育方法学演習 I   | 本講義では, 教育方法学に関する実践的な理論を学び, 学校の授業はどうあるべきかなどについて基礎的な理論と具体的な教育方法(情報機器および教材の活用方法等)を理解することを目指す。具体的には, 次の3つを主な内容として取り上げる。1. 教育方法とは何か, 教育課程の編成に関する基本的な理論と具体的な教育方法, 2. 日本における教育方法の史的変遷(第二次世界大戦後を中心に), 3. 日本における教育方法の課題と教育改善に関する近年の動向  |  |
|                                   |   | 生活指導論演習 I   | 生活指導とは, 主に学校の教科外領域において, いわゆる生徒指導・進路指導・特別活動などを含む, より広範な内容と方法を持つ教育学の実践的概念である。近年では地域や家庭の状況も視野にいれ, 福祉や医療や司法にも及ぶ様々な実践が展開されている。本演習では, 過去の歴史的遺産に学びつつ, 現代の学校教師の実践を取り上げ, 実践記録の分析を中心にして, 指導のあり方を検討する。   |  |
|                                   |   | 教育社会学演習 I   | 本演習の目的は, 社会学・教育社会学の文献を読み, 教育現象を自身の経験を相対化しながら冷静に分析できる態度を身に付けることである。教育現象を「思い込み」や自身の経験のみで語るのではなく, 「根拠は何であるのか?」, 「妥当なように感じる見解はいかにつくられたのか?」といったクリティカルな思考を働かせ, 自身の言葉でアウトプットできることを目指す。また, これらを通じて, 教育の多様なあり方を認める態度を身に付けてほしい。   |  |
|                                   |   | 教育史演習 I     | この授業では, 日本の教育の歴史的変遷について通史的に理解することを目指す。具体的には, 山田恵吾編著『日本の教育文化史を学ぶー時代・生活・学校ー』(ミネルヴァ書房)などに代表される日本教育史の入門的テキストを講読し, 古代から現代に至るまでの日本の教育の歴史に関する基礎的知識の習得を目指す。また, 適宜受講者の興味・関心に応じて, 愛知県内あるいは近隣地域に残されている貴重な史料群や建築物等の視察見学を実施し, 演習を通して習得した知識を深める。                                  |  |
|                                   |   | 教育行政学演習 I   | この授業では, 国内外の教育行政学に関する代表的な先行研究等を選択し, 共同での報告・検討を行う。また, 受講生が関心のある研究テーマを選択し, 関連する代表的な文献や論文等を収集し, それをレジュメにまとめて報告, 他の受講生等もあわせてディスカッションを通して理解することを目的とする。授業で取り扱う研究テーマや課題図書等は, その年度によって異なるが, 教育行政学(場合によっては教育経営学や教育財政等も含む)に関する基本的な入門テキストを選択する。                                |  |
|                                   |   | 教育哲学演習 II   | 教育事象に関する哲学的反省の歴史, 展開, 主要テーマ, 今日的課題についての理解を深めることを目標とする。教育哲学・教育思想論に関する研究文献(年度によって異なる)の講読をとおして, 次の4つの項目に沿って考察を行う。①教育というコミュニケーション領域の特性, ②教育に対する哲学的反省のはじまりとその後の展開, ③論じられてきた主要なテーマ(それらの成果と問題点), ④今後取り組まれるべき研究課題。とくに, ③, ④の項目に力点を置いた演習を行う。                                 |  |
|                                   |   | 教育思想論演習 II  | 教育思想論, ならびにそれに関連する教育哲学の理論や主題についての探究的学修と共同での検討を行う。受講生は各自, 関心のある理論や主題をひとつ選定し, その主題に関する先行研究の調査, 分析と検討, 報告を行い, その報告について全員で検討する, という形で進める。授業を通して, 教育思想論, 教育哲学に対する理解を深めるとともに, 探究すべき課題の発見, 課題に関わる文献や資料の調査, 分析と考察, まとめで報告, 共同での議論と検討, という課題探究, 課題解決に関わる一連の能力を身に付けることを目標とする。 |  |
| カリキュラム論演習 II                      | 本演習では, 教育課程概念と類型論, 教育課程編成の基本原則など教育課程研究における基本概念と基本問題を理解した上で, 教育課程の現代的諸問題の考察へと展開していく。具体的には, 21世紀型能力論, アクティブ・ラーニング, カリキュラム・マネジメントなどを検討していく。基本概念および現状の課題を整理した上で, 次に幼児, 児童及び生徒や学校・地域の実態を踏まえて教育課程や指導計画を検討する手法について, 国内外の教育実践事例を分析しながら考察していく。これらの授業展開において, 受講者は, 文献の講読とプレゼンテーション, 発表を踏まえた討論を行う。 |             |   |  |

|                                   |            |   |  |
|-----------------------------------|------------|---|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | 教育方法学演習Ⅱ   | 本講義では、教育方法・教授法の歴史、学習指導論、教育課程論、教育評価論等の観点から、実際に教育実践を行うために必要となる教育方法学について理論と方法を理解するとともに、その内容についての自分なりの考えを深めるための機会を提供する。具体的には、次の3つを主な内容として取り上げる。1. 教育課程の編成に関する理論と具体的な方法、2. 諸外国における教育方法の変遷や近年の動向、3. 諸外国における教育評価の変遷と課題   |  |
|                                   | 生活指導論演習Ⅱ   | 前期・生活指導論演習Ⅰを発展させて、受講学生が自分自身の問題意識に基づいて研究テーマを設定し、研究の方法と内容について演習で深めながら、毎回受講生による研究報告を行ない、全員での討議・検討によって生活指導に関する研究の初歩を習得することを旨とする。  |  |
|                                   | 教育社会学演習Ⅱ   | 本演習の目的は、社会学・教育社会学の理論や知見を学ぶことを通じて、教育現象を多角的にアプローチし、分析できるスキルを身に付けることである。「教育社会学演習Ⅰ」の成果を土台に、教育現象におけるさまざまなトピックを社会的に考え、社会的・歴史的文脈に位置づけて理解すること、教育現象の背後にある要因を自身の言葉で説明できることを目指す。また、これらを通じて、教育の多様なあり方を認める態度を身に付けてほしい。   |  |
|                                   | 教育史演習Ⅱ     | この授業では、教育史の代表的な文献や史料を読み取る作業をおおして、教育史の知識や技術の習得を目指す。授業の前半部分では、近現代日本における教員養成史（教育学部史）や教師像の変遷等について、TEES研究会編著『「大学における教員養成」の歴史的研究』（学文社）や土屋基規『戦後日本教員養成の歴史的研究』（風間書房）などの代表的な研究成果を講読し、教師の養成・採用・研修の一連の流れについて歴史的に理解する。授業の後半では、受講生各自で研究テーマを選択し、そのテーマに関連する先行研究の調査と分析、報告を検討する作業を継続し、歴史的な視点から考察するために必要な力の習得を目指す。 |  |
|                                   | 教育総合演習Ⅰ    | この授業では、卒業論文の執筆に向けて、学生が興味・関心のある教育学の領域（教育哲学、教育思想論、カリキュラム論、教育方法学、生活指導論、教育社会学、教育史）を選択し、その領域で求められる研究方法等を習得することを主な目的としている。具体的には、受講者自身が研究テーマを選択し、その研究テーマに関連する先行研究やデータを収集・整理・分析し、あるいは必要に応じて調査等を行い分析する。領域によって研究方法は異なるが、課題図書やフィールドワーク、史料調査等を通してそれぞれの研究方法の習得を目指す。  |  |
|                                   | 教育総合演習Ⅱ    | この授業では、前期に開講される「教育総合演習Ⅰ」の成果をふまえて、卒業論文の執筆に向けて、学生が興味・関心のある教育学の領域（教育哲学、教育思想論、カリキュラム論、教育方法学、生活指導論、教育社会学、教育史）を選択し、その領域で求められる研究方法等を習得することを目的としている。具体的には、受講者自身が研究テーマを選択し、その研究テーマに関連する先行研究やデータを収集・整理・分析し、あるいは必要に応じて調査等を行い分析する。領域によって研究方法は異なるが、課題図書やフィールドワーク、史料調査等を通してそれぞれの研究方法の習得を目指す。                  |  |
|                                   | 心理学方法論A    | 本授業では、心理学に関する論文を読み、まとめ、発表し、討論する。これを通じて、心理学に関する論文の読み方や、プレゼンテーションの基本等を理解する。また、心理学における実験法や観察法に関する実習を行い、人間の行動に関するデータを収集し、これを整理し、レポートにまとめる。また、レポートに関しては複数回の添削を行い、フィードバックする。これを通して、科学的な実証の方法や、論理的な文章の書き方について理解する。   |  |
|                                   | 心理学方法論B    | 心理学では、実験法、質問紙法、観察法といった方法でデータを収集し、客観的な根拠をもとに人間の心理について検討する。本授業では、このような心理学の調査手法についての代表的な例を紹介し、その調査手法について、体験を通して学ぶことを目的とする。具体的には、質問紙法の調査手法を学び、質問紙調査および結果の統計処理を行うための基礎的な知識・態度を身に付ける。また、この中で、プレゼンテーションの仕方、学術論文の読み方、書き方についても同時に学ぶ。   |  |
|                                   | 心理学教育統計学実習 | 本授業では、心理統計の基本的な考え方を理解するとともに、調査法や実験法、卒業論文で収集するデータを統計ソフトを用いて統計的に分析し、レポートを作成できることを目標とする。具体的には、質的データと量的データの記述統計（平均値、中央値、分散、標準偏差、尖度、歪度など）や統計的検定の仕方（ $\chi^2$ 検定、無相関検定、t検定、分散分析など）とその結果の記述の仕方について、SPSSという統計ソフトを用いて、実習形式で学習する。   |  |
|                                   | 心理教育アセスメント | 幼児～成人期までの心理および教育におけるアセスメントについての基礎的理論を学ぶとともに、心理検査の実習や事例検討を通して、児童理解や発達支援に必要な知識を習得する。心理検査の活用の実際とその意義について理解し、実践に必要な知識や技能を獲得することを目標とする。心理アセスメントや検査法に関する講義のほか、受講生による購読担当発表をもとに、グループワークでの心理検査の実習やディスカッションを行う。グループワークは、教育現場での実践を想定して、仮想事例を用いて、児のアセスメントおよび支援例をチームで検討する練習をする機会となるように行う。                   |  |

|                                 |          |             |   |         |
|---------------------------------|----------|-------------|---|---------|
| (専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(義務教育専攻科目) | (学校教育科学) | 発達心理学講義     | 発達心理学は、時間経過（加齢）によって生じる人間の発達の変化を研究する心理学の一分野である。つまり、「乳児期」から「老年期」までの加齢による人間の一生の変化過程を理解する学問である。本授業では、その発達心理学の基本的な事項を理解することを目的とする。具体的には、①生まれてから死ぬまでの心理的な機能の発達（胎児期・新生児期・乳児期・幼児期・児童期・青年期・成人期・老年期）、②各発達段階における心理的な問題や障がい、③学校における発達援助（学校心理学の理論と実践）、について理解を深めることを目指す。  |         |
|                                 |          | 発達心理学演習     | この演習では、発達心理学の知見を研究の成果だけから理解するのではなく、研究の目的・方法・結果・考察の全体を通して、より深く学ぶことを目的とする。この学習を通して、発達心理学の研究がどのように子どもの発達を明らかにしていくのか、教育活動にどのように貢献しているのかについての理解も深める。また、文献をまとめて資料を作成し、発表・討論を行うことで、研究について他者に伝える力や、批判的・建設的な討論を行う力を養うことも目指す。   |         |
|                                 |          | 学習心理学講義     | 本授業では、児童生徒の学習に関する基礎理論とそれを応用した実践的問題について学ぶ。具体的には、記憶や思考に関する学習者の認知的過程について理解し、これらの理論に基づく教授・学習方法について検討する。また学習の動機づけに関する諸理論について理解し、学習者が主体的・自律的に学習するための教授・学習方法や、教育評価のあり方について学ぶ。これらの授業内容を講義形式の授業と、グループワークや集団討議を織り交ぜながら学習する。   |         |
|                                 |          | 学習心理学演習     | 本授業では、児童生徒の学習に関する基礎理論とそれを応用した実践的問題について、関連する論文や参考資料を受講者が紹介し、それに基づいて受講者全員で討議、検討しながら学習する。具体的な内容は、記憶や思考に関する学習者の認知的過程やこれらの理論に基づくさまざまな教授・学習方法、学習の動機づけに関する諸理論やこれらの理論に基づく教授・学習方法、また教育評価のあり方やその目的、方法、効果などである。これらの内容について、受講者が関する論文や参考資料を紹介し、それに基づいて受講者全員で討議、検討しながら学習する。   |         |
|                                 |          | 心理学方法論C     | 心理学では、実験法、質問紙法、観察法といった方法でデータを収集し、客観的な根拠をもとに人間の心理について検討する。本授業では、このような心理学の研究の方法の中で、実験法について体験を通して学ぶことを目的とする。具体的には、教育心理学にかかわる心理学研究の中で実験法を用いた研究の追試実験を実施し、結果の統計処理を行い、最終的に報告書にまとめる。これらを通して、心理学における実験法のプロセスを具体的に学び、統計的処理のための基礎的な知識・態度を身に付ける。また、先行研究の文献発表や研究計画・結果・考察についての発表も実施し、プレゼンテーションの仕方、学術論文の読み方、書き方についても同時に学ぶ。   |         |
|                                 |          | 教育心理学総合実習 I | 本実習では、教育に関する諸問題に対して、教育心理学的な観点でみることが出来る能力を育成する。具体的には、過去の学習心理学、発達心理学、社会心理学、臨床心理学の研究のレビューを行い、それを踏まえた今後の研究の方向性について考えられることを目指す。授業は、発表、質疑応答という形式で行う。発表する1週間前までに、発表に関する論文を全員分コピーして配布する。発表時には、発表する内容をまとめたレジュメを配布して、それをもとに発表する。<br><br>(オムニバス方式／全15回)<br><br>(22 弓削 洋子／3回)<br>主に社会心理学を担当する。<br><br>(93 石田 靖彦／3回)<br>主に社会心理学を担当する。<br><br>(96 小嶋 佳子／3回)<br>主に発達心理学、学習心理学を担当する。<br><br>(97 中井 大介／3回)<br>主に発達心理学、臨床心理学を担当する。<br><br>(100 黒川 雅幸／3回)<br>主に社会心理学を担当する。 | オムニバス方式 |

|                                   |          |            |   |    |
|-----------------------------------|----------|------------|---|----|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | (学校教育科学) | 教育心理学総合実習Ⅱ | <p>本実習では、教育に関する諸問題に対して、教育心理学的な観点から実証的に検討できる能力を育成する。具体的には、各自で研究テーマを設定し、過去の学習心理学、発達心理学、社会心理学、臨床心理学の研究のレビューを行い、それを踏まえた研究計画の立案(実施)ができることを目指す。授業は、各グループに分かれ、発表、質疑応答という形式で行う。発表する1週間前までに、発表に関する論文を全員分コピーして配布する。発表時には、発表する内容をまとめたレジュメを配布して、それをもとに発表する。</p> <p>第1回は、各教員から専門領域の説明をうける。<br/> 第15回はそれぞれの領域で学修したまとめの発表を行う。<br/> 第2回から第14回目はグループに分かれ、専門領域について学修する。<br/> (22 弓削洋子) 社会心理学を担当する。<br/> (93 石田靖彦) 社会心理学を担当する。<br/> (96 小嶋佳子) 発達心理学、学習心理学を担当する。<br/> (97 中井大介) 発達心理学、臨床心理学を担当する。<br/> (100 黒川雅幸) 社会心理学を担当する。</p> | 共同 |
|                                   |          | 社会心理学講義    | <p>本講義では、教育に関する社会心理学の基本的な知見を理解したうえで、研究の諸問題について考え、研究課題を自ら探究する力を養うことを目的とする。授業形態は、以下の授業内容に関する基礎的な知識を学ぶための講義形式を主として、テーマに関わる研究上の課題について受講生が自ら学ぶために、個人単位あるいはグループ単位での課題を適宜おこなっていく。授業内容の計画は次の通りである。まず、教師の児童生徒の理解の問題、児童生徒集団の動態と課題、協同学習の効果と問題点、教師の指導行動内容及び効果について、学級経営の発達段階、及び学校組織の協同の心理的意義についてである。</p>   |    |
|                                   |          | 社会心理学演習    | <p>本演習では、教育に関する社会心理学の文献をとりあげ、その研究方法や分析方法について理解するとともに、発表を通して研究全般について他者に伝える力を養うことを目的とする。授業形態は、受講生が希望するテーマの論文講義を行い、その発表と質疑応答を基に展開していく。授業計画は、以下のテーマに関連する論文講義を行う。子どもの自尊感情、子どもの原因帰属、子どもの向社会的行動、子どものソーシャルスキル、教師と子どもの関係、子どもの適応問題、子どものいじめ、学級の荒れ等である。</p>   |    |
|                                   |          | 集団過程演習     | <p>私たちは、自分の周囲にいる人たちに影響を及ぼすとともに、周囲の人たちからさまざまな影響を受けている。本授業では、人は自分自身や他者をどのように認識しているか、また他者からどのような影響を受けているかなど、自己と他者、対人関係、集団に関する心理学的知見を紹介し、自己や対人関係、集団、社会に関する諸現象を、社会心理学的な観点から把握し、検討できることを目標とする。授業形態は、上記の内容に関連する論文や参考資料を受講者が紹介し、それに基づいて受講者全員で討議、検討する。</p>   |    |
|                                   |          | 教育心理学講義    | <p>本講義では、教育心理学を構成する諸領域に関し、その知見や研究方法について学び、教育に関わる事象を心理学的な観点から評価、検討できる総合的な能力を培うことを目的とする。授業形態は、講義形式と討論を基にした指導を展開する。授業計画は、教育心理学に関わる問題に対し、実験法、調査法、観察法、面接法等を用いて検討した研究を取り上げる。また、授業外学習として教員の指示した資料やデータ等をあらかじめ確認しておくことを求める。取り上げるテーマは、教育心理学を構成する領域である、学習心理学、発達心理学、社会心理学、臨床心理学である。</p>   |    |
|                                   |          | 教育心理学演習    | <p>本演習では、教育心理学を構成する諸領域に関し、その知見や研究方法の理解をもとに教育に関わる事象を心理学的な観点から分析し考察できる力を養い、教育に関わる諸問題を自ら検討できる総合的な能力を培うことを目的とする。授業形態は、受講生が希望するテーマの論文講義を行い、その発表と討論を基に展開する。授業計画は、以下のテーマに関連する論文講義を行う。教育心理学に関わる問題に対し、実験法、調査法、観察法、面接法等を用いて検討した研究であり、教育心理学を構成する領域である、学習心理学、発達心理学、社会心理学、臨床心理学に関わる論文である。</p>  |    |
|                                   |          | 臨床心理学講義    | <p>幼児～成人期までの心理および教育におけるアセスメントについての基礎的理論を学ぶとともに、心理検査の実習や事例検討を通して、児童理解や発達支援に必要な知識を習得する。心理検査の活用の実際とその意義について理解し、実践に必要な知識や技能を獲得することを目標とする。心理アセスメントや検査法に関する講義のほか、受講生による購読担当発表をもとに、グループワークでの心理検査の実習やディスカッションを行う。グループワークは、教育現場での実践を想定して、仮想事例を用いて、児のアセスメントおよび支援例をチームで検討する練習をする機会となるように行う。</p>  |    |
|                                   |          | 臨床心理学演習    | <p>幼児～成人期までの心理および教育におけるアセスメントについての基礎的理論を学ぶとともに、心理検査の実習や事例検討を通して、児童理解や発達支援に必要な知識を習得する。心理検査の活用の実際とその意義について理解し、実践に必要な知識や技能を獲得することを目標とする。心理アセスメントや検査法に関する講義のほか、受講生による購読担当発表をもとに、グループワークでの心理検査の実習やディスカッションを行う。グループワークは、教育現場での実践を想定して、仮想事例を用いて、児のアセスメントおよび支援例をチームで検討する練習をする機会となるように行う。</p>  |    |



|                                   |                 |  |  |         |
|-----------------------------------|-----------------|--|--|---------|
| (専門教育科目)<br>(専攻科目群)<br>(義務教育専攻科目) |                 | キャリア教育の理論と活用   | 職業指導の活動がどのように起こり、その後、日本の学校教育にどのような経緯で導入されたのかを理解するとともに、今日的な職業・進路問題と関連付けながら、学校進路指導に何が期待され、どのような実践が行われているのか、理解する。また、子どもたちのキャリア発達を促進するためにはどのような活動を教育で取り入れることが効果的なのかを考え、これからの社会を生きる子どもたちにどのような支援が必要なのか検討していく。   |         |
|                                   |                 | キャリア教育研究法Ⅱ   | 進路指導・キャリア教育を実践したり、その取り組みを評価したりする方法の一つとして、調査を実施することがある。また、進路指導に限らず、今後の教育実践においては、統計的手法を活用する場面も多くある。そこで、調査を進路指導にどのように活用することができるのかを考えるとともに、特に質問紙法を中心に、その基本的な統計的手法を実際にデータを扱いながら身に付けていく。   |         |
|                                   |                 | 職業指導概論   | 学校から職業社会への移行を支援する教育の理論と実践について、主に高校卒業後に就職する若者を念頭に検討する。また、職業的・社会的自立を目指してキャリア発達を促進するキャリア教育全体を視野に入れつつも、「職業」あるいは「労働」にある程度焦点化して、「キャリア教育としての職業指導」の在り方について考察する。  |         |
|                                   |                 | キャリア教育研究法Ⅰ   | キャリア教育の研究を進めるために必要な研究方法を質的研究、量的研究の2観点から学ぶとともに、実際に収集したデータを使用して分析を行い、研究方法を身に付けることができるようにする。さらに学習成果を生かして卒業研究に向けた研究計画を組み立てることができるようにする。<br><br>(オムニバス方式/全15回)<br><br>(95 高綱 睦美/7回)<br>前半7回は研究とは何か、研究における測定の意味、問いの立て方などを学習するとともに、質問紙法による量的研究の基礎を学習する。<br><br>(21 清水 克博/8回)<br>後半は逐語記録などをもとにした質的研究法の基礎を学ぶとともに、SCAT分析やKHコーダーを用いた分析手法の進め方について実際にデータを分析することを通して学んでいく。 | オムニバス方式 |
|                                   | (学校教育科学)        | キャリアカウンセリング基礎論   | キャリアカウンセリング (Career Counseling) に関する基礎知識を習得するとともに、キャリアカウンセリングの進め方の実際について演習を行う。前半は、主に講義形式で行い、キャリアカウンセリングの基礎概念とアプローチについて理解する。後半は、ロールプレイを行いながら、キャリアカウンセリングに必要な基本態度やスキルを学習する。  |         |
|                                   |                 | キャリア教育概論   | 職業指導の基本的活動を理解するとともに、学校教育を中心とした職業指導の活動について、自ら課題に取り組むことで関心を持ち、進路指導・キャリア教育を理論的根拠に基づいて行うことができるよう、基礎的知識・技能を習得することを目標にする。また、中学生に対して職業や進路・キャリアについて何をどのように伝えていくことができるか考えて行く。   |         |
|                                   |                 | 生涯キャリア形成論  | 人生100年時代といわれる社会の中で生きていくためのライフキャリアとは何か、Superらの理論をベースとして学びつつ、学校教育だけにどまらず地域や社会の中で形成されるキャリアについて理解する。また、地域の中でどのようなキャリア形成が可能であるか、先進的な地域の事例を踏まえつつ検討し、学校がそうした地域社会と共にそこに暮らす人のキャリア形成を支援するためには何をどのように教育活動に入れていけばよいか、これからの地域社会と学校のありかたについて議論し深めていく。  |         |
|                                   |                 | キャリア教育の技術と方法   | 初等中等教育のキャリア教育で実際に使われているキャリア・ノートを分析することを通じて、キャリア教育に用いるポートフォリオの構成要素を検討するとともに、教科等の学びを特別活動でまとめ、新たな学びにつなぐキャリア教育を実施するためのポートフォリオ開発と、これを用いたカリキュラムの検討を行う。   |         |
|                                   |                 | キャリアカウンセリング実習  | これまでに学習したキャリアカウンセリング (Career Counseling) のアプローチ・スキルなどについて、実習を通して、さらに理解を深めるとともに、キャリアカウンセリングの実践力の向上を図る。前半は、主に講義形式で行い、これまでの学習内容を振り返りつつ、キャリアカウンセリングのアプローチについて理解する。後半は、具体的な事例を取りあげ、場面を想定したロールプレイを行う。  |         |
|                                   |                 | キャリア教育の評価  | 評価方法の選択、および評価指標の作成から評価結果の分析までに至るプロセスを、講義形式で理論的に学習する。また並行して実践論文を読み解くことで、評価の実際についての事例検討を行う。さらにパフォーマンス評価に着目し、ルーブリックの作成に取り組み実際に学生を対象とする模擬授業を企画・実施し、(模擬)評価を行う。  |         |
|                                   | キャリア教育の組織マネジメント | 組織行動とリーダーシップの基礎知識の習得だけでなく、教育ゲームやグループワークなどの体験的な学習の機会を導入しつつ、チームビルディングの手法や組織を機能的に活用していく方法を学習する。また、キャリア教育を推進するための効果的な組織の在り方とともに、学校外部や地域との連携を通じた組織マネジメントについて理解を深める。 |  |         |

|                                   |  |              |  |         |
|-----------------------------------|--|--------------|--|---------|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | 生活・総合  | 生活科教育概論Ⅰ     | 平成元年の生活科新設からその後の学習指導要領改訂の変遷をたどり、他の教科とは異なる生活科の特質に関して、目標論を中心に、それとの関係で内容論、指導論、および、評価論について学ぶ。具体的には、到達目標と方向目標との相違、基本的な視点と具体的な視点による内容の構成、内容構成の階層、学習支援としての環境構成、生活科の評価の特質、指導と評価の一体化等について、実践事例や実践場面を示しながら解説する。適宜、季節の遊び、おもちゃづくり等の体験や活動を行い、それらの単元構想、指導案、実践報告を個人もしくはグループで分析・考察する。以上の学習活動を通して、生活科の特質についての認識を広げ深める。                                  |         |
|                                   |  | 生活科教育概論Ⅱ     | 本授業では、『小学校学習指導要領解説 生活編』（平成29年7月）における各内容項目の読解等を通して、生活科の教科目標や学年の目標と各内容項目との関連、内容構成の階層、各内容項目を組み合わせた生活科の典型的な単元についての理解を図る。また、主に飼育・栽培活動に関わる単元を構成し実践できる基本的な知識と技能の習得を目指す。授業の概要としては、学習指導要領解説に記載されている目標・内容等を熟読し、それに関わる実践事例・学習指導案等を分析・検討する。また、受講者自身も、飼育・栽培活動に関わる学習指導案を作成してプレゼンテーションし、お互いの指導案について検討する。  |         |
|                                   |  | 生活科教材論       | 本授業では、生活科の年間指導計画や単元計画の作成、学習指導の進め方についての理解を図る。また、主に飼育・栽培活動を対象として実践研究された論文の検討、飼育・栽培活動の実習等をもとに、生活科学習における教材の在り方について理解を図るとともに、教材研究の方法を身に付ける。授業概要としては、主に飼育・栽培活動を対象とした実践研究論文を各受講者が紹介し、それをもとに討議する形式で行う。また、教材開発の媒体として受講者自身が飼育・栽培活動の教材開発を行ってプレゼンテーションし、お互いの開発した教材について検討する。  |         |
|                                   |  | 生活科カリキュラム論   | 基礎的なカリキュラム理論に関心を持ち、学校におけるすべての教育活動、カリキュラム全体の中で生活科教育をどのように位置づけ、そこでの子どもたちの学習活動をどのように指導し支援し評価するのかを基礎的なカリキュラム理論の読解、分析・考察を通して学ぶ。授業では基本的なカリキュラム理論に関する論文と文献を読解し、他の文献を参考にしながら分析・考察する。必要に応じて、英語の論文と文献の原書講読を行う。授業では、各自による発表資料の作成それらの分析と考察を踏まえ、全員でディスカッションを行う授業が中心となる。適宜、教員が授業内容について、生活科教育と関連させながら解説する。  |         |
|                                   |  | 生活科・総合的学習授業論 | 生活科及び総合的な学習の時間のねらいや内容を示しながら教育方法についての理解を深めるとともに、指導法や評価の在り方について考え、教科の本質や課題に迫ることで、実際の教育現場で活用できる授業実践力を身に付ける。ねらいや内容、教育方法の理解については、学習指導要領解説や実践資料などを参考に、理解構築に努める。具体的な授業がイメージできるように、指導案の検討や実際の授業を参観するなどとして、工夫するとともに、事例検討をし理解の深化を図る。また、学校探検、町探検、家族単元等の社会的現象を扱った単元指導計画作成やその検討、プレゼンテーションなどの体験的かつ協同的な学習場面を積極的に取り入れる。                                |         |
|                                   |  | 幼小連携教育論      | 幼稚園や保育所での幼児教育や保育のねらい、内容を示しながら理解を深めるとともに、小学校教育につなげるための授業や指導法の在り方について考え、幼小連携の本質や課題に迫る。ねらいや内容の理解については、学習指導要領、幼稚園教育要領などを参考に理論構築に努める。幼児と児童の交流場面については、指導案や実際の授業の写真を提示し、受講者に幼児教育から小学校教育への接続がイメージしやすいように工夫する。また、幼児、児童の育ちのつながりをより理解するために、スタートカリキュラムやアプローチカリキュラム、遊びを核とした生活科の実践などを実際に構想する授業場面などを積極的に取り入れる。  |         |
|                                   |  | 生活科教育専門演習    | 本授業は各自の発表と報告に基づくディスカッション中心の授業である。具体的には、それぞれの問題意識や設定したテーマに基づき、生活科及び総合的学習に関する研究論文・著書を収集する。他の文献を参照・引用しながら、それらを分析・考察し、発表資料を作成する。その発表資料に基づきディスカッションを行う。適宜、教員が解説、補足説明をする。必要に応じて、関連する英語の論文と文献の読解も行う。<br><br>(オムニバス方式／全15回)<br><br>(8 中野 真志／5回)<br>生活科と総合的学習の教育思想的系譜<br><br>(9 加納 誠司／5回)<br>幼小の接続と生活科<br><br>(146 西野 雄一郎／5回)<br>総合的学習と他教科等との関連 | オムニバス方式 |
| 生活科探究ゼミナールⅠ                       | 個々の担当教員のもとでゼミナールを行う。各自の選んだテーマに基づき、生活科や総合的学習の理論や実践に関わる研究論文・著書を収集し読解する。他の文献を参照・引用して、比較したり分類したり関連づけたり整理しながら、分析と考察を行い、発表資料を作成する。多種多様なテーマに興味と関心を持ち、積極的にディスカッションするスキルを習得する。必要に応じて、教員が解説、補足説明をする。このゼミナールⅠを通して、各自の研究テーマを焦点化していく。 |              |  |         |

|                                   |         |             |   |  |  |
|-----------------------------------|---------|-------------|---|--|--|
| (専門教育科目)<br>(専攻科目群)<br>(義務教育専攻科目) | (生活・総合) | 生活科探究ゼミナールⅡ | 個々の担当教員のもとでゼミナールを行う。生活科探究ゼミナールⅠにおいて焦点化した研究テーマに基づき、各々に適した方法で研究を深めていく。各自の研究テーマに基づいて、例えば国内外の論文と文献調査、授業観察・実態調査などのフィールドワーク、教材開発・授業実践等を行う。適宜、教員が指導・助言を行いながら、これらの調査・実践等から得られた結果をもとに分析・考察を加え、卒業論文にまとめる。この探究ゼミナールⅠとⅡを通して、知的好奇心を高め、学術研究の基礎的な知識と技能を習得する。   |  |  |
|                                   | ICT活用支援 | 学校情報研究A     | 教育現場におけるICT機器を活用した授業実践について具体的事例を知り、その基本となる情報活用能力を身に付ける。授業計画については、以下に示す3項目に分けて、学校情報に関する研究について考察する。具体的には、(1)授業事例：各教科の中でどのような事例についてICT機器を活用した授業が行われているかを分析(2)活用方法の研究：ICT機器を活用した授業を活用形態(調べ学習、共同学習等)から分析し教科横断的な活用方法を探る(3)実践活用：今後、5Gなどが具体化した際の活用方法や未来の授業形態等に関する提案など、を実施していく上で必要となる情報の活用に関する基礎的な知識・技能を習得する。  |  |  |
|                                   |         | 学校情報研究B     | 授業の目標は、学校情報研究についての具体的な研究事例を理解し、その基本となる学術的な理論を身に付ける。授業計画については、以下に示す3つのユニットに分けて、学校情報に関する研究について考察する。具体的には、(1)調査研究：最新のテクノロジーが教育や人間に及ぼす影響の分析、(2)開発研究：コンピュータ等のICT機器を活用した学習支援システムや教材の開発研究、(3)実践研究：インターネットなどの各種情報メディアの教育的な利活用や学校での授業実践研究、の3つからなり、学校情報についての学問的研究を的確に理解し、その研究を行うための基礎的な知識・技能を習得する。  |  |  |
|                                   |         | 初等情報研究      | 本授業の到達目標は、(1)児童生徒の情報活用能力の育成について、各教科等においてどのような力を育成するのかを具体的に挙げるができる、(2)児童生徒の情報活用能力の現状について、調査データを示しながら分析・考察することができる、(3)情報活用能力の育成方法について、具体的な教科や単元、授業と関連付けて提案・実施することができる、である。目標を達成するために、講義を基にしたグループ討議・全体討議をとおして情報活用能力を概念的に理解し、児童生徒の情報活用能力の調査結果をグループで分担して分析・考察する。最後に任意の教科・単元で情報活用能力を育成する授業を計画し、模擬授業を実施する。   |  |  |
|                                   |         | 初等情報教育      | 本授業の到達目標は、まず、授業を設計するという考え方を、いくつかの教授設計理論を通して学ぶ。その後、ICTを使った授業作りを行う。以上の経験を通して、授業や学びを科学的にとらえるための基礎的な知識を身に付けること、授業におけるICT活用について理解することを目的とする。目標を達成するために、前半は、ID理論に沿った授業設計を学ぶ。演習として、自分で単元を決めて、ID理論に沿った指導案を作成する。後半は、それらを活かして、ICT機器を使った授業を設計し、模擬授業を行う。模擬授業ごとに、授業検討会を行い、改善策を考える。   |  |  |
|                                   |         | 情報科学研究Ⅰ     | 低学年で学んだことを受けて、コンピュータの両輪であるハードウェアとソフトウェアについて一体的に理解を深めるとともに、IoTについて関心が持てるようになる。ハードウェアにアクセスするプログラミングなどを学ぶ。<br>Raspberry Piといった小型ボードコンピュータをセットアップし、スイッチ・センサなどの入力デバイスとLED・モータ・スピーカなどの出力デバイスを扱う計測制御などのプログラミングを行う。通信を伴うプログラミングも行い、IoTについての理解を深める。  |  |  |
|                                   |         | 情報科学研究Ⅱ     | 本授業の到達目標は、(1)これまで学習したことを応用し、目的に応じた表現手法・情報技術を使った双方向的な情報コンテンツの設計・開発を行う、(2)情報コンテンツのユーザビリティについてデータを収集し、統計的手法を活用して評価を行う、(3)グループでの開発を効果的に進める方法を考え、実践できる、である。目標を達成するため、小中高生のいずれかを対象とした学習に役立つ情報コンテンツをPDCAサイクルにそって設計・開発・評価する。  |  |  |
|                                   |         | 情報と社会       | 本授業では、情報社会やSociety5.0に対する自分なりの考えを持ち、その社会を生きている子どもたちにはどんな力が必要なのかを自分の言葉で説明することができることを目指す。そのために、一つ目に情報モラルの様々な指導法について体験し、その指導法についてメタ的に検討する。二つ目に、協同学習で、情報社会の新しい問題や、新しい情報技術の導入が社会に及ぼす影響を、技術面、セキュリティ、使用する立場、統計データの利用など多面的な側面から捉え、どのような改善策が考えられるか、問題解決にどのように生かせるか、などを検討する。最後に、これらの学修を通して得られた知見を基に、情報社会やSociety5.0に対する自分なりの考えを持ち、その社会を生きている子どもたちにはどんな力が必要なのかを自分の言葉で説明する。 |  |  |
|                                   |         | プログラミング     | コンピュータ内部での情報の表し方を理解し、コンピュータで情報が処理される仕組みやアルゴリズムについて学ぶ。また、コンピュータを用いて問題解決をする場合のデータの考え方やモデル化について理解する。情報とデータの関係性を理解し、プログラミング上で扱うべきデータについて学ぶ。アンブラグドプログラミングやビジュアルプログラミング言語などでプログラミングの基本を学んだのち、問題解決のための手順(アルゴリズム)について理解する。また、教育におけるプログラミングについても理解する。  |  |  |

|                                   |                |   |  |  |
|-----------------------------------|----------------|---|--|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) |                |   | <p>アルゴリズムの最適化について学び、問題の発見・解決に向けて適切かつ効果的にプログラミングについて理解する。また、事象をモデル化による問題の発見やシミュレーションによるモデルの評価など、プログラミングを通してコンピュータを活用する力を身に付ける。テキストプログラミング言語を用いてプログラムにより問題解決することを学ぶ。問題解決のためのモデル化とシミュレーション、および、適切かつ効果的なプログラミングについて、実習を通じて理解することを目的とする。</p>  |  |
|                                   | コンピュータとプログラミング |   |  |  |
|                                   | 情報基礎           |   | <p>「情報」を処理する機械であるコンピュータの基本的な構成を理解し、情報量、ビット、デジタル化の基本的な考え方など「情報」自体の理解も深める。「情報」という言葉には多くの意味が含まれるが、コンピュータで扱う場合には処理しやすい工夫やデータ変換が必要不可欠となる。これは、コンピュータの仕組みを知ることによってさらに理解が深まる。コンピュータと情報処理の基礎知識を増やしつつ、最新技術との関連や教育における利用などについても理解を深める。</p>  |  |
|                                   | データサイエンス基礎     |   | <p>本授業の到達目標は、データサイエンスの基礎となる統計的手法を理解し、様々な問題をデータに基づいて実証的に分析することができる力を身に付けることである。授業では、統計的手法の理論について学ぶとともに、コンピュータ上で統計ソフト（js-STARおよびR）を用いたデータ処理を実習し、結果の分析および考察を行う。扱う項目は、統計的検定の一般的な考え方、<math>\chi^2</math>検定、メジアン検定、サイン検定、t検定、分散分析、相関係数、因子分析、多次元尺度構成法、クラスター分析、重回帰分析、等である。</p>                                   |  |
|                                   | データサイエンス       |   | <p>本授業の到達目標は、データサイエンスの手法を用いて大量のデータを収集し、コンピュータによってそれらを解析することで問題を発見し解決することができる力を身に付けることである。大量のデータを収集することが比較的容易な言語データを主な対象とし、その収集方法やコンピュータによる解析方法を実習する。実習で扱う項目は、形態素解析（JUMAN）、係り受け解析（KNPおよびCabocha）、テキストマイニング（KH Coder）、等である。さらに、実習で学んだ方法を活用した調査研究、すなわち、テーマの設定から調査方法の立案、データの収集、データの解析、考案までを一連の作業として体験する。</p> |  |
|                                   | 情報システム         |   | <p>複数の情報機器が協調して働くWebシステムの構築を通してシステム設計及び暗号化技術等を習得すること、並びに情報システムを活用するためのプロジェクトマネジメント力及びプログラミング力を育むことを目標とする。そのために、情報システムに関する基礎を学習した後、ラーニングマネジメントシステム（LMS）用サイトを情報システムの一例として実際に構築する。また、数学の1つの単元用トピックを作成し、LMSを用いたコース設計を学ぶ。さらに、LMS用プラグインの作成を行う。</p>   |  |
|                                   | (ICT活用支援)      |   |  |  |
|                                   | ユーザインタフェースデザイン |   | <p>本授業の到達目標は、(1) 道具や情報システムのユーザインタフェース（以下UI）を考える上で重要なルールについて、それらが守られていない事例を挙げながら説明することができる、(2) 使いやすさという観点から、身近な道具や情報システムのUIを分析・評価できる、(3) 情報システムのUIを設計・評価できる、である。目標を達成するため、使いにくいUIの事例の講義をとおしてUIを考える上で重要なルールについて学ぶとともに、仮想的な情報システムのUIのペーパープロトタイプを開発・評価する。</p>  |  |
|                                   | 情報通信ネットワーク     |   | <p>コンピュータネットワークは、仕組みがあつて動作していることを理解する。ネットワークの一般的包括的な技術の概要、TCP/IPプロトコル階層、いくつかのネットワークアプリケーションを学ぶ。コンピュータネットワークについて、今日のインターネットで使われている技術や事例を中心に講義を行う。講義の内容の理解を助けるために、パソコン等のOSのネットワーク機能、ネットワークアプリケーション、Wireshark等のネットワーク解析ソフトウェアを用いた実習を適宜取り入れる。</p>  |  |
| 情報通信ネットワークとデータの利用                 |                | <p>コンピュータ上で扱われる情報はすべて何らかのデータの形で管理され、データ通信やデータ処理が行われている。コンピュータネットワーク上で、どのような技術のもとに情報が蓄積・公開されているかを理解することを目的とする。コンピュータネットワーク上で、データ処理に対して使われている技術や事例について講義を行う。また、データベースと連携したWebサーバシステムを構築することで、実際に利用されている技術に対する理解を深める。</p>            |  |  |
| 情報セキュリティ                          |                | <p>下の学年で情報通信ネットワークについて学んだことを受けて、情報セキュリティに関する知識と技術を習得させ、情報の安全を担う能力と態度を育成する。今日、世間で用いられている情報セキュリティ技術について、実施可能な実習を含めて、講義を行う。高等教育機関の情報セキュリティ対策のためのサンプル規程集(国立情報学研究所)や大学などの公開されている情報セキュリティポリシーを縦覧して、組織運営に必要な情報セキュリティマネジメント関連についても扱う。</p> |  |  |
| 情報デザイン基礎                          |                | <p>情報を収集し、分類再構成して発信するまでの一連の流れを学習する。それと同時に情報の科学的な理解を深める。そのために、情報を収集する際のメディアの特徴、情報の情報のデジタル化に関わる画像や音声、動画などの理論的な基礎や多様な情報コンテンツの特性及び処理と表現の方法、データ圧縮の方法等を学ぶ。情報制作過程の理論的な理解をした後、情報コンテンツの作成及び発信を実際に行うことによって情報デザインの基礎を学習し理解する。</p>            |  |  |

|                                   |                |  |  |  |
|-----------------------------------|----------------|--|--|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | (ICT活用支援)      | 情報デザイン   | 本授業の到達目標は、(1)情報デザインに配慮した的確なコミュニケーションの必要性について知る、(2)特にDTPやプレゼンテーションのデザインに関する基礎知識を身に付けるとともに、情報媒体の伝え方や表現方法を実践的に学ぶ、(3)「デザイン」を単に自己表現の作品にとらえず、目的に則した造形・形態の探求や実現ととらえ、客観的に課題にとり組む姿勢を持てるようになることを目指す、である。そのために、この授業では、前半、グラフィック系アプリケーションを使い、DTPや視覚デザインの基礎を学ぶ。後半では、プリンタ、スキャナ、デジカメなどの周辺機器も用いて実習で紙メディアやプレゼンの制作課題を行う。尚、この授業に関する連絡、資料配布、課題提出はe-learningシステムを用いる。 |  |
|                                   |                | 情報コンテンツ  | 教育現場におけるICT活用の際に必ず必要となる情報コンテンツの開発工程から管理・運用・保守までの各過程にわたる一連の作業内容を理解し、指導できるようにすることを授業目標とする。授業の概要としては、まず初めに、デジタル化された情報コンテンツを、日常生活において「創る」「伝える」「使う」という異なる観点から可視化する。そして、情報コンテンツの制作過程に必要な知識・技能を習得し、体験・理解する。また、人間の知と情報コンテンツの融合から作り出される新しい情報環境などに関する理解を深める。   |  |
|                                   |                | 情報と職業  | 本授業の到達目標は、(1)情報技術が社会や産業や人々に与えた影響について、複数の観点から自身の考えを述べることができる、(2)今後社会において情報技術がどのような役割を果たすのかについて、これまでの発展を踏まえ自身の考えを述べるができる、である。目標を達成するため、産業発達史の歴史・政策や文化への影響・サイバー犯罪や情報倫理・心理に与える影響や効果・人とコンピュータのコミュニケーションなどの情報化社会に関わる複数のトピックについて、グループディスカッションを中心に学習する。  |  |
| 日本語支援                             | 音声学・音韻論        | 音声は言語の最も基本的な単位である。音声についての理解を深めることは、言語学・日本語学・英語学など、どの分野の学習や研究を行うにしても必須の項目である。この授業では、日本語や英語を中心とした音声学・音韻論の基本を学ぶことを目標とする。多くの訓練を積むことにより、音声言語に対する理解が深まり、自信を持って日本語や英語の音声指導ができるようになる。<br>講義と演習を組み合わせた授業である。その日のテーマについての概説的な説明を講師が行うと同時に、クラス全体で議論をする。課題を出して、クラスで、または持ち帰って、考えてもらうこともする。                                |  |  |
|                                   | 言語学研究          | 世界には現在、6,000ともいわれる数の言語が話されているが、中国語や英語のようなよく知られた大言語から、数百人、数十人の人々によって話されている少数言語まで、どの言語の文法にも独自のユニークな特徴が存在する。この授業では、言語学が解明しようとしている諸現象の一端として、諸言語の文法に見られる多様性と、世界のあらゆる言語に共通して見られる普遍的特徴を理解することを目標とする。<br>講義と演習を組み合わせた授業である。授業日ごとにテーマを設定し、その日のテーマについての概説的な説明を受講者が発表する。具体的な言語の例を出してその言語とテーマを関連づけてもらう。その後、講師が補足的な説明を行う。 |  |  |
|                                   | 言語生活           | 地域差、性差、階層差、世代差などの社会的属性による言語変異のパターンとその時代的变化や二言語使用者による言語使い分けの原理、世界の様々な国における言語問題と言語政策の比較などを扱う。今後のグローバル化の進展を視野に入れ、外国に居住する日本人および日本に居住する外国人の言語生活に関する最新の研究も取りあげ、その研究方法についても検討する。あらゆる言語行動の背後に社会的な関係が潜んでいることを、具体例を通して認識することを目標とする。  |  |  |
|                                   | 日本語研究の多様なアプローチ | 日本語に対するさまざまなアプローチを知り、日本語をさまざまな角度・観点で観察することにより、違った見方で日本語を分析することができる。そのような複眼的な視点を持つことは、日本語を深く理解することに役に立つ。この授業では、異なるタイプの日本語の研究を取り上げ、受講者がそれらについて一定の知識が得られることを目標とする。一例として、統語論の分野から「文の階層構造」、形態論や通時的研究として「文法化理論」、あるいは、語用論の分野から「ポライトネス理論」を取り上げる。   |  |  |
|                                   | 日本語史           | 日本語史の基本的事項を、文字・表記(万葉仮名、ヲコト点など)、文体・文章(和文体・漢文体、上方語と江戸語、標準語など)、語彙(和語・漢語・外来語、翻訳語など)、音韻(上代特殊仮名遣い、四つ仮名など)、文法(係り結び、連体形終止法など)といった分類にしたがって概観するとともに、様々なタイプの言語変化について学び、現代の日本語と関連づける。さらに、歴史言語学や文法化の理論など、言語変化、言語の歴史的な系統についても触れることによって、日本語をより広い視野で見ることができるようになる。   |  |  |
|                                   | 日本語と外国語        | 日本語教育においては、言語間の構造的な相違に起因する外国語学習上の障害についての知識が要求されるが、この授業では、そのために必要な言語間の相違性と類似性を分析する能力を習得することを目標に、英語をはじめ、この分野の研究で取り上げられること多い言語の音韻と文法の特徴を学ぶ。前半は、分析の仕方を学び、後半は、主として本学の初習外国語(ドイツ語、フランス語、ポルトガル語、中国語)に関する発表を通して、人に外国語の特徴を説明するための技術を身に付ける。   |  |  |

|                                   |         |  |  |  |
|-----------------------------------|---------|--|--|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | (日本語支援) | 言語学入門  | 言語を分析するために不可欠な基礎知識の習得を目標に、言語学の主要な分野の導入部分を講義する。具体的には、音声学・音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論、言語類型論である。導入として諸言語の系統関係とその分布、文字の種類とその系統についても扱い、また最後にビジョン・クレオールや言語接触など社会言語学の一部にも触れる。講義が中心であるが、授業内タスクを通して主要概念を身に付ける作業も行う。                                   |  |
|                                   |         | 日本語教育評価法   | 日本語教育評価に関する基本的な知識を身に付け、日本語教育の現場で実際に役立てられる日本語能力の測定と評価技術を獲得する。前半を基本的な知識を身に付けるために講義形式、実際にテストを作成、後半は、テスト結果分析をすることにより評価技術を身に付ける。エクセルを使用して、実際に分析を行うため、パソコンを何度か持参してもらう(持参する日は授業中に指示する)。また、日本語学習者が受けるテスト、日本語教育能力検定試験などを授業中に体験することにより、評価を考える。 |  |
|                                   |         | 日本語教育学概説   | 日本語を外国語として教えるために、日本語を客観的に捉え、分析する知識を深めるとともに、外国人労働者が増え、今後「生活者」としての外国人とともに築いていく多文化共生を目指す日本社会として、日本語教育にどのような意味があるかを考える。日本語学習者に漢字の授業をする場面を想定し、目的や学習内容等を実際に考える活動や、外国語教授法を自ら体験する活動を通して、日本語教師としての教授活動能力を養うことを目指す。                            |  |
|                                   |         | 年少者日本語教育実習   | 年少者への日本語指導を実際に行うことで、自分なりの課題を見つけて取り組むことを目指す。近隣の外国人児童が多く在籍する小学校2校で最低5回ボランティアとして日本語や算数の指導を行うことを実習とする。最低1回はリーダーとしての経験をすることで、自分が将来実際に教壇に立った時のイメージを具体的に捉えることにつなげる。ボランティアとして実習に行くことで、課題を明らかにして、課題解決に向け実践を行う。                                |  |
|                                   |         | 日本語教育実習  | 日本語教育の現場で必要となる、チームティーチングの基本的な考え方を理解し、クラス運営全体に配慮する姿勢を身に付けることを目標とする。授業運営に必要な役割を受講生全員で分担し、担当箇所を決めて実習を行う。実習は2名一組となり、本学留学生に60分間実際に日本語の授業(会話)を教える形式をとる。指導案の作成とそれへの指導を受け、しつかり準備を行った上で授業をする。授業時間外に準備の時間を確保する必要がある。                           |  |
|                                   |         | 日本語教授法   | 日本語教授法の基礎を身に付ける。日本語教育で使われている初級の教科書・教材に触れることで、教授内容、日本語教育文法、教授法等についての実践的な知識を構築する。学習者への配慮やコースデザインの基礎を学ぶ。日本語教育に必要な知識・技術、日本語教師の資質・能力、内外の日本語教育の現状等を概観する。授業は、課題、発表、ディスカッション、ピアフィードバック等を多く取り入れて行う。授業の総括として、内省・省察を行う。                         |  |
|                                   |         | 言語習得論  | 第二言語習得に関する基礎知識を構築し、外国語学習、外国語教育等の応用を考える。第二言語習得に関する英語の文献を中心に読み、授業でディスカッションする。言語習得に関わる様々な要因や言語習得過程に関する問題に関する意識を高め、外国語教育との関わりを考察する。英文レポート、テスト等を随時実施する。小課題も有り。発表、質疑応答、ディスカッション等は、日本語、英語で行い、英語学習や英語の運用能力を高めることも目標とする。                      |  |
|                                   |         | 外国語教育科学  | 外国語教育における様々な教授法、指導法、教室活動等について、理論と実践の面から考察する。第一言語習得研究、第二言語習得研究、学習科学、認知心理学等の分野から得られた知見を授業に応用するにはどのようにしたらよいかを考える。また、逆に、普段授業で行っている教え方や指導の仕方、教室活動等は、どのような理論的根拠に基づいているのかを明らかにする。そして、自分が担当するクラスの目標・目的に応じて、最も効果的な授業を構成する糧とする。                |  |
|                                   |         | 日本語教育キャリア開発  | 様々な外国語教授法を学び、日本語教授法への応用、効果的な日本語教育の方法を考える。外国語教授法の発達、変遷、背景等を概観する。世界と日本の日本語教育・教授法の発達、変遷、背景等について調べる。外国語教授法について、各グループで特色、理論的背景、長所、短所、活用方法、批判等を研究して、発表する。次にその教授法を使って、日本語教育の模擬授業を実演し、質疑応答、ディスカッション等を行う。総括として、授業での学びの省察レポートを書く。              |  |
|                                   | 日本語学入門  | 日本語を母語とする者なら誰でも日本語を教えることができる、わけではない。私たちが普段意識せずに使っている日本語とはどのような言語であるかを、日本語学の様々な観点から観察し、日本語に対する理解を深めるとともに、日本語学習者に教える際に問題になるさまざまな事柄にも興味を持てるようになることが、この授業の目的である。一方的な講義ではなく、受講者には、積極的に観察し、考える姿勢を持ってもらう。その日のテーマについての概説的な説明を講師が行うと同時に、クラス全体で議論をする。課題を出して、考えてもらうこともする。 |  |  |

|                                   |            |   |  |  |
|-----------------------------------|------------|---|--|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | (日本語支援)    | 日本語学研究  | この授業は、1年次で学習した「日本語学入門」などの日本語学・言語学の基礎の上に、さらに深い理解を目指して、いくつかのトピックを決めて学ぶものである。認知言語学・機能主義言語学・会話のインタラクション研究などの分野について、それぞれの研究学派の主張、目的、研究方法を理解し、どのような言語現象、言語関連の状況に対してどういった研究成果が生まれているかを具体的に知る。それにより、受講者が、基本知識のみの状態から脱し、独力で研究できる能力を育めるように、授業を進めていく。                 |  |
|                                   |            | 日本語学演習  | この授業は演習であるので、まだ定説のない、あるいはさまざまな議論がなされているような日本語学の諸問題・諸分野からトピックを選び、先行研究から学ぶだけでなく、コーパスなどの日本語の実例を積極的に利用し、受講者でオリジナルな主張を持てるように、授業を進めていく。具体的には、(1)文法や使用に関わる現象を取り上げる。(2)一人で考えたり、またはグループで意見を出し合ったりし、研究方法を工夫して、解決に取り組む。(3)何らかの結論を得たら、結論を公開する(論文の形にまとめる、プレゼンテーションをする)。 |  |
|                                   |            | 年少者日本語教育概説  | 実際に日本語指導が必要な児童生徒への指導について考える。「サバイバル日本語」、「日本語基礎」、「技能別日本語」、「日本語と教科の統合学習」、「教科の補習」の5つのプログラムを理解したうえで、これらのプログラムを組み合わせたコース設計の必要性を理解する。「初期日本語指導」と「日本語と教科の統合学習」を深く理解する。  |  |
|                                   |            | 日本語教育事情   | 世界の様々な国・地域の日本語教育事情に合わせて、日本語教育を創ることができる資質の基礎を養う。様々な目的や背景を持つ日本語学習者に対応したの日本語の授業を計画し、運営していくコーディネーターとしての知識・技量を身に付けることを最終目標とする。授業では、まず、コースデザインの基礎を実践的に学ぶ。ニーズ分析、目標言語調査等を実際に行い、学習目的に合ったカリキュラム、シラバス等を作成する。その上で、コースの運営に必要な様々な要因を検討する。                                |  |
|                                   |            | 日本語教育学入門  | 日本語教育の現状や課題について知り、現在求められている日本語教育とは何かを考える。学校教育の中で課題となっている日本における外国人児童生徒支援にも目を向ける。「日本語教育推進法」の理念や日本語教師の責務等を考える。日本語指導が必要な児童生徒の支援には、どのような資質能力が必要か、大学卒業までのどのような知識・経験を身に付けておいたら良いか、さらに、外国人に「やさしい日本語」とは何か、また、JSLカリキュラム等について理解を深める。日本語初期指導の方法等についても学び、日本語教育の土台を築く。   |  |
| 国語                                | 国語学講義B II  | 方言研究は国語学の研究分野の一つに位置づけられている。この方言を研究対象とするためには、実際の方言の動態を正確に把握することが求められる。その把握にはいかなる方法があるのか、あるいは、日本語の方言は現在どのようになっているのか、そういった問題をこの授業では取り上げる。また、受講者が今までの言語生活で経験してきた方言を徹底的に振り返るという作業を通じ、自らの使用する日本語を客観的に捉えるという作業も行う。そこから日本語のしくみや特徴を再認識すると同時に、自らの使用する日本語について振り返ることを最終の目標とする。  | 隔年   |  |
|                                   | 国語学講義B III | 本講義では、日本語史に見られる通時的な変種や、現代共通語や諸方言を含む共時的バリエーションをも含めた日本語を対象に、文法・音声音韻などを中心にその規則性を考察する。国語教師として必要な日本語およびその歴史についての知識を身に付けるとともに、日本語の多様性について理解を深めることを目的とする。なお、講義形式ではあるものの、コメントカードや授業時の質疑、授業内での作業など双方向の授業を実施することで、受講者が主体的に考える力を涵養する。  | 隔年   |  |
|                                   | 国語学演習B II  | 国語学の研究分野の一つに方言研究がある。この授業では、まず学生自らの方言意識について確認した後、先行研究を精査した上で、内省による自らの言葉の運用についての検討を促す。さらに自らの居住する地域で、地域方言の実態や人々の方言意識を調査し、方言研究の基礎となるフィールドワークを実践する。この作業を通しフィールドワークによる方言研究の方法について学び、地域に出かけてアンケート・インタビューを行いデータを採取し、そのデータを分析するという言語研究の手法を身に付けることが可能となる。これらのことから、自らの使用する日本語を客観的に捉え、そこから日本語のしくみや特徴を再認識し、自らの日本語使用を振り返ることへとつながっていく。 | 隔年   |  |
|                                   | 国語学演習B III | 本演習では、言語資料に基づく日本語の分析方法を身に付けることを目標とする。文献や談話などの言語資料を対象に、問いをたて、データ(用例)を収集し、仮説を検証するという調査研究を行う。また、その際にただ資料に現れる例を無批判に扱うのではなく、その資料の成立背景や反映される言語などの資料性を踏まえて分析することで、言語資料の背後にある実際の言語の規則性を明らかにすることを目指す。授業後半では相互に発表・ディスカッションを行うことで、他者にわかりやすく整理して伝える力・他者のコメントを反映して自身の考えを精緻化していく力を身に付ける。  | 隔年   |  |
|                                   |            | 国語学演習C I  | 日本語学に関する学術研究を実践するにあたって必要な能力を身に付ける。具体的には以下の諸点を目標とする。①論文を読み、「研究の方法」「研究のまとめ方」「課題の所在」「考察の仕方」等を学ぶ。②具体的な課題に基づき、調査を行う。その際、文献の扱い方、コーパスの利用法、パソコンを用いた調査方法等の理解を深める。③考察内容をまとめる際にどのような工夫が効果的で、何が必要かを意識しながら効果的なアウトプットの仕方を身に付ける。  |  |

|                                   |   |           |  |  |
|-----------------------------------|---|-----------|--|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | (国語)  | 国語学演習C II | 日本語学に関する学術研究を実践することにより、研究に必要な、以下の一連の過程を体験する。その活動を通じて、日本語学を修めるとはどのようなことかを理解する。①特定のテーマについて、先行研究を読み、研究史を整理し、取り組むべき課題の所在を明らかにする。②その課題意識に基づいて必要な方法を設定する。③調査を実際に行い、データを入力・整理・集計・分析する。④分析結果について考察をする。⑤一連の所見を、他者に説得的に、効果的に伝えるとりまとめを行う。   |  |
|                                   |   | 国文学講義A I  | 万葉赤人歌の表現方法と古語イニシヘ/ムカシの使い分けを講義する。前半は、万葉歌人である山部赤人の和歌を七種とりあげて詳しく解釈し、後半は、そのうち二種にかかわる古語イニシヘ(およびその類語ムカシ)をとりあげて語意を詳述し、文学理解に役立てる。授業の概要については、前半では、万葉赤人歌の表現方法に見る周到な計算を精確にさぐり、後半では、上代における古語イニシヘ/ムカシの使い分けのありようと中古への継承について広く深くさぐる。  |  |
|                                   |   | 国文学講義B I  | 近世の箏曲地歌の歌詞がどのようなもので、訳すとはどういう作業なのかを、典故との関係性や詞と曲の同調等にも目配りしつつ、講義していく。特にわかりやすく訳すことの大変さや意義を伝えることは、教育大学の学生にとって非常に重要と考える。なお、担当者の自著『箏曲地歌五十選歌詞解説と訳』の解釈や論文の自説を紹介するとどまらず、担当者自作の「地歌動画講義」も適宜視聴させる。  |  |
|                                   |   | 国文学講義B II | 日本近現代文学の作品について分析する上で必要とされる文学理論について、知識を習得し理解を深める。また作品をめぐる諸言説について、文学理論を踏まえつつ検討を加え、作品の批評性を明らかにする。このような学習を経ることにより、作品を読解する上で必要とされる思考力や判断力を養う。同時に、文学作品を読解するための高度な技能を養い、作品に対する関心を深めることを目標とする。   |  |
|                                   |   | 国文学演習C I  | 一つの古典の特定の部分・箇所に関し、個人またはグループ単位でレポートして、正しい本文や解釈・説を選ぶ能力を習得させる演習。教育大学の学生ということを念頭に置き、具体的かつ筋道立ててわかりやすく説明できる能力も併せて習得させる。なお、何を対象に選ぶかにもよるが、変体仮名を読む基礎力をつけるために、影印本をテキストに用いる場合もあり得る。また、グループ別でレポート発表する場合は、初めの一～二回は授業外に事前指導も行う。  |  |
|                                   |   | 国文学演習C II | 本演習では、日本近現代文学の研究方法を多角的に検討することを目指す。主要な研究方法に対する理解を深め、作品分析を可能にする能力を養う。具体的には、研究方法・アプローチについて、先行研究を参照しながら検討する。さらに、研究方法を習得し、より深い作品分析ができることを目標とする。加えて、日本近現代文学にかかわる作品について、個人で分析して発表する。発表を通して論理的な説明のできる能力を養う。  |  |
|                                   |   | 国文学演習E I  | 四年次の卒論提出にそなえ、自分が何をテーマに選びたいかを考えつつ、そのテーマにはどこまでの先行研究があつてどんな問題点があるかも調べる演習。指導教員との対話によって、先行研究を批判的に踏まえることや論拠を明示しながら筋道立てて論を進めていくことの重要性を、三年次のうちに学んでおく。なお、国語教育は丹藤博文、砂川誠司、古典は田口尚之、近現代は奥田浩司が担当するものとする。   |  |
|                                   |   | 国文学演習E II | 四年次の卒論提出にそなえ、自分が選んだテーマについて、考察を深める。具体的には問題点の把握、先行研究との関係性について考察し発表する。同時に指導教員との対話を通して、理論的なアプローチを踏まえ、論拠を明示しながら論理的に説明する能力を養う。加えて、自らの研究と先行研究との関係性についても、指導教員との対話を通して確認する。なお、国語教育は丹藤博文、砂川誠司、古典は田口尚之、近現代は奥田浩司が担当するものとする。  |  |
|                                   |   | 中国文学講読    | 漢文の原テキストを正確に理解するためには、時代と地域に関する知識、その言語構造の理解、そして何より辞書や索引をはじめとする様々な工具書の使用法を身に付ける必要がある。この授業では、中国文学・思想に関する基本文献を題材として、必要な工具書を使用しながら、それらの原典を読解する技術を身に付けることを目標とする。入念な予習が必要であるが、それを通して技術のみならず、学術分類や人名・書名など中国古典に関する様々な基礎知識を身に付けることができるだろう。   |  |
|                                   |   | 中国思想演習    | 『論語』や諸子百家をはじめ、漢文で扱われるテキストの多くは、二千年以上も離れた時代に作られ、その後長く日本・中国で読まれてきたものである。本来それらを正確に読解するためには、現在に到るまでの、権威を認められてきた注釈類を参照し、辞書などを用いた語彙の用例の調査などを通して、それらの妥当性を評価しながら、解釈を絞り込んでゆくという作業が必要である。この授業では、演習形式によって、漢文で書かれた注釈と合わせて精読することで、そのような読解方法の基礎を習得することを旨とする。合わせて卒業論文作成における問題設定に必要な知識を身に付ける。 |  |
| 中国文学史                             | 中国古典文学における中核的ジャンルである詩について、先秦から南宋に至る発展過程を通観し、各時代を代表する詩人たちの詩を鑑賞することによって、中国古典文学に対する知識と理解を深める。『詩経』『楚辞』『詩経』を源とし、漢代に五言詩が誕生し、魏晉南北朝詩、唐詩、宋詩と成熟・展開していった中国古典詩の流れを把握し、詩の形式・押韻・平仄等について理解する。曹植や陶淵明、杜甫・李白・白居易・杜牧、そして蘇軾・陸游など、日本にも大きな影響を与えた詩人たちの多様な作品を鑑賞しながら、各時代、各詩人の文学的特徴を考察する。 |           |  |  |



|                                   |  |   |    |
|-----------------------------------|--|---|----|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | 漢文学研究  | 講義形式により、漢代から明代までの多様なジャンルの作品を読み、各ジャンルの特質を正しく理解するとともに、そのジャンルが盛行した時代背景を考察する。前近代において最も格式高い文体と見なされてきた賦、駢文と古文、また魏晉南北朝期の志怪・志人小説から唐代の伝奇小説、明代の『三国志演義』や『西遊記』等の白話小説に至るまで、多様なジャンルの作品を読解・鑑賞することを通じて、中国古典文学全般に対する理解を深めることを目標とする。  |    |
|                                   | 中国文学演習   | 演習形式によって中国文学の研究の手順と手法を実践的に学び、論文作成のための基本的能力を身に付けることを目指す。まず中国文学に関する学術書・研究論文を読んで受講者みずから論点を整理して発表し、全体で討論を行い、更に必要な調査をみずから考えて実行し、文章化する力を養う。学術研究の手順と論文執筆の注意点を理解し、実践として自ら問いを立て、必要な文献資料を収集・分析し、先行研究の検討を進める。最後に全体で発表と質疑応答を行う。   |    |
|                                   | 書道演習 A   | 最初は、漢字（楷書・行書・草書）の用筆法とかなの用筆法について比較をしながら、両者に共通する点や相違点を探りながら、さまざまな用筆について理解を深める。その上で、かなの単体（いろは・変体かな）の書き方や、さまざまな連綿の方法について実技指導していく。基礎的な用筆から学習を進め、和歌や俳句を四行書きにすることで、行の構成の仕方についても学びながら、段階的に多様なかなの書法を用いることができるようにしていく。  |    |
|                                   | 書道演習 B   | かなの基礎である「いろは」の単体や変体がなが字母からどのように変化したか、かな文字の変遷について確認しながら書法を学ぶ。また、和歌や俳句を行書きやちらし書きにしながら、連綿、行の構成や配置など、かなの表現方法について学んでいく。平安朝のかな古筆の臨書も行いながら、さまざまな連綿法や行の構成法や、紙面構成法などについての知見を広げていくことにより、効果的なかなの表現ができるようにし、自らの選んだ詩歌を作品にする方法を学ぶ。  |    |
|                                   | 書道演習 C   | 授業のテーマ及び到達目標は、1、行書と草書の書法を学習し、その運筆法・用筆法を習得する。2、行書と草書の技法を応用して、創作作品へ発展させる。中国での代表的な行書および草書の古典作品を取り上げ、その作品が生まれた時代背景、書人、作品内容等を把握する。そして、その書法を理解したうえで、臨書をする。それを做書作品から創作作品につなげる。最終的には、臨書（行書および草書）による学習成果を条幅作品（半切）に仕上げる。  |    |
|                                   | 書道史  | 中国書道史と日本書道史の両面から、「書」の歴史について様々な視点で調査・研究することにより、文字文化について正しく理解することができる。書（文字）にはそれぞれ時代性・地域性があり、豊富な書（文字）資料からその特徴を考察し、理解を深める。さらに、広く日本・中国の文化を理解するとともに、豊かな人間性を支える教養と深い専門的知識を身に付ける。具体的には、中国および日本の各時代の書名跡を取り上げ、その書の持つ意義を様々な角度から考察していく。臨書等の実技も含めながら、発展・定着化を図る。したがって、毎時間書道用具(初回授業時に説明する)を持参すること。基本的な授業の進行は、(1)学生のプレゼンテーション、(2)教師の講義、(3)古典作品の臨書、(4)まとめ、という形になる。 |    |
|                                   | 書論講読   | 中国清代の書論を読み、書の見方、考え方について深く考察することができる。さらに、書法論および書道文化を分析的に理解するとともに、豊かな人間性を支える教養と深い専門的知識を身に付けている。具体的には、中国清代の書論を読み解く事に重点をおく。前半は、基礎的知識として「書の美」について深く考察し、その中で、書法用語・人名等を確認する。後半は、清代に書かれた書論を精査に読み解き、書法理論について深く考察する。  |    |
|                                   | 書研究 A  | 中国と日本の代表的な書家とその書法について学ぶ。なかでも、篆書・篆刻の基礎・基本を学び、更に発展学習として篆刻作品の制作を行う。毎時間、理論(書家についての発表)と実技(篆書・篆刻)の二つを行いながら進める。理論は、代表的書家について、調べ学習と発表を行いながら、書人と作品の関係について考察する。また、実技としては、篆書は大家と小家の臨書を行い、篆書を用いた作品制作や、篆刻作品の制作と研究を行う。  | 隔年 |
|                                   | 書研究 B  | 中国と日本の書人として著名な人物を何人か取り上げ、その人物像を知ることにより、書の文化、ひいては中国と日本の書文化について考察する。また、篆刻の分野で著名な人物にも焦点をあて、篆刻の表現文化についても理解する。授業の前半では、人物に関する先行研究や関連する資料を読みながら書人への理解を深める。その上で、後半は、実際に作品の臨書を行うことにより、書人と作品の表現技法との関係性について考察を深めていく。   | 隔年 |
| 作品研究 A                            | 中国の書に関する文献資料をもとに、書作品についての知識を深めていく。先行研究や古資料を読みながら、書の古典作品の筆者、時代(政治・文化)との関わりや、書かれている内容、書体・書風、書法などを多面的・総合的にとらえ、書作品の書道史的な意義を考察する。各自の興味関心に応じ、書法的に優れた碑法帖を選択して、筆者・時代背景・作品内容・書風や書体の特徴・用筆法についての考察を行う。先行研究の検討も行いながら、調べてきた内容をレポートして理解を深める。 |   |    |

|                                   |         |   |   |  |
|-----------------------------------|---------|---|---|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | (国語)    | 作品研究B   | 日本の書に関する文献資料をもとに、書作品についての知識を深めていく。先行研究や古資料を読みながら、書の古典作品の筆者、時代(政治・文化)との関わりや、書かれている内容、書体・書風、書法などを多面的・総合的にとらえ、書作品の書道史的意義を考察する。各自の興味関心に応じ、書法的に優れた古筆を選択して、筆者・時代背景・作品内容・書風や書体の特徴・用筆法についての考察を行う。先行研究の検討も行いながら、調べてきた内容をレポートして理解を深める。  |  |
|                                   |         | 歴史と環境   | 歴史や社会を作り出す人間の行動は、その個人や終端が置かれているさまざまな環境によって規定されている部分が多い。その環境とは、自然環境はもちろん含んでいるが、同時に周辺の諸勢力などとの関係を生み出す政治的、経済的、文化的などの人為的に作られるものも重要である。日本史あるいは世界史に関わるような諸事例を取り上げ、それらがどのような環境によって規定された歴史的現象であったのかを掘り下げることによって、受講生がより深く歴史や社会の諸事象を捉え、将来の教材環境につなげていけるような力を養う。                           |  |
|                                   |         | 地理学特論 I   | 4年次の卒業+論文作成を念頭に、特論 I では、地理教育・農業地理学・都市地理学について、基本的な内容を講義する。本講義では、各分野で何が問題とされ、何が明らかになったのか。また、いかなる研究手法がとられてきたのかを中心に各分野の基本的理解をはかることを目的とする。   |  |
|                                   |         | 地理学特論 II  | 4年次の卒業+論文作成を念頭に、特論 I では、地理教育・農業地理学・都市地理学について、基本的な内容を講義する。本講義では、各分野で何が問題とされ、何が明らかになったのか。また、いかなる研究手法がとられてきたのかを中心に各分野の基本的理解をはかることを目的とする。   |  |
|                                   |         | 哲学の諸問題  | 本授業では、プラトンやアリストテレスといった個々の哲学者にフォーカスしたり、あるいは歴史的な叙述に偏ったりするのではなく、むしろ哲学の歴史の中で繰り返し問題とされてきた重要な概念ないしトピックにフォーカスした講義を実施する。たとえば、現代の英語圏盛んに論じられる一連の哲学上の概念としては、真理・確率・因果・自由意志・合理性などが本講義で俎上にのぼることになるであろう。これらをつうじて哲学上重要な諸概念・諸問題について受講生に理解を深めてもらうことが本講義のねらいである。                                 |  |
|                                   |         | 倫理学の諸問題   | この講義では、主に現代の倫理学で論じられている諸問題のなかから、重要なものをいくつか取りあげ、考察する。現代の倫理学では、道徳についての判断はどのような本性のものであるかが活発に論じられる(メタ倫理学)とともに、ヨーロッパ大陸では「他者」の問題が、主にアメリカを中心とする英語圏では「正義」の問題が、倫理学の重要な問題となっている。また生命や環境やビジネスといった、具体的な社会問題をめぐる倫理的な議論(応用倫理学)の動向も見逃すことはできない。このような問題のなかから、受講者の関心に応じてテーマを設定し、その問題のおおよそを概観する。 |  |
|                                   | 社会      | 宗教の諸問題  | 本講義では、まず、宗教に関する基礎的知識(世界宗教であるキリスト教・イスラム教・仏教、そして日本における代表的な宗教である神道と仏教諸宗に関する基礎的知識)ならびに宗教学の今日にいたるまでの歩みを概説する。その上で宗教と国家の関わりや宗教と戦争の関わりについて考察し、さらには宗教を通して社会現象を読み解くことを試みる。異文化としての宗教文化に対する受講者の関心を広げることが本講義のねらいである。   |  |
|                                   |         | 哲学基礎演習  | 本授業では、哲学の古典的な著作の主要な部分をいくつか取りあげ、これを読解し、またそれに基づいて議論を行う。それに先立って、取りあげた哲学者やその著作の基本的な予備知識を講義形式で学んだのちに、実際にその著作の一部を輪読形式で読み進める。この作業をつうじて、哲学の基本的な方法論や課題についての理解を深めるとともに、今後の演習形式の授業で必要となる古典読解の方法や他の受講者との討論の方法を受講者各自が身に付けることを本授業のねらいとする。   |  |
|                                   |         | 哲学演習 A  | 西洋哲学の原典を、翻訳を参考にしながら精読することを通じて哲学的思考に親しみ、そこで問われている哲学的テーマに対して各自の問題意識に従いながら解釈していくとともに、それを自らの言葉で表現していく能力を身に付けることを目指す。読解テキストは、西洋近世哲学の代表的な著作、たとえばデカルト『省察』、スピノザ『エチカ』、ライブニッツ『モナドロジー』などから抜粋して取りあげる。各自テキストを予習しておくことが求められる。   |  |
|                                   |         | 哲学演習 B  | 本授業では、西洋哲学(主に近現代の古典的著作)の原典講義を行う。原典の精読をつうじて哲学的思考に親しみ、そこで問われている哲学的テーマに対して各自の問題意識に従いながら解釈していくと共に、それを自らの言葉で表現していく能力を身に付けることが本授業のねらいである。テキストとしては、ロック『人間知性論』、パークリ『人知原理論』、ヒューム『人間本性論』など、主としてイギリスをはじめとする英語圏の著作を取り上げる。   |  |
|                                   | 倫理学基礎演習 | この授業では、倫理学の古典的な作品の主要な部分をいくつか取りあげ、これを読解し、またそれに基づいて議論を行う。まず議論の前提として、取りあげる哲学者や作品の基本的な予備知識を講義形式で学んだのちに、実際に古典的な作品の一部分を、輪読形式で読み進める。そのことを通じて、倫理学という学問の基本的な方法論や課題についての理解を深めるとともに、今後の演習形式の授業で必要となる、古典読解と他の受講者との討論の方法を、受講者各自が身に付けることを目指す。 |   |  |

|                                   |   |   |  |
|-----------------------------------|---|---|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) |   |   |  |
|                                   | 倫理学演習 A   | この授業では、古代ギリシアにはじまり近現代の欧米や日本に至る倫理学の歴史のなかで、古典的な位置を占める作品をひとつ選んで、これを読解し、またそれに基づいて議論を行う。読解のために必要な予備知識を押さえたうえで、輪読形式で選んだ作品を読み進めていく。このことを通じて、とりあげた古典ないしはその著者についての理解を深めるとともに、卒業論文の製作のために必要となる、古典的な作品を読解するための基本的な能力を受講者各自が身に付けることを目指す。                            |  |
|                                   | 倫理学演習 B   | 西洋の倫理学に関わる代表的な著作の読解を通じて、倫理的思考や方法論に親しみ、そこで問われている問題の所在を理解し、それを自分なりの仕方でも表現する能力を身に付けることを目指す。授業の進め方としては、前半は、古代から近世にかけての基本文献からの抜粋を資料として、グループごとに内容解説形式の授業を行ってもらおう。後半は、近世の代表的哲学者の著作、たとえばデカルト『情念論』、スピノザ『エチカ』、ライプニッツ『弁神論』などからの抜粋を材料として、グループごとに発表を行ってもらおう。         |  |
|                                   | 宗教哲学演習 A  | 授業では、哲学・倫理学・宗教学の基本的文献を正確に読み解く能力の習得を目指す。また、基本的文献の読解を通じて、各自の問題意識にもとづきながら「問い」を設定し、それに対する考察や解釈を、自らの言葉で論理的に表現していく能力を習得することを目指す。受講者各自の関心にもとづき文献を選び、各回とも担当者が決められた範囲の内容について報告し、他の参加者がその発表を検討する、という形式で授業を進めていく。  |  |
|                                   | 宗教哲学演習 B  | 本授業では、哲学・倫理学・宗教学の原典テキストを、翻訳や解説書等を参考にしながら読解することができるようになることを目指す。同時に、自分なりの問題意識に立つてテキストの解釈・考察を行い、自らの言葉で論述・表現する能力を養うことを目指す。授業の中心となるのは、各自の興味・関心に即した文献読解作業である。受講生は、各自選択した文献について、その考察報告を行い、参加者で検討しあう形式で授業を進めていく。  |  |
|                                   | 宗教倫理学演習 A   | 本授業は、倫理学・哲学・宗教学の論文作成の方法を学び、最終的に論文としてまとめ上げることを目的とする。倫理学・哲学・宗教学に関して、まず自分なりの「問い」を持つことから出発し、基本となるテキストを読解していくなかで、各自が論文テーマを設定する。さらに、テーマに即してテキストの読解を深め、論文の形に仕上げていく。授業の具体的な進め方としては、関連する研究論文や先行研究を参照しながら各自で資料を作成して発表し、それを参加者で検討しあう形を想定している。                      |  |
|                                   | 宗教倫理学演習 B   | 本授業は、倫理学・哲学・宗教学の論文作成の方法を学び、最終的に論文としてまとめ上げることを目的とする。倫理学・哲学・宗教学に関して、まず自分なりの「問い」を持つことから出発し、基本となるテキストを読解していくなかで、各自が論文テーマを設定する。さらに、テーマに即してテキストの読解を深め、論文の形に仕上げていく。各自の論文テーマに関連する研究論文や参考文献の分析・考察をまとめて発表資料として作成し、その資料に基づいてディスカッションする形で進めていく。                     |  |
|                                   | 日本史書講読 I  | 学校教育で一般的な日本史に関わる史料や文献をもとに、研究の変化や変化の背景を考察する。特に社会科歴史教育で基礎となる文献や資料について、読解の技術を深めるとともに、情報を整理し、仮説を作って検証する能力を高めていきたい。特に近現代に関する諸研究についての文献等を読んで、どのような問題があり、どのように研究が進められ、何が達成され、何が課題として残されているのか、などを探究していく。それらの経験を重ねることで、将来、教員として自分なりに教科や教材の研究を行っていくための力量を培ってもらおう。 |  |
|                                   | 日本史書講読 II   | 日本の、特に中世史に関わる史料を取り上げ、その読解の技術を深めるとともに、そうして得た情報をどのように整理し、自分なりの仮説を作っていくのかという能力も高めていきたい。そのためには、取り上げた史料に関わるこれまでの諸研究についての文献を読んで、どのような問題があり、どのように研究が進められ、何が達成され、何が課題として残されているのか、などを探究していく作業が求められる。それらの経験を重ねることで、将来、教員として自分なりに教科や教材の研究を行っていくための力量を培ってもらおう。      |  |
| 地域史演習 I                           | 歴史や社会の諸事象を捉えていく場合、それが生起している地域の特性を踏まえて考察することは研究上の重要な視点となる。日本史でも世界史でも、ある地域での出来事がより広い地方での状況を作り出す要因となり、それがひいてはある集団や国家、民族などのありようにも関わっていく。そうした視点は現在の歴史研究においても、重視されているものである。そのような地域からの視点によって歴史を再構成していく作業を、具体的な史料の読解を通して進めていく。それによって、受講生が将来、自ら起用度学習や教材研究に関わっていくための素養を培っていく。 |   |  |
| 地域史演習 II                          | 地域史演習 I において、地域の歴史を考察する力量を高めたことを踏まえ、次にはそれをより広い地域史や政治史、国家史などにつなげていくための作業を進める。そのためには幅広く史料を読み解く作業とともに、従来の諸分野の研究文献を読み、その中に自分の考察の結果を位置づける作業も重要になる。受講生には、関係史料を読解し、かつそれに関わる文献のレポートなどを作成・報告することを、教員の始動の下に分担して進めてもらう。それによって、受講生が自らの視点で歴史や社会を捉え、的確に説明できるような力量を高めていきたい。        |   |  |

|                                   |      |           |   |  |
|-----------------------------------|------|-----------|---|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | (社会) | 日本史基礎演習   | 日本史やそれを対象とする社会科教育の分野において、より専門的な学修を進めるための基礎固めを行う。自ら課題を見出し、それを探究することが要求される専門分野の研究に踏み込むためには、専門の学術書や論文を探し、それを読み込んで理解する力、整理し報告する力、さらにその根拠となる資料を自ら取り扱う力などが必要になる。そのことを受講生にじかくしてもらうため、実際に諸文献や資料にも接しながら、それらとどのように関わっていけばよいのか、教員からの始動と受講生からの報告を組み合わせつつ、授業を進めていく。  |  |
|                                   |      | 日本史応用演習   | 日本史やそれを対象とする社会科教育の分野において、専門的な学修の成果を卒業研究として結実させるための、教員からの指導と受講生からの報告を組み合わせた授業となる。その際に重視するのは、卒業研究にむけて、どれだけ次節の根拠となる資料を探し、それを利用してきているのか、そこから得られた情報がどれだけ正確なものであるのか、それによって推論された内容がどれだけ説得力を有するものなのか、そしてそれらを明確な文章で説明できているか、などの点である。そうした研究のための能力を高めていくことが、この授業の目的になる。  |  |
|                                   |      | 外国史書講読 I  | 外国史の史料・研究書の読解を通じて、歴史研究に必須となる基礎的な語学力を身に付けるとともに、史料批判や史料解釈の方法を学ぶ。歴史の考察に当たり、これまでの研究成果と、それらの根拠となる原典史料を読解する力は必須の能力であるが、外国史の場合、それらの多くは日本語以外の外国語で書かれており、特に史料は古典的な言語である場合が多い。古典的な言語は、表面的な読解だけでは文意をつかむことが困難であり、文脈や典拠・訓詁を確認しながら読み進めることが必要である。この授業は、特定のテキストを題材として、受講生に担当を割り振り、参加者同士で討論しながら会読する形で進行する。担当者は翻訳するだけではなく、これまでの解釈を確認し、関連史料も参照することで、自身の解釈を根拠付けるための注釈の作成が求められる。こうした作業を通じて、歴史の解釈の方法を基礎から身に付けることを目的とする。 |  |
|                                   |      | 外国史書講読 II | 外国史書講読 I に引き続き、外国史の史料・研究書の読解・解釈を実践的に学ぶ。外国史書講読 II では I よりも専門的なテキストを選択し、また担当者は関連する情報を幅広く参照して深く検討することが求められる。担当者以外の出席者にも、あらかじめ読解した上での出席を求め、個々の文章の解釈に当たって、相互に活発な批判や討論を行うことを義務づける。こうした作業を通じて、歴史の解釈の方法をより実践的に深く学ぶことを目的とする。   |  |
|                                   |      | 外国史基礎演習   | 日本史やそれを対象とする社会科教育の分野において、より専門的な学修を進めるための基礎固めを行う。自ら課題を見出し、それを探究することが要求される専門分野の研究に踏み込むためには、専門の学術書や論文を探し、それを読み込んで理解する力、整理し報告する力、さらにその根拠となる資料を自ら取り扱う力などが必要になる。そのことを受講生にじかくしてもらうため、実際に諸文献や資料にも接しながら、それらとどのように関わっていけばよいのか、教員からの始動と受講生からの報告を組み合わせつつ、授業を進めていく。  |  |
|                                   |      | 外国史応用演習   | 日本史やそれを対象とする社会科教育の分野において、専門的な学修の成果を卒業研究として結実させるための、教員からの指導と受講生からの報告を組み合わせた授業となる。その際に重視するのは、卒業研究にむけて、どれだけ次節の根拠となる資料を探し、それを利用してきているのか、そこから得られた情報がどれだけ正確なものであるのか、それによって推論された内容がどれだけ説得力を有するものなのか、そしてそれらを明確な文章で説明できているか、などの点である。そうした研究のための能力を高めていくことが、この授業の目的になる。  |  |
|                                   |      | 地理学基礎 II  | 地理学では地域ごとの統計データを地理行列という形式で整理し分析することで、地域の特色や地域差の解明を試みる。そこで、この授業では地理行列を用いて、地域に関する様々な分析手法を学ぶ。さらに、日本にはどのような統計データが存在するのかを学習する。他にも生成した統計データを主題図に変換することを体験し、主題図の適切な表現手法について学習する。統計データの分析では表計算ソフトウェアEXCELを利用し、地図の作成に対しては、主題図作成支援システムMANDARA (フリーソフト) を利用する。また、統計データ以外にも様々な地域分析に利用できる地図類がある。これらの分析手法についても学ぶ。   |  |
|                                   |      | 地理学研究法 I  | 人文地理学・地理教育の学術論文・レポートの作成に必要な「地理学的視点・研究法」の習得を目指す。多くの人文地理学・地理教育論文を読みながら、先行研究のまとめ方と論文の読み方を学ぶとともに、学術論文やレポート作成のための調査法、論理的な文章の書き方を身に付ける。授業は発表・演習形式が基本となる。  |  |
|                                   |      | 地理学研究法 II | 人文地理学・地理教育の学術論文・レポートの作成に必要な「地理学的視点・研究法」の習得を目指す。多くの人文地理学・地理教育論文を読みながら、先行研究のまとめ方と論文の読み方を学ぶとともに、学術論文やレポート作成のための調査法、論理的な文章の書き方を身に付ける。授業は発表・演習形式が基本となる。  |  |

|                                   |             |   |  |
|-----------------------------------|-------------|---|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | 地理学演習       | 本演習は、4年次の卒業研究を視野に入れながら、各人が特定のテーマを決めて、文献・フィールドワークを行って地理学レポートの習作をまとめることで、地理的見方・考え方を培い、地理的観点から物事を考察する能力を養うことを目的とする。具体的には、文献調査法、対象地域の選定とその過程、野外調査における土地利用・景観観察法、聞き取り調査法、調査結果の集計と分析手法、論文の文書作法等に関する講義とそれに基づいた演習を行い、地理的見方・考え方に基づいた研究手法と考察、そして論文作成の力量育成を目指す。  |  |
|                                   | 地理学実験       | 地理学にとって、景観や土地利用から地域の特徴を読みとったり、地図化をとおして人文・自然の諸現象を理解したりするスキルは、学問を支える基礎と言ってもよい。本授業では、地理学者の道を歩んできた研究者たちが若手のころに書いた「学術論文」を読解し、また『地域調査ことはじめ』を通じて調査方法やその苦労、得られた喜びなどを知ってもらいたい。授業では以下の点について特に留意する。1) 対象地域と調査テーマの選び方(どこで何を調べるか?)、2) 調査の始め方、フィールドワークへの入り方(どこから手をつけるか?誰に話を聞か?)、3) データの集め方(定量的データと質的データの違い)、4) データのまとめ方(地図とグラフの作り方)、5) 調査結果のまとめ方。これらのスキルは、同様に初等・中等の社会科教育や地歴を教えるうえでも役に立つ素養であろう。また、本授業は3年次に受講する地理学演習、4年次の地理学卒業論文作成までの道筋を念頭においている。 |  |
|                                   | 地理学論文演習 I   | 主に人文地理学や地理教育の研究動向を理解するとともに、人文地理学・地理教育とは何かを考える。また、討論を通じて質疑・応答などの技法を取得する。日本および外国の人文地理学・地理教育論文を各自が発表形式で紹介し、それをもとに全体で質疑・応答を行い、当該論文の理解とともに地理的見方・考え方の視点を学び、討論形式の授業の経験と積む。各回ともに、2名の発表者による発表と質疑応答、討論の演習形式で行う。   |  |
|                                   | 地理学論文演習 II  | 主に人文地理学や地理教育の研究動向を理解するとともに、人文地理学・地理教育とは何かを考える。また、討論を通じて質疑・応答などの技法を取得する。日本および外国の人文地理学・地理教育論文を各自が発表形式で紹介し、それをもとに全体で質疑・応答を行い、当該論文の理解とともに地理的見方・考え方の視点を学び、討論形式の授業の経験と積む。各回ともに、2名の発表者による発表と質疑応答、討論の演習形式で行う。   |  |
|                                   | 地理学論文演習 III | 主に人文地理学や地理教育の研究動向を理解するとともに、人文地理学・地理教育とは何かを考える。また、討論を通じて質疑・応答などの技法を取得する。日本および外国の人文地理学・地理教育論文を各自が発表形式で紹介し、それをもとに全体で質疑・応答を行い、当該論文の理解とともに地理的見方・考え方の視点を学び、討論形式の授業の経験を積む。各回ともに、3名の発表者による発表と質疑応答、討論の演習形式で行う。   |  |
|                                   | 地理学論文演習 IV  | 主に人文地理学や地理教育の研究動向を理解するとともに、人文地理学・地理教育とは何かを考える。また、討論を通じて質疑・応答などの技法を取得する。日本および外国の人文地理学・地理教育論文を各自が発表形式で紹介し、それをもとに全体で質疑・応答を行い、当該論文の理解とともに地理的見方・考え方の視点を学び、討論形式の授業の経験を積む。各回ともに、4名の発表者による発表と質疑応答、討論の演習形式で行う。   |  |
|                                   | 地理学野外実験 I   | 人文地理学・地理教育を中心としたフィールドワークを行うとともに、各自で調査テーマを決めて現地調査に挑戦したり、地理教育で役に立つ施設を見学したり、地理教材開発の提案を行ったりする。現地でのフィールドワークの前に資料収集などの予備調査を行い、その成果を発表する。その後、現地に入り、調査を行う。調査終了後、調査結果を分析し、それについて発表する。  |  |
|                                   | 地理学野外実験 II  | 人文地理学・地理教育を中心としたフィールドワークを行うとともに、各自で調査テーマを決めて現地調査に挑戦したり、地理教育で役に立つ施設を見学したり、地理教材開発の提案を行ったりする。現地でのフィールドワークの前に資料収集などの予備調査を行い、その成果を発表する。その後、現地に入り、調査を行う。調査終了後、調査結果を分析し、それについて発表する。  |  |
|                                   | 地誌概説 III    | 本講義は、アメリカ合衆国を対象にその性格を自然環境・政治・経済・社会・文化の多面的視野から総合的に理解することを目的とする。合衆国は中等教育の社会科において、必ず世界地誌の一部として取り上げられる地域であるが、その全容についてじっくり学ぶ機会が限られているのが現状である。本講義では合衆国の自然環境、歴史、地域区分など基礎的な内容について包括的に講義し、合衆国の全体像と地域区分概念を理解する。その上で、アメリカ社会や政治を支える独自の合理主義や思想についてさまざまな地域の事例から合衆国の多様性を検討する。  |  |
|                                   | 法学演習 I      | この授業では、以下の事柄を行うことにより、法学の基礎を身に付け、また法学分野での論文を書くための基本的な知識を獲得することを目指す。その際、基本的な知識の伝達が求められる際には講義形式で授業を行うこともあるが、基本は学生の主体的な学びと発表によって授業は構成される。①法とはなにかを知る。②法の解釈について学ぶ。③裁判制度について知り、判例を読むようになる。④法学分野の文献検索を行う。⑤文献の精読を行い、その内容について発表を行う。⑥アカデミック・ライティングについて学ぶ。  |  |

|                                   |      |            |   |  |
|-----------------------------------|------|------------|---|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | (社会) | 法学演習 II    | この授業では、学生個人の研究関心に基づき、法学分野の小論文の執筆を行う。その際、「法学演習 I」で学んだアカデミック・ライティングの知識、文献検索を行うスキル、そして文献を正確に読むスキルを活用することが求められる。なおこの小論文は、卒業論文のテーマを選択するための基礎学習としての性格と、学術論文を執筆するための基本的なルールを学ぶ機会としての性格を併せ持つ。こうした小論文執筆を通して、学術的論文のテーマ選択を行う際に気を付けるべき点はどのようなことなのか、学術的な文章といえるために気を付けるべき点はどのような内容かを知ることを目指す。                     |  |
|                                   |      | 法学演習 III   | この授業では、学生個人の研究関心に基づいた卒業論文の執筆に向けた準備を行う。その際、「法学演習 I」及び「法学演習 II」での学習の成果を活かすことが必須である。授業は、学生が自身の卒業論文のテーマに関連する文献を選び、その内容を報告し、皆で議論することで進んでいく。まずは自身が選択した研究テーマの先行研究を網羅的に読み、これまでの研究のなかで明らかになっていること、明らかになっていないことを明確にする。そのうえで、自身の研究では何を論じ、何を明らかにするのかを意識しながら卒業論文執筆に向けた準備を進めることを目指す。                              |  |
|                                   |      | 現代社会学演習 I  | 本講義では、インタビューを中心とする質的社会調査についてテキストを用いながら、テーマ設定、調査設計、調査の実施、結果分析という手順に沿って習得する。またその後、自らの関心に基づいたテーマを選んで、実際にそれに関する社会調査を実施することで、調査技法を実践的に習得する。具体的には、テキスト『質的社会調査の方法』を順に学生が担当を割り振ってレジュメを作って発表し、討論して内容の理解を深める。またその後、自らの研究テーマを選び、それを先行研究を学びながら社会的な仮説として調査可能な形に整え、実際に調査を計画し、簡単な調査を実施し、プレゼンテーションを行う。              |  |
|                                   |      | 現代社会学演習 II | 本講義では、『はじまりの社会学』をテキストに用いて、さまざまな社会現象を研究する際に、どのような研究領域があるのか、またそこでの代表的な議論のあり方について学んでいく。具体的には、テキストの各章を学生がそれぞれ担当して発表し、その内容について解説する。またコメントーターが各章の内容に該当する社会現象を探してきて、討論の題材として紹介する。これに基づいた討論の中で、特定の社会現象を社会学の対象として考察する方法について学んでゆく。また後半では卒業研究に向けて自らのテーマを考えていく参考として、各学生の関心に基づいて社会学の論文ないし著作を各々一つずつ選んで発表する。       |  |
|                                   |      | 社会調査実習     | 本実習では、社会調査の実際の手順を理解し、また自らテーマを定めて、基本的な社会調査を実施できることを目標とする。また既存の先行研究における調査結果の分析を踏まえた上で、自らの調査報告書をまとめて上げられることが目標である。具体的にはまず自らの関心に基づいてテーマを選び、社会学の関連する先行研究をそれぞれ探索し、内容を理解し授業内で紹介を行い、自らの問いを社会的に定式化し、調査仮説を立てる。仮説に基づいた調査設計を行い、主に夏季休暇中に調査を行い、結果を報告し、分析を行い、論文にまとめる。  |  |
|                                   |      | 現代社会学研究 I  | 本講義の目標は、様々な具体的な社会現象を取り上げ、それを社会学の先行研究においてはどのように捉えてきたか、またそれをどう調査し、結果を分析したかを紹介し、また自らの関心テーマに基づいて調査研究について設計までを行う。受講生が主体となった発表・討議で講義を進めていく。具体的には、学生が各自が関心あるテーマを定めて、その社会的な先行研究がどの領域のものか考え、文献を探索し、発表する。また自らの問いを考え、それに基づいてどのような社会調査が可能か、設計まで行う。  |  |
|                                   |      | 現代社会学研究 II | 本講義の目標は、Iに続いて、学生各自がそれぞれの関心に基づいて様々な具体的な社会現象を取り上げ、先行研究を渉猟し、比較検討し自らの視角を定めるとともに、自らの問いを設定し、それを社会調査の仮説として調査可能な形へと変形する。その後それぞれ仮説をどう調査し、どのように結果を分析するかについて、先行研究を参考にしながら見通しまで立てる。具体的な調査対象者の集まりについての考察と、分析結果の適応領域について等、社会調査と社会理論の関係についても学ぶ。  |  |
|                                   |      | 国際経済学      | 自由化、国際化が進んだ現在の世界経済においては、世界各国は自国のみに注力した経済運営をすることは難しく、他国との関係性や世界全体を包括的に理解することが重要となってきた。自由化、国際化はまた、従来の世界に比べ、企業や個人に対しても世界経済との関係性を意識した経済活動をするのを余儀なくさせている。<br>本講義ではその様な時代に対応すべく、世界経済の構造分析を行い、世界でどのような経済的問題が生じているのか、様々なトピックごとに学習し、世界経済について俯瞰的な視野を身に付ける。その際、主に貿易、国際金融、多国籍企業、世界経済体制、発展途上国と開発の問題に焦点を当てて学習を行う。 |  |
|                                   |      | 経済学演習 I    | 社会において、経済や金融と全く関わらずに過ごすことのできる人間はいない。しかし、経済や金融について、何らかの形で学ぶ機会のないまま、社会に出ることが多い。それは貯蓄の概念であったり、主権を持つ消費者としての必要な知識であったり、負債や投資の活用であったり、社会保障や保険なども挙げられる。社会に出る際に必要とされる経済、金融の学習範囲にはキャリア教育やライフプランニングなども含まれる。ここでは社会生活を送るうえで、知っておくべき経済や金融に関する基礎知識について、演習形式で広く学ぶことを目的とする。   |  |

|                                   |      |                |   |  |
|-----------------------------------|------|----------------|---|--|
| (義務教育専攻科目)<br>(専攻科目群)<br>(専門教育科目) | (社会) | 経済学演習Ⅱ         | <p>今日の経済において、政府の役割は大きくなってきている。市場の失敗や急激なリセッション、循環的な不景気などに対処するため、経済政策の重要性は高まっている。また地域に目を向ければ、各自治体は人口減少時代において、それぞれの置かれた状況に応じた政策課題に対応する必要がある。本講義では政府や自治体が経済に働きかける手段である経済政策について理解を深めることが目的である。</p> <p>そういった経済政策は様々なものがあるが、その実施主体である政府や自治体の基本機能についての理解がなければ、経済政策を理解することは難しい。この演習では、経済の中で政府や自治体に求められる役割と、その行動に関するインセンティブといった点を理解することを目的としている。地域が抱える経済問題などについては、自治体と連携しつつ、課題解決型の学習を目指す。</p> |  |
|                                   |      | 国際金融論実習Ⅰ       | <p>1980年代より注目を集めるようになってきた「金融化（ファイナンシャリゼーション）」について、とりわけそれが国際的な通貨危機を伴い、世界経済に大きな影響力を持つようになったことについて、その身近な世界への影響を具体的にイメージしながら国際金融について学ぶことが本講義の目的である。その際、証券取引所や日本銀行などへの訪問学習を通じて、イメージのしにくい金融の世界を、実体験を伴った理解ができるように実習形式の授業形態をとる。そして、金融について、他者に教える際にどういった点が理解しやすく、どういった点が理解しにくいのか、教育に際して具体的な課題を見つけながら、国際金融全般の知識を深めていく。</p>  |  |
|                                   |      | 国際金融論実習Ⅱ       | <p>現在の世界経済に大きなウェイトを持つ国際金融について、国際金融システムの構造という観点で学習を行う。ここでは戦後から現在の国際通貨体制を中心に、貨幣、金融機関、金融市場、金融政策といったものが複雑に絡み合っている事を資料調査等から学習する。主なテーマは変動相場制移行後に続発している世界規模での金融危機について個別事象と理論との両面からの学習である。また、その過程で経済学的方法論を身に付けることも目標とする。</p>  |  |
|                                   |      | 社会科教材研究Ⅰ（公民分野） | <p>本授業の目標は、次の（１）～（７）のテーマについて、中学生や高校生が、社会科、公民科の授業において、多面的・多角的に考察できる教材を開発することである。</p> <p>（１）少子高齢化・情報化・グローバル化が政治、経済、国際関係に与える影響（２）文化の継承と創造の意義（３）物事の決定の仕方、契約、きまりの役割（４）個人や企業の経済活動における役割と責任（５）職業の意義と役割及び雇用と労働条件の改善（６）国や地方公共団体が果たす役割（７）財政と租税の役割</p> <p>本授業では、（１）～（７）のテーマについて、「多面的・多角的に考察する」ために必要な教材について検討を行った上で、各自の教材研究の成果を発表する。</p>  |  |
|                                   |      | 社会科教材研究Ⅱ（公民分野） | <p>本授業の目標は、次の（１）～（７）のテーマについて、中学生や高校生が、社会科、公民科の授業において、多面的・多角的に考察できる教材を開発することである。</p> <p>（１）日本国憲法に基づいて政治が行われていることの意義（２）民主政治の推進と公正な世論の形成との関連（３）民主政治の推進と選挙など国民の政治参加との関連（４）地方自治と住民の自治意識との関連（５）日本国憲法の平和主義に基づいた安全と防衛（６）国際貢献を含む国際社会における日本の役割（７）よりよい社会を築いていくために解決すべき課題</p> <p>本授業では、（１）～（７）のテーマについて、「多面的・多角的に考察する」ために必要な教材について検討を行った上で、各自の教材研究の成果を発表する。</p>                                  |  |
|                                   |      | 社会科教材研究Ⅲ（公民分野） | <p>本授業の目標は、次の（１）～（７）のテーマについて、中学生や高校生が、社会科、公民科の授業において、多面的・多角的に考察し、構想できる教材を開発することである。</p> <p>（１）人工知能の進化による産業や社会の変化（２）災害時における防災情報の発信・活用（３）科学、芸術、宗教と社会生活との関わり（４）日本の伝統と文化（５）個人や企業の経済活動（６）市場における取引と貨幣（７）経済活動や起業を支える金融</p> <p>本授業では、（１）～（７）のテーマについて、「多面的・多角的に考察し、構想する」ために必要な教材について検討を行った上で、各自の教材研究の成果を発表する。</p>  |  |
|                                   |      | 社会科教材研究Ⅳ（公民分野） | <p>本授業の目標は、次の（１）～（７）のテーマについて、中学生や高校生が、社会科、公民科の授業において、多面的・多角的に考察し、構想できる教材を開発することである。</p> <p>（１）仕事と生活の調和と労働保護立法（２）消費者の保護と自立支援（３）少子高齢社会における財源の確保と配分（４）法に基づく公正な裁判の保障と裁判員制度（５）領土問題の平和的手段による解決（６）戦争の防止と世界平和（７）国際社会における文化や宗教の多様性</p> <p>本授業では、（１）～（７）のテーマについて、「多面的・多角的に考察し、構想する」ために必要な教材について検討を行った上で、各自の教材研究の成果を発表する。</p>  |  |

|             |  |   |  |
|-------------|--|---|--|
| 算数・数学       | 線形数学演習 I   | 「線形数学 I」で学ぶ内容やそれらに関する事柄について問題演習および補足を行う。行列の定義、演算法則および諸性質、逆行列、連立一次方程式の解法、行列の階数、行列式などの基本的事項、さらに、2次・3次元空間における直線や平面の方程式を通し、連立方程式や行列式の図形的な性質を学び、代数的・幾何学的な側面を有機的につなげるための演習も盛り込み、大学で学ぶ抽象的な数学を理解するために必要な基礎事項の定着を目指す。          |  |
|             | 微分積分演習 I   | 「微分積分 I」で学ぶ内容やそれらに関する事柄について問題演習および補足を行う。数列の極限、連続関数、逆関数、および一変数関数の微分法、テイラー展開、マクローリン展開および極値問題への応用など、微分積分、特に、微分法の基礎事項（計算技法も含む）に関する演習を行う。この演習では、高等学校の数学IIIで学んだ微分積分と「微分積分 I」で学ぶ事柄の橋渡しを意識し、大学で学ぶ数学の基礎となる事柄の定着を目指す。           |  |
|             | 線形数学演習 II  | 「線形数学 II」で学ぶ内容やそれらに関する事柄について問題演習および補足を行う。「線形数学 I」で学んだ行列に関わる具体的な計算との関係を意識しながら、抽象ベクトル空間、一次独立性・従属性、ベクトル空間をつなぐ線形写像とその行列表現、内積、固有値・固有ベクトルと固有空間、行列の対角化、および二次曲線の分類などの基礎事項に関する演習を行い、大学で学ぶ抽象的な数学を理解するために必要な基礎事項の定着を目指す。         |  |
|             | 微分積分演習 II  | 「微分積分 II」で学ぶ内容やそれらに関する事柄について問題演習および補足を行う。特に、積分法（計算技法も含む）や無限級数に焦点を当てる。有理関数、三角関数、指数関数や無理関数を含む関数の不定積分の計算技法、定積分やその面積・体積や曲線の長さへの応用、極限によって定義される広義積分の積分可能性、級数の収束・発散とそれらの判定法などに関わる演習を行い、大学で学ぶ数学の基礎となる事柄の定着を目指す。               |  |
|             | 解析学 A  | この講義では、複素数の必要性、および解析学との関連を示すことでその有用性を学ぶ。講義の前半では、オイラーの公式、3次・4次方程式の解法、正17角形の作図、代数学の基本定理などを学び、複素数の必要性および有用性を体験する。後半では、複素関数論の入り口、つまり、指数関数、対数関数、三角関数等、初等関数の複素変数版や、複素関数の微分法、コーシー・リーマンの関係式を通して正則関数に関わる基礎事項を学び「解析学特論」への導入とする。 |  |
|             | 代数和幾何の基礎   | 多角形や二次曲線などの平面図形や複素平面の幾何学的側面と、行列や方程式、および初等整数論などで学ぶ代数学的側面を有機的に関連付けて学ぶ。具体的には、代数方程式の根と複素平面、コンパスと定規・折り紙による作図、格子点の離散幾何と連分数、といった高等学校までに学ぶ数学の内容と密接に関連する素朴な数学的対象を、大学において新たに学んだ様々な数学を駆使することで、分野横断的に深く理解することを旨とする。               |  |
|             | 応用代数学  | 離散数学は高等学校までに系統的に学ぶ機会が少ないが、情報科学をはじめとする他分野への多様な応用が知られており、その重要性にゆるぎはない。この講義では、グラフ理論とそれに関係する代数を取り上げる。正則グラフ、平面グラフ、二部グラフなどの基本的なグラフの概念の理解と、握手の定理、オイラーの公式、Hallの結婚定理などの、よく知られる定理の紹介とその証明を行う。また、群作用の考えを用いた、グラフ彩色の数え上げも扱う。       |  |
|             | 代数学 A  | 中学校数学における文字と式（単項式、多項式）、その展開及び因数分解といった内容のバックグラウンドとなる代数系の諸概念を理解し、代数学の基礎的な知識、および、代数学的な思考力を修得することを目標とする。「代数学概論」で学習した内容を前提として、多項式環の構成から出発し、多項式の除法の定理、剰余定理と因数定理、また整数環や体上の多項式環の自然な一般化であるユークリッド整域、単項イデアル整域へと進む。               |  |
|             | 幾何学 A  | この講義では、まずユークリッド空間における開集合について学び、1年次の微分積分学で扱った連続関数の概念が、開集合を用いて記述できることを理解する。その上で、同相という同値関係やコンパクト性、連結性、ハウスドルフ性といった位相空間の性質についての理解を深める。さらに、位相が定められた集合「位相空間」は、伸縮自在な図形と理解できるが、その具体例として低次元多様体を取り上げ、特に、閉曲面の分類について学ぶ。            |  |
|             | 解析学 B  | 数理学や社会科学分野における基礎的な数学モデルには、しばしば微分方程式が登場し、その重要性が広く知られている。この講義では、具体的な数理モデル（例えば、増殖、振動、競合、惑星の運動など）に言及しながら、基礎的な常微分方程式および方程式系の解法、および、それらの解析手法を学ぶ。また、下級年次における「微分積分」や「線形数学」で学んだ基礎事柄とのつながりを強く意識し、既習事項の理解の深化と定着を目指す。             |  |
| コンピュータ実験と数学 | コンピュータを一つの実験ツールとして使い、試行錯誤を重ね体験的に数学的事実を確認し理解することを目指す。また、自ら数理実験を設計し、数理モデルの簡単なシミュレーションができるようになることを目指す。例えば、記述統計、極限定理・パーコレーションなどの確率現象、力学や生物個体数などの微分方程式モデル、音響などの波動現象に関わるシミュレーション、エラトステネスの篩・ユークリッド互除法・連分数等の整数論に現れる様々なアルゴリズムに関する数値実験を通じた活動が展開される。具体的事例を伴った奥行のある理解へと誘う。 |   |  |





















































































































































